

中小河川改修工事に伴う
文化財発掘調査報告書

原の前遺跡

1995年3月

島根県教育委員会

朝酌川中小河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

原の前遺跡



1995年3月

島根県教育委員会

20,000年前



6,000年前



1,500年前



1,000年前 PL-1



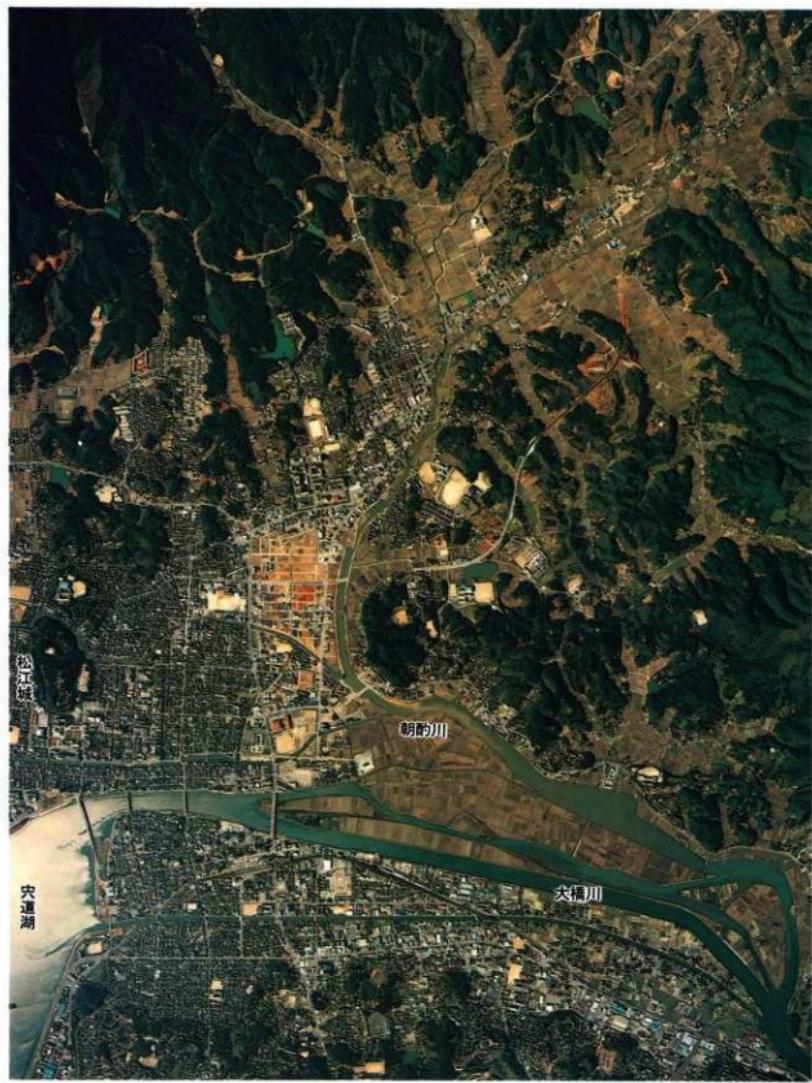
現在



クテチョウ遺跡、西川津遺跡、原の前遺跡。

朝酌川流域の遺跡の発掘調査が始まって20年以上が経ちます。地層を細かく観察し、たくさんの遺物を調べることで、朝酌川周辺の環境の変化や、人びとの暮らしが次第にわかつてきました。

谷の時代、海の時代から、川の時代・平野の時代へ。朝酌川流域はその顔つきを大きく変えていきます。流域に暮らす人びとは環境の変化に応じながら、長い間、暮らしてきたのです。



空から見る朝貢川（1990年：暫定掘削後）

河川改修は進み、原の前遺跡は二つに分割されて河川敷きになっている。



空から見る朝駒川（1974年：暫定掘削前）

東西に蛇行しながら流れている朝駒川の様子がよくわかります。また原の前遺跡がかって水田であったことが知れます。



空から見る朝鈴川（1947年：極東米軍撮影）

朝鈴川は1974年と大きく変わっていませんが、松江の町並みの変貌がよくわかります。

（国土地理院 119VV 31PRS M629 314CW 3. NOW. 47. 27より）



いままでは空から朝駒川とその流域の町並みの変化を追ってきました。かつての、といつてもほんの10数年前の朝駒川は今よりも川幅も狭く、曲がりくねった川であったことがよくわかります。上の写真はそんな当時の面影を今に残している数少ない風景なのです。しかし、これもまた江戸時代に新田開発と舟の通行のために、周りの湿地が埋め立てられ、川幅が固定された後の、つまり、ひとの手が加わった後の朝駒川の姿なのです。それでは、さらにむかしの朝駒川、『出雲国風土記』に「水草川」と記されたころ、それよりもさらに古い朝駒川とその水辺の風景とはどんな様子だったのでしょうか？

次のページからは発掘調査でわかった「朝駒川の歴史」をみていくことにしましょう。



朝駒川で見つかった最も古い舟着き場

今から1500年前（古墳時代前期）の川の岸辺に造られた。岸辺に一抱えほどの石を積み上げ、舟を留めるための杭も打ち込まれています。*55ページで詳しく



地震で折れ曲がった杭

船着き場に打たれていた杭は地震の力で「く」の字に折れ曲がっています。その側には新たに打ち込まれた杭も残っています。自然の猛威とそれに立ち向かう人々の逞しさをよく表わしています。



大地震の跡（今から1500年前）



液状化現象（今から1500年前）

地震の力で砂をふくんだ地下水が上の粘土層を引き裂き噴きだす液状化現象。これは震度5以上の大きな地震がこの地域を襲ったことを示しています。上の写真では砂が扇形に噴きあげて上の泥を貫いているのが良くわかります。*66ページで詳しく



今から1400年前の洪水のあと

普段は穏やかな川も時として変貌します。洪水で流された砂の中にはたくさんの土器が混ざっています。
流域のイエヤムラが被害にあったのでしょうか。*40ページで詳しく



奈良時代の川底に残された模様

水の流れの跡「流痕」が、その上に急速に堆積した砂れきで保存されていました。



川の堆積（I－北区南壁の地層：今から1400～1000年前）



川の堆積（II－日区南壁の地層：今から1500～1200年前）

「穏やかな川」と「荒れる川」。朝釣川はその顔つきを変化させながら徐々に流れを東（写真左側）に移していきました。流れの穏やかな時は泥を運び、流れの激しい時は砂を押し流して川は流れています。地層を観察することで川の変化をることができます。



砂礫とうつわ（古墳時代の須恵器）

川の中からは水辺で暮らしていた人々の生活の痕跡が見つかります。これらのうつわは私たちに当時の水辺の様子、川の流れていた時期を教えてくれます。



泥とはにわ（古墳時代の円筒埴輪）

平安時代の川あとに自然流木にひっかかって残されていました。故意に投げ捨てたのでしょうか？

序

この報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成4・5年度に実施した朝酌川中小河川改修工事予定地内に所在する原の前遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

この二か年にわたる調査では、今から1500～800年前ごろの朝酌川の遷り変わりや水辺の生活を知る貴重な土器や木製の道具類が多数出土しました。

平成4年度の調査では、およそ1500年前（古墳時代前期）の川の岸辺に造られた舟着き場跡が見つかりました。さらに、同じ頃、この地域を襲った大地震の跡も発見されました。発掘調査で地震跡が確認できたのは島根県では初めてのことです。平成5年度の調査では、およそ6300年前の宍道湖の湖底に降り積った鹿児島県の鬼界アカホヤ火山灰も見つかっています。さらに、平安時代の朝酌川に架けられていたと思われる橋脚も出土しました。

これらは、「湖の歴史」・「川の歴史」そして持田・川津地区の成り立ちを今日に伝える貴重な資料といえます。

本書が、朝酌川流域の人びとの暮らしやそれを取り巻く自然の営みに触れる契機となり、私たちの身のまわりに残されている多くの文化財への理解の手掛かりとして多少なりとも役立てば幸いと思います。

発掘調査および本書の刊行にあたって、御協力頂きました島根県土木部ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡義治



例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、島根県上木部河川課から委託を受けて1992（平成4）年度と1993（平成5）年度の二か年にわたって実施した、朝鈴川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を行った遺跡と地番は次の通りである。

原の前遺跡　島根県松江市西川津町1164-9番地ほか

西川津遺跡IV区（大内谷地区）同 647-1番地ほか

3. 調査組織は次のとおりである。

[1992（平成4）年度]

事務局　日次理雄（文化課長）、山根成二（課長補佐）

勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田 實（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　西尾克己（調査第3係長）、佐伯徳哉（同主事）、中村陵子（同臨時職員）、川上昭一（同臨時職員）

[1993（平成5）年度]

事務局　広沢卓嗣（文化課長）、山根成二（課長補佐）

勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田 實（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　西尾克己（調査第3係長）、間野大丞（同主事）、中村陵子（同臨時職員）、池淵高史（同臨時職員）

調査指導者　山本 清（島根県文化財保護審議会会長）、徳岡隆夫（島根大学汽水域研究センター長）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、大西郁夫（同理学部教授）、林 正久（同教育学部教授）、竹広文明（同汽水域研究センター助手）

4. 自然遺物および自然科学分析は、次の方々の協力を頂き、その結果を収録した。

イオウ分析：徳岡隆夫、粒度分析：大西郁夫、火山噴出物分析：高安克己（島根大学汽水域研究センター教授）、樹種鑑定：古野毅（島根大学農学部助教授）、石材鑑定：澤田順弘（島根大学理学部助教授）、液状化現象：西田良平（鳥取大学教養学部教授）、胎土分析：三辻利一（奈良教育大学教授）

5. 本書に掲載した土層堆積図面のうち、原の前遺跡II区および西川津遺跡IV区については、中村唯史（島根大学理学部地質学教室院生）が観察・分層し、調査担当者と記録を作成した。

また、土層堆積図面は基本的に土の種類をスクリーントーンで、土色については「標準土色帳」の略号を用いて表現している。堆積の新旧関係を明示する必要がある場合のみ、図中に番号を付けている。

6. 押印中の方向は国土調査法による第III座標系X軸の方向を指す。従って、磁北より7° 12'、真北より0° 32' 東の方向を指す。

7. 本書に掲載した「遺跡地図」・「調査区配置図」は「松江開都市計画図」を使用している。

また、「第2図 平面直角座標系」は、社団法人 日本測量協会発行の『建設省公共測量作業規程 解説と運用』図2・3をもとに作成した。

8. 遺物の実測は、西尾 佐伯、間野 中村、池淵のほか、安部孝幸、家塙英詞、木下 誠、久米 基、藤永照隆、増野晋次、水口晶朗、(以上、島根大学学生)、門脇卓子、吉田典子が行った。
- 遺物の写真は、主に間野が撮影したが、一部は牛飼 茂氏(奈良国立文化財研究所)、楠本 貞紀子氏(写房 楠草堂)に撮影頂いた。
9. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。
10. 出土木製品の保存処理は(財)元興寺文化財研究所に委託し、これを行った。
11. 本書の執筆・編集は、西尾 佐伯・間野が協議し、文化課職員の協力を得て行った。また、中村 唯史より多くの助言を頂いた。なお、歴史的環境の一部は、古代文化センター野々村安浩が記載した。文責は冒頭に表記した。
12. 調査にあたり協力および従事して頂いた方々は、次のとおりである。

調査協力

三宅博士(安来市教育委員会)、台郷雄二(松江市役所)、余村裕一(島根町教育委員会)、上原真人(奈良国立文化財研究所)、中井一夫(櫛原考古学研究所)、伊藤健司(財團法人 元興寺文化財研究所)、村上 勇(広島県立美術館)、清水真一(桜井市教育委員会)、栗野克己(財團法人 静岡埋蔵文化財研究所)、龜山雅弘(同)、内藤朝雄(同)、中山正典(同)、橋本敬之(同)発掘調査作業

安達多津子、井上節夫、井上三重、小川吉子、小草菊枝、小草美代子、奥田安昭、小田清子、片寄文夫、片寄轄福、金恵敦子、金森正輝、小西好巾、坂本善夫、佐々木一夫、白石八千代、仙田公男、仙田照子、仙田ミヤコ、高木正雄、田中みやこ、津森正義、富吉喜美子、野津章子、野津文夫、原 唯雄、平江末忠、福田英子、福田美代江、細木澄了、牧野益藏、牧野寺枝、宮廻 恒、村上春美、山陰 猛、吉岡英治、古岡シミ子、吉岡光子、和田隆徳
浅野秀光、安藤義範、井上秀晴、越後利正、岡田洋樹、沖辺一博、香川 琢、竪崎恒祐、勝部智明、柳山範、小割秀正、斎藤秀木、坂田 悟、坂木 強、柴田 岳、多田 洋、永田洋久、辻 亮介、柄原嘉明、宮古将平、西 大介、藤原一教、星野信男、松崎孝佳、松長直樹、宮下哲裕、望戸 尚、山本知広(以上、島根大学学生)、川西 学(奈良大学学生)、原 英寿(関西学院大学学生)、福田和成(上武大学学生)、田中 優(川崎医人短期大学学生)、石倉健一、長尾健太郎、長尾純一、宮崎昌明(以上、松江工業高校)

遺物整理

原田友美(島根大学学生)、赤井英了、善浪睦美、立脇由美、古岡典子

報告書作成作業

石川真由美、板垣見知了、内海紀子、門脇卓子、金森千恵子、守屋かおる

本文もくじ

序章

(1) 調査に至る経緯と経過	（間野）	1
(2) 遺跡の位置と歴史的環境	（西尾・野々村安浩）	4
(3) 原の前遺跡の地質と自然環境	（中村唯史）	10

第1章 原の前遺跡Ⅰ区の調査 (西尾・佐伯・間野) 13

(1) 調査の経過		13
(2) 遺構の概要		15
(3) Ⅰ河道と災害跡		27
a. 平安時代の河道		27
b. 奈良時代の河道		33
c. 洪水の跡（古墳時代の後期）		40
d. 古墳時代中期の河道		45
(4) 杭列遺構・地震の液状化現象		48
(5) 右紅渡岸遺構		55
(6) その他の遺物		60
(7) 小結 — 平成4年度調査の成果 —		62

自然科学分析(1)

原の前遺跡の液状化現象	西田良平	66
-------------	------	----

第2章 原の前遺跡Ⅱ区の調査 (西尾・間野) 73

(1) 調査の経過		73
(2) 遺構の概要		74
(3) 沢川改修以前の川と水田		75
(4) Ⅱ-A区の旧河道の遷り変わり		79
a. 層序		79
b. 粗砂層～江戸時代の河道～		84
c. 泥層～平安時代の河道～		84
d. 砂礫層～奈良・平安時代の河道～		99
(6) Ⅱ-B区の旧河道の遷り変わり		134
a. 層序		134
b. 泥層・砂礫層2～平安時代の河道～		140
c. 砂礫層1～古墳時代後期の河道～		142
(7) しがらみ状遺構		158

(8) 小結 — 平成 5 年度調査の成果 —	161
自然科学分析 (2)	163
原の前遺跡出土須恵器の螢光 X 線分析	三辻利・松井敏也 164
花粉分析からみた原の前遺跡について	人西郁夫 167
原の前遺跡出土木製品の樹種鑑定	古野 育 169
第 3 章 西川津遺跡 IV 区 (大内谷地区) の範囲確認調査	(間野) 175
第 4 章 原の前遺跡と周辺の古環境	徳岡隆大・大西郁夫・中村唯史・高安克己 181
第 5 章 まとめ	(西尾・佐伯・間野) 197

挿 図 目 次

序 章	
第 1 図 調査区配置図	1 第19図 平安時代の河道出土木製品実測図(2) 32
第 2 図 平面直角座標系	2 第20図 奈良時代の河道出土土器実測図(1) 33
第 3 図 遺跡位置図	3 第21図 しがらみ遺構検出面測量図 34
第 4 図 原の前遺跡と周辺の遺跡	4 第22図 しがらみ遺構実測図 34
第 5 図 律令制下の島根郡	5 第23図 奈良時代の河道測量図 35
第 6 図 原の前遺跡模式断面図	7 第24図 奈良時代の河道出土土器実測図(2) 36
第 7 図 朝釣川の堆積概念図	10 第25図 円筒埴輪実測図 37
第 8 図 原の前遺跡の歴史	11 第26図 奈良時代の河道出土木製品実測図(1) 38
第 1 章	12 第27図 奈良時代の河道出土木製品実測図(2) 39
第 9 図 調査区平面図	28 第28図 古墳時代後期初頭の洪水跡測量図 40
第10図 北区南壁土層堆積図 A-A'	29 第29図 古墳時代の洪水層出土土器実測図 41
17~18	30 第30図 古墳時代の洪水層出土木製品実測図 42
第11図 北区南半・東壁土層堆積図 B-B'	31 第31図 古墳時代の上層出土土器実測図 43
19~22	32 第32図 古墳時代後期初頭の河道測量図 44
第12図 北区北半・東壁上層堆積図 C-C'	23~26 第33図 古墳時代中期初頭の河道測量図 45
23~26	34 第34図 古墳時代の土層(最下層)出土土器実測図 46
第13図 平安時代の河道測量図	35 第35図 杭列遺構実測図 49
27	36 第36図 杭列上・中層出土土器実測図 50
第14図 土師器出土状況実測図	37 第37図 こま形土製品実測図 51
28	38 第38図 杭列下層出土土器実測図 52
第15図 平安時代の河道出土土器実測図(1)	29 第39図 杭列下層出土木製品実測図 54
29	
第16図 平安時代の河道出土土器実測図(2)	
29	
第17図 平安時代の河道出土木製品実測図(1)	
31	
第18図 人形実測図	
32	

第40図 石組護岸遺構実測図	55	第63図 橋脚・加工材実測図	88
第41図 古墳時代の石組護岸遺構出土上器 実測図	56	第64図 廃材出土状況実測図	89
第42図 石組護岸遺構周辺出土土器実測図	57	第65図 廃材実測図	89
第43図 石組護岸遺構出土木製品実測図	58	第66図 II-A区泥層出土木須恵器・土師器実測図	90
第44図 木製品実測図（1）	59	第67図 II-A区泥層出土木製品実測図（1）	91
第45図 木製品実測図（2）	60	第68図 II-A区泥層出土木製品実測図（2）	92
第46図 右器実測図	61	第69図 II-A区泥層出土木製品実測図（3）	93
自然科学分析（1）		第70図 II-A区泥層出土木製品実測図（4）	94
図1 砂地盤の液状化の過程	66	第71図 II-A区泥層出土木製品実測図（5）	94
図2 写真1の概略図	67	第72図 II-A区泥層出土木製品実測図（6）	95
図3 中国地方の被害地震の分布	68	第73図 II-A区泥層出土木製品実測図（7）	96
図4 山陰地方の地震活動の時系列	68	第74図 II-A区泥層出土木製品実測図（8）	97
図5 最近100年間の地震活動	70	第75図 II-A区泥層出土木製品実測図（9）	97
図6 最近の地震活動	71	第76図 II-A区泥層出土木製品実測図（10）	98
写真1 粘土層に貫入している砂脈	67	第77図 II-A区泥層出土木製品実測図（11）	99
写真2 液状化現象により折れ曲がった杭	67	第78図 砂礫層1須恵器出土状況実測図	99
		第79図 砂礫層1山上須恵器実測図	100
		表1 シジミ化石出土範囲	100
第2章		第81図 杓良～平安時代の河道測量図	101～102
第47図 II区調査区配図	73	第82図 II-A区砂礫層出土繩文土器実測図(1)	103
第48図 河川改修前の水田面遺構図	75	第83図 II-A区砂礫層出土繩文土器実測図(2)	105
第49図 埋設桶1実測図	76	第84図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(1)	106
第50図 埋設桶2・3実測図	77	第85図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(2)	108
第51図 旧水田面出土遺物実測図	78	第86図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(3)	109
第52図 II-A区北壁土層堆積図（A-A'）	80	第87図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(4)	110
第53図 II-A区西壁土層堆積図（B-B' 1）	81	第88図 II-A区砂礫層山上弥生土器実測図(5)	111
第54図 同（B-B' 2）	82	第89図 II-A区砂礫層出土弥生土器拓影	113
第55図 同（B-B' 3）	83	第90図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(1)	114
第56図 粗砂層堆積範囲	84	第91図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(2)	116
第57図 粗砂層出土漆器碗実測図	84	第92図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(3)	118
第58図 II-A区泥層山上土師器実測図	84	第93図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(4)	119
第59図 II-A区 自然流木・木製品出土状況 実測図	85	第94図 II-A区砂礫層出土土器実測図	120
第60図 泥層遺物出土状況実測図	86	第95図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(1)	121
第61図 II-A区泥層出土土師器実測図	86	第96図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(2)	123
第62図 橋脚出土状況実測図	87	第97図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(3)	124
		第98図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(4)	125

第99図 II-A区砂礫層出土須恵器尖測図(5)126	第133図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(5)157
第100図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(6)127	第134図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(6)157
第101図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(7)128	第135図 しがらみ状遺構全体図 158
第102図 II-A区砂礫層出土須恵器尖測図(8)129	第136図 しがらみ状遺構1実測図 158
第103図 II-A区山上平安時代上師器実測図 130	第137図 しがらみ状遺構2実測図 159
第104図 II-A区砂礫層出土ミニチュア土器・ 土製品実測図 132	第138図 しがらみ状遺構3実測図 159
第105図 II-A区砂礫層出土十円筒埴輪実測図 133	第139図 欠板状木製品検出状況実測図 160
第106図 II-A区砂礫層出土石鐵実測図 133	第140図 矢板状木製品実測図 160
第107図 II-A区砂礫層出土鐵鐵実測図 133	
第108図 II-A区砂礫層出土横櫛実測図 133	
第109図 II-B区南壁土層堆積図(C-C')135	自然科学分析(2)
第110図 II-B区東壁土層堆積図(D-D')136	三辻利一
第111図 II-B区西壁土層堆積図(E-E') 137~138	表1. 原の前遺跡出土須恵器、円筒埴輪の分析 データ 164
第112図 II-B区木製品・自然木・円筒埴 輪出土状況実測図 139	図1. 原の前遺跡出土須恵器、円筒埴輪のクラ スター分析 165
第113図 II-B区砂質泥層出土土師器実測図 140	図2. R b-S r分布図 165
第114図 II-B区砂礫層2出土須恵器 尖測図(1) 140	図3. K-C a分布図 165
第115図 円筒埴輪出土状況実測図 140	古野毅
第116図 円筒埴輪実測図 141	表1. 原の前遺跡出土木製品樹種鑑定結果 173
第117図 砂泥互層山上土曲物実測図 141	
第118図 II-B区砂礫層2出土須恵器実測図(2) 142	第3章
第119図 古墳時代後期の河道測量図 142	第141図 試掘調査区位置図 176
第120図 橋脚出土状況実測図 143	第142図 試掘調査区土層堆積図 178
第121図 橋脚実測図 143	第143図 試掘調査区出土遺物実測図 179
第122図 II-B区砂礫層出土繩文土器実測図 144	
第123図 II-B区砂礫層山上弥生土器実測図(1) 145	第4章
第124図 II-B区砂礫層出土弥生土器実測図(2) 146	第1図 調査地域 181
第125図 II-B区砂礫層出土弥生土器拓影 147	第2図 松江平野北東-南西断面 182
第126図 II-B区砂礫層出土土師器実測図 149	第3図 地層スケッチ 183
第127図 II-B区砂礫層出土須恵器実測図 151	第4図 試料採取地点 184
第128図 II-B区砂礫層出土土製品・石器 実測図 152	第5図 試料採取地点柱状図 184
第129図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(1) 153	第6図 泥分の平均粒径 185
第130図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(2) 154	第7図 含砂率 185
第131図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(3) 155	第8図 分級度・歪み度比較 185
第132図 II-B区砂礫層出土木製品実測図(4) 156	第9図 K-A h層の標高 186
	第10図 硫黄濃度 187
	第11図 原の前河床高変化 188
	第12図 朝鈴川流域の環境変化 190
	第1表 火山ガラスの主要成分 186

観察表目次

原の前遺跡 I 区

表1. 平安時代の河道出土土器観察表	30
表2. 奈良時代の河道山上土器（1）観察表	33
表3. 同 (2) 観察表	37
表4. 古墳時代の洪水層山上土器観察表	41
表5. 古墳時代の土層（中期と後期前半の間にある洪水層）出土土器観察表	43
表6. 古墳時代の上層（最下層）出土土器観察表	47
表7. 古墳時代の土層（杭列の上・中層）出土土器観察表	51
表8. 古墳時代の上層（杭列の下層）出土土器観察表	53
表9. 古墳時代の石組護岸造構出土土器観察表	57
表10. 古墳時代の右組周辺出土土器観察表	58

原の前遺跡 II 区

表1. II-A 区出土平安時代土師器・須恵器観察表	91
表2. II-A 区砂礫層出土縄文土器（1）観察表	104
表3. 同 (2) 観察表	105
表4. II-A 区砂礫層出土弥生土器（1）観察表	107
表5. 同 (2) 観察表	108
表6. 同 (3) 観察表	109
表7. 同 (4) 観察表	110～111
表8. 同 (5) 観察表	112
表9. 同 (6) 観察表	113
表10. II-A 区砂礫層出土土師器（1）観察表	115
表11. 同 (2) 観察表	117
表12. 同 (3) 観察表	118
表13. 同 (4) 観察表	119～120
表14. II-A 区砂礫層出土須恵器（1）観察表	122
表15. 同 (2) 観察表	124
表16. 同 (3) 観察表	125
表17. 同 (4) 観察表	125
表18. 同 (5) 観察表	126～127
表19. 同 (6) 観察表	127
表20. 同 (7) 観察表	129
表21. 同 (8) 観察表	130
表22. II-A 区出土平安時代土師器観察表	131

表23. II-A区砂礫層出土ミニチュア土器・土製品観察表	132
表24. II-B区砂礫層出土縄文土器観察表	144
表25. II-B区砂礫層出土弥生土器(1) 観察表	146
表26. 同 (2) 観察表	147
表27. 同 (3) 観察表	148
表28. II-B区砂礫層出土土師器観察表	150
表29. II-B区砂礫層出土須恵器観察表	151

写真図版目次

卷頭写真図版

- P L. 1 朝駒川流域の景観の変遷 (C G)
 P L. 2 空から見る朝駒川 (1990年:暫定掘削後)
 P L. 3 空から見る朝駒川 (1974年:暫定掘削前)
 P L. 4 空から見る朝駒川 (1947年:極東米軍撮影)
 P L. 5 旧朝駒川の景観 (1993年撮影)
 P L. 6 1. 朝駒川で見つかった最も古い舟着き場 2. 地震で折れ曲がった杭
 P L. 7 1. 大地震の跡 (今から1500年前) 2. 液状化現象 (今から1500年前)
 P L. 8 1. 今から1400年前の洪水跡 2. 奈良時代の川底に残された模様
 P L. 9 1. 川の堆積 (I-B区南壁の地層, 今から1400~1000年前)
 2. 川の堆積 (II-B区南壁の地層, 今から1500~1200年前)
 P L. 10 1. 砂礫とうつわ (古墳時代の須恵器) 2. 泥とねにわ (古墳時代の円筒埴輪)
 (原の前遺跡 I 区)

図版 1. 遺跡周辺空中写真 (1988年撮影)

- 図版 2-1. 原の前遺跡からみる西川津遺跡
 2. 調査前全景 (1988年撮影, 北から)
 3-1. 平安時代の河道 (南区, 南から),
 2. 平安時代の河道 (北区, 東から)
 4-1. 上師器出土状況 (D 4区, 北西から)
 2. 土師器出土状況 (D 4区, 南西から)
 5-1. 破碎された土師器 (D 4区)
 2. 並んで出土した土師器 (D 4区)
 6-1. 人形出土状況 (C 3杭周辺)
 6-2. 构文字状木製品出土状況 (D 3区)
 6-3. 灯明皿出土状況 (D 3区)
 7-1. しがらみ遺構検出状況全景 (南西から)

2. しがらみ遺構拡大 (北東から)
 - 8-1. しがらみ遺構完掘状況 (北西から)
 2. 奈良時代河道と流痕 (南から)
 - 9-1. 古墳時代後期初頭の洪水跡 (北東から)
 2. 同遺物出土状況 (南西から)
 - 10-1. 杭列遺構に伴う遺物出土状況全景 (南西から)
 2. 同 拡大 (土師器高坏, こま形土製品)
 - 11-1. 地震液状化現象 (北東から)
 2. 屈曲杭検出状況 (南西から)
 - 12-1. 杭列検出状況 (南西から)
 2. 杭列検出状況 (中央左は杭抜き取り痕, 南西から)
 - 13-1. 石組護岸遺構全景 (南東から)
 2. 石組護岸遺構全景 (東から)
 - 14-1. 石組護岸遺構土層堆積状況 (南東から)
 2. 石組護岸遺構上層堆積状況拡大 (南東から)
 - 15-1. 石組護岸遺構遺物出土状況 (南東から)
 2. 石組護岸遺構に伴う杭列検出状況 (南東から)
 - 16-1. 杭列遺構全景 (南西から)
 2. 杭列遺構部分 (北東から)
 17. 平安時代の河道・奈良時代の河道出土土器
 18. 奈良時代の河道・古墳時代の洪水層出土土器
 19. 古墳時代の洪水層・古墳時代中期の河道出土土器
 - 20-1. 古墳時代中期の河道出土土器
 2. 杭列遺構上・中層出土土器
 21. 杭列遺構上・中層出土土器
 22. 杭列遺構下層出土土器
 23. 石組護岸遺構・同周辺出土土器
 24. 石器・円筒埴輪・こま形土製品
 25. 木製品1 (用途不明・下駄・人形)
 26. 木製品2 (アカトリ状・鋤・用途不明)
 27. 木製品3 (杓文字状・曲物・折敷)
 28. 木製品4 (曲物・箸状・用途不明)
- (原の前遺跡II区)
- 図版29-1. 遺跡近景 (南から) 2. II-A区西壁上層堆積状況 (東から)
- 30-1. 旧朝駒川の護岸杭列 (南から) 2. II-A区東壁・粗砂層堆積状況
- 31-1. 埋設桶1検山状況 (南から) 2. 同 完掘後 (南から) 3. 同 正面 (南から)
- 32-1. 埋設桶1全景 (外側) 2. 埋設桶2・3検山状況 (西から)

3. 暗渠・土管検出状況（西から）

- 33-1. 橋脚検出状況（北から） 2. 橋脚検出状況（西から）
34-1. 廃材出土状況（西から） 2. 泥層・土師器出土状況（東から）
35-1. 人形山上状況（南から） 2. 用途不明木製品山上状況（東から）
36-1. 余良～平安時代の河道検出状況（南から） 2. 砂疊層1須恵器出土状況（南より）
37-1. II-A区砂疊層2土師器出土状況（103-10） 2. II-A区砂疊層1須恵器出土状況
(98-4)

--3. 同 (95-16)

- 38-1. シジミ化石検出状況（東から） 2. カニの巣穴の断面
39-1. II-B区東壁土層堆積状況（西から） 2. II-B区砂疊層2須恵器出土状況（西から）
40-1. 円筒埴輪出土状況（東から） 2. 円筒埴輪出土状況（南から）
41-1. 泥層自然流木出土状況（北から） 2. 曲物出土状況（北から）
42-1. 橋脚出土状況（北から） 2. 砂疊層・杭出土状況（東から）
43-1. II-B区砂質泥層土器出土状況（115） 2. II-B区砂疊層1土師器出土状況（126-19）
3. 同砂疊層須恵器山上状況（127-6）
44-1. しがらみ状造構1検出状況（南から） 2. 矢板状木製品出土状況（西から）
45-1. しがらみ状造構2検出状況（西から） 2. しがらみ状造構3検出状況（北から）
46-1. 発掘調査風景（1993年12月撮影） 2. 朝鈴川旧河道に架かる木橋
- 3. 朝鈴川の水辺風景
47. 河川改修以前の水田面出土遺物
48-1. II-A区出土橋脚 2. II-B区出土橋脚
49. II-A区粗砂層・泥層出土遺物
50. II-A区泥層出土木製品（1）
51. II-A区泥層出土木製品（2）
52. II-A区泥層出土木製品（3）
53. II-A区泥層出土木製品（4）
54-1. II-A区泥層出土木製品、2. II-A区砂疊層1山上須恵器 3. II-A区砂疊層出土
縄文土器（1）
55-1. II-A区砂疊層出土縄文土器（2） 2. II-A区砂疊層山上弥生土器（1）
56-1. II-A区砂疊層出土弥生土器（2） 2. 同（3）
57-1. II-A区砂疊層出土弥生土器（4） 2. 同（5）
58-1. II-A区砂疊層出土上師器（1） 2. 同（2）
59. II-A区砂疊層出土土師器（3）
60. II-A区砂疊層出土上師器（4）
61. II-A区泥層・砂疊層出土土師器・須恵器
62. II-A区砂疊層出土須恵器（1）
63. II-A区砂疊層出土須恵器（2）

64. II - A区砂疊層出土須恵器 (4)
65. II - A区砂疊層出土須恵器 (5)
66. II - A区砂疊層出土土師器
67. II - A区砂疊層出土土師器・ミニチュア土器・鐵鏃・土鍔
68 - 1. II - A区砂疊層出土ミニチュア土器・土製品・円筒埴輪 2. II - B区砂疊層出土石斧・
上玉
69. II - B区出土砂質泥層・砂疊層出土土器
70 - 1. II - B区泥層出土円筒埴輪 2. II - B区砂疊層出土繩文土器
71 - 1. II - B区砂疊層出土弥生土器 (1) 2. 同 (2)
72 - 1. II - B区砂疊層出土土師器 (1) 2. 同 (2)
73. II - B区砂疊層出土土師器 (3)
74. II - B区出土木製品 (1)
75. II - B区出土木製品 (2)

(自然科学分析)

76. 樹種鑑定 N o. 1 ~ 3 77. 同 N o. 4 ~ 6
78. 樹種鑑定 N o. 7 ~ 9 79. 同 N o. 10 ~ 12
80. 樹種鑑定 N o. 13 ~ 15 81. 同 N o. 16
82. 軟X線

(西川津遺跡IV区)

- 83 - 1. 遺跡遠景 (南から) 2. 第1調査区北壁土層堆積状況
84 - 1. 第2調査区東壁土層堆積状況 2. 第3調査区南壁土層堆積状況
85 - 1. 第4調査区南壁土層堆積状況 2. 鬼界アカホヤ火山灰の産状 3. 鬼界アカホヤ火山
灰顯微鏡写真
86 - 1. 第5調査区北壁土層堆積状況 2. 第6調査区北壁土層断面
87. 西川津遺跡IV区出土遺物



序 章

(1) 調査に至る経緯と経過

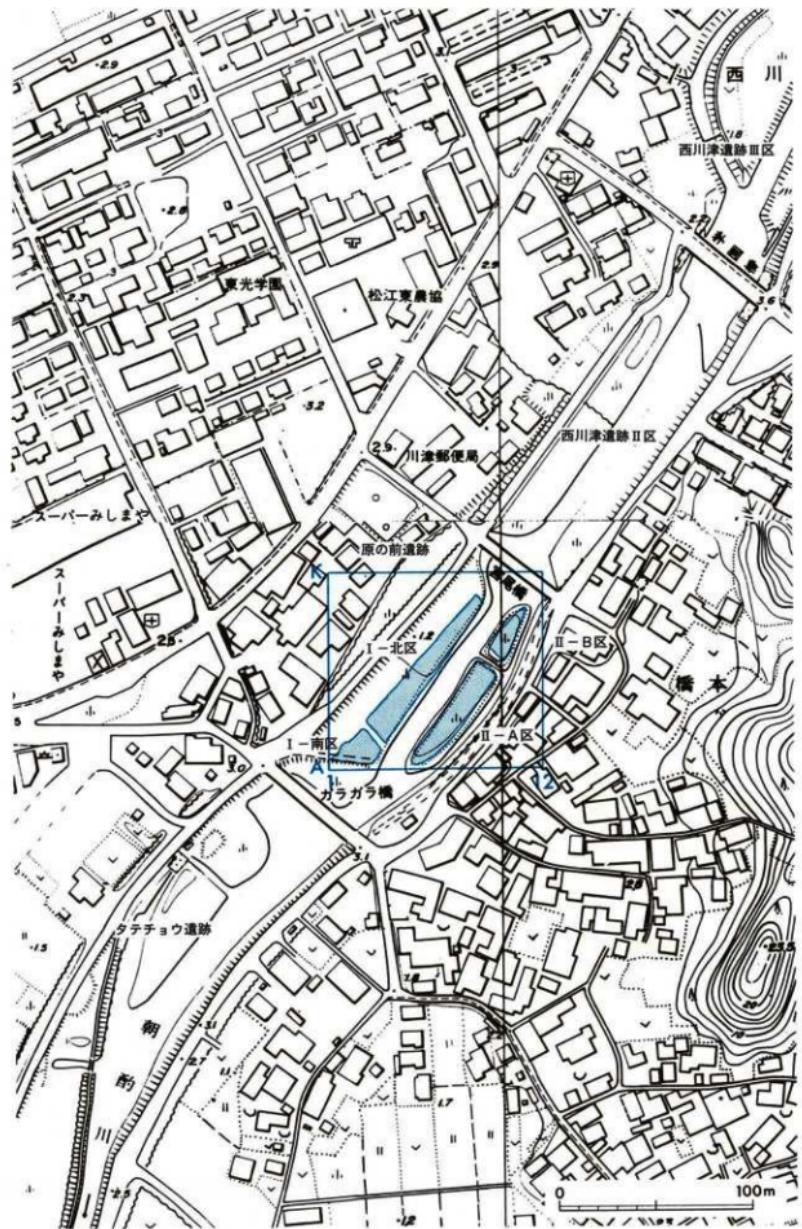
原の前遺跡は、松江市の北東部を蛇行しながら南北に流れている朝釣川沿いに位置している。同遺跡の下流にはタテチョウ遺跡が、上流には西川津遺跡が存在し、一連の「朝釣川遺跡群」とでも言うべき呼ぶ遺跡群を構成している。

朝釣川遺跡群の発見は、タテチョウ遺跡が、昭和9年（1934年）に行われた堰と水門を造る工事に際して弥生土器などが出土してその存在が確認されたことに遡る。昭和24年（1949年）には山本清氏によってタテチョウ遺跡の一部試掘調査が行われ、同遺跡が弥生時代を中心に古墳時代に及ぶ複合遺跡であることが明らかになった。上流の西川津遺跡の発見は昭和14年の水田排水工事で上器片などが山上したことによる。また、戦後行われた電柱埋設工事、昭和42年の県道松江一境線（現在の国道431号線）沿いの電話線の埋設工事の際にも遺物が発見されていた。しかし、発掘調査が行われていなかったことからこれら遺跡の範囲・性格は不明な点が多くあった。ところが、朝釣川は度々氾濫を起こし、昭和40年代になって急速な市街地化が進んだ川津地区の住民に損害を与えるに至った。昭和47（1972）年から島根県土木部において河積拡大のための河川改修計画が企画された。島根県教育委員会では昭和49年度に県土木部の依頼を受け、工事予定地内の遺跡（タテチョウ遺跡）の範囲確認調査を実施した。この結果タテチョウ遺跡が南北300mに及ぶ大規模な低湿地遺跡であることが判った。また、同じ頃松江市教育委員会でも、松江圈都市計画予定地内のタテチョウ遺跡の西側部分について発掘調査を行っている。

昭和52年に、県教委は県土木部と朝釣川中小河川改修工事予定地内に存在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。この協議に基づき、1977年（昭和52年）以降、島根県教育委員会では本格的な発掘調査に着手した。島根県で大規模な低湿地遺跡の調査が行われたのはタテチョウ遺跡が最初であった。

その後、河川改修工事に伴う暫定掘削工事は下流側から進行していく、昭和54年3月に掘削工事中のガラガラ橋から宮尾橋までの間に遺物が発見されたことで遺跡の存在が明らかとなった。ここはタテチョウ遺跡と西川津遺跡の間にあたり字名をとって「原の前遺跡」とした。さらに、昭和52年3月上流の西川津町宮尾坪内地区の学園橋付近（西川津遺跡Ⅲ区）で掘削工事中に弥生土器が発見され、西川津遺跡の範囲が拡大することが判った。急遽、この地区についても昭和54年～56年に暫定掘削部分についてのみ発掘調査を実施した。工事予定地内の調査は下流からを行い、タテチョウ遺跡については平成3年に調査を終了した。

原の前遺跡についてはⅠ区（右岸）を昭和63年度、Ⅱ区を平成3年度に範囲確認のための予備調査を実施し、遺物包含層の存在を確認した。本調査は、平成4年度にⅠ区（右岸）について、平成5年度にⅡ区（左岸）について行った。また、平成5年度には西川津遺跡Ⅳ区（大内谷地区）についての範囲確認調査も併せて行った。調査に当たってはX=-57130とY=82410の交点を基準として座標軸に対応するよう1辺10mの方眼を組みグリッドとした。南北軸をアルファベットAから、東西軸を数字の1からとし、各方眼の東北の交点をグリッド名とした（第1図）。



第1図 調査区配置図 (1 : 250)

(平成4年度)

I区(右岸)1,300mについて実施した。現地調査期間は5月上旬から12月下旬までの約7ヶ月半。

調査区は、排水路が調査区を横断するように流れていたため、南側と北側の2区に区分して、それぞれ南区・北区と称することとした。全面調査に先立ち北区・南区それぞれにトレントを設定し、上層の堆積状況を確認した。その結果、河川が北から南に向かって移動したことが判ったため南区・北区の順に調査を進めることとした。また、北区中央部の東壁では地震による液

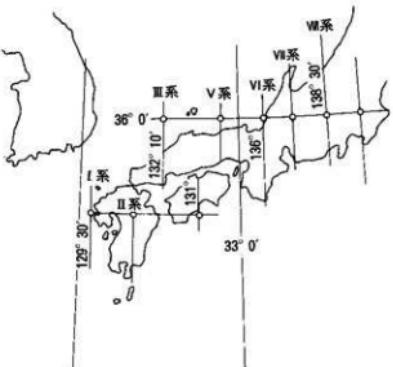
状化現象が確認された。南区では平安時代の河道の右岸側を検出した。この河道からは土師器や人形が出た。北区の南端からは、南区で検出した平安時代の河道の続きと、奈良時代の河道を確認した。さらに、標高-0.6~-0.4mで古墳時代後期初頭の洪水跡を検出した。この洪水跡は前述の液状化現象の直上に位置していたため、層位的観察を行なわながら、液状化現象の時期を特定していくこととした。その後古墳時代後期初頭、古墳時代中期の河道を確認した。また、古墳時代中期の杭列遺構や、古墳時代前期の石組護岸遺構を検出した。杭列遺構のなかには地震で屈曲した杭もみられた。

以上のように、平成4年度の調査では古墳時代前期(4世紀頃)から平安時代にいたる約900年にわたる、川を軸に自然と関わりあった人々の歴史の痕跡が明らかとなった。

(平成5年度)

平成5年度は、対岸のII区、1,600mについて調査を実施した。調査は6月上旬から12月下旬までの約6ヶ月を要した。調査区のほぼ中央を排水路が東西に横断していたため、調査区を南北に分割し、南側をII-A区、北側をII-B区とした。

調査はII-A区から着手し、試掘調査の結果をもとに無遺物層については重機で掘削した。しかし、地表面下50cmのところで河川改修以前の水田に伴う暗渠・埋設桶などを検出し、記録を作成した。この下層からは、調査区の東壁に沿って幅3mのトレントを設定し土層の観察を行いつつ調査を進めた。この結果、河川堆積層と考えられる泥層、砂礫層が堆積していることが判った。そこで砂礫層を面的に確認するため、調査区全体を掘り下げた。砂礫層は調査区をほぼ斜めに横切る形で南北に拡がっていた。砂礫層の上面は10cmセンターで測量図を作成した。この砂礫層は出土した上器から繩文~平安時代までの上器が含まれており、出土位置を記録し、取り上げた。砂礫層の下層については、さらにサブトレントを設定して掘削した。この結果、標高-2.55mで泥層の間に挟まれているアカホヤ火山灰を確認した。II-B区では、II-A区で認められた平安時代の砂礫層の検出に努めたが、複雑な堆積状況であったため、面的な検出が出来なかった。調査区南壁では、河道が西から東へと移動していく様子を明瞭に知ることが出来た。測量図については調査区中最も古いと考えられる古墳時代後期のものについて10cmセンターで作成した。砂礫層完掘後、サブトレントを設定して、遺物包含の有無及び地層の堆積状況を確認し、現地調査を終了した。

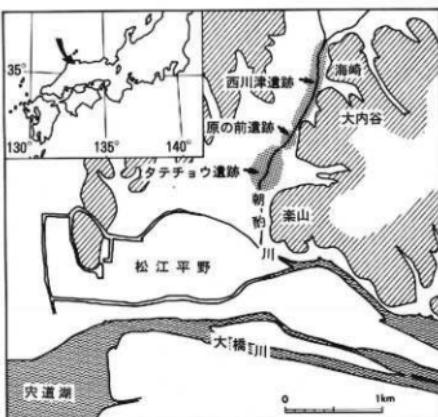


第2図 平面直角座標系

(2) 遺跡の位置と歴史的環境

原の前遺跡は松江市西川津町橋本に所在し、松江市の市街地の東側にあたる。付近には島根大学や西川津小学校などの学園が集まり、最近、遺跡の周囲は宅地化が進んでいる。

原の前遺跡は朝酌川の河川敷に存在する低湿地遺跡である。朝酌川は島根半島の北山から流れを発し、松江市街の東端の沖積地を南下して宍道湖と中海をつなぐ大橋川に注ぐ一級河川で、この川沿いに西川津遺跡とタテチョウ遺跡が存在する。原の前遺跡はその二遺跡に挟まれ、ガラガラ橋と宮尾橋の間に位置する。また、この川が形成する谷合は古墳をはじめ多くの遺跡が分布する。



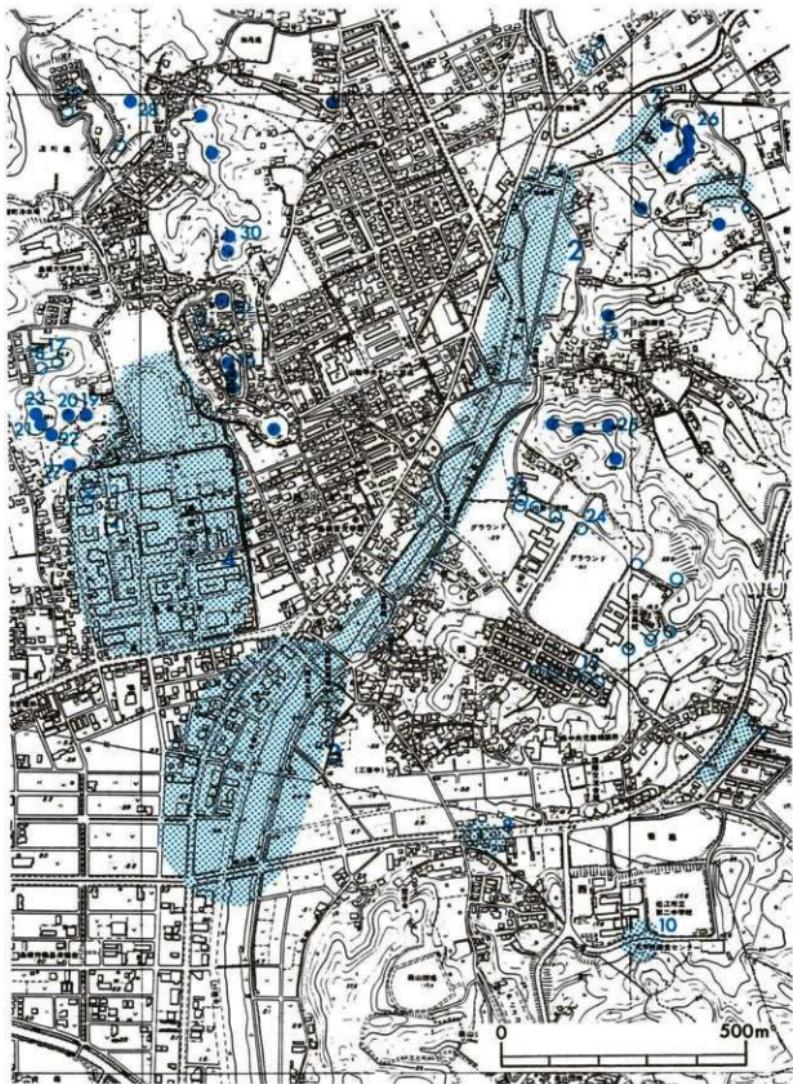
第3図 遺跡位置図

1. 先土器時代～古墳時代の朝酌川流域

先土器時代 現在の地形とは大きく異なり、谷合となっていたと考えられ、今のところ、この時代の遺跡は知られていない。しかし、西川津遺跡やタテチョウ遺跡において、尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土しており、付近に先土器時代の遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代 暖かな時期にあたり、湖が山頂まで広がっていたと推定される。縄文土器が出土している遺跡としては西川津遺跡、タテチョウ遺跡、島根大学構内遺跡、金崎遺跡、城の越遺跡が挙げられる。西川津遺跡は昭和54年から発掘調査が行なわれており、縄文時代と弥生時代のものを中心とした多量の遺物が発見されている。縄文時代の遺物としては早期末の織維土器をはじめ、前期、晩期の土器や石器類が大量に出土している。タテチョウ遺跡も昭和52年より平成3年まで調査が行なわれ、西川津遺跡と同様に遺物が多く、この地域における縄文時代のようすを知る貴重な遺跡である。また、西川津遺跡や原の前遺跡ではアカホヤ火山灰が湖底の堆積層中に認められ、前期から中期にかけて宍道湖がこの付近まで拡張していたことを物語っている。なお、金崎遺跡と城の越遺跡からは後期と晩期の土器が採集されている。

弥生時代 縄文時代の終わりころには宍道湖の汀線も原の前遺跡よりもかなり南のタテチョウ遺跡付近まで後退し、周囲は湿地帯となり、初期農耕に適し、水田に利用されていたと想像される。前述の西川津遺跡やタテチョウ遺跡をはじめ貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られている。西川津遺跡には前期から中期にかけての多量の土器や木製品の農工具、石器、骨角器などがあり、遺構としては前期の貝塚、中期の掘立柱建物跡なども検出されている。タテチョウ遺跡では前期から後期までの土器や木製品および石器などが発見されている。両遺跡から出土している特異な遺物としては土笛や櫛、腕輪、



第4図 原の前遺跡と周辺の遺跡 (1 : 10000)

1. 原の前遺跡
2. 西川津遺跡
3. タテヨウ遺跡
4. 島根大学構内遺跡
5. 敷布地
6. 敷布地
7. 貝崎遺跡
8. 横木遺跡
9. 柴遺跡
10. 堤廻遺跡
11. 山崎古墳
12. 柴古墳群
13. 菅田丘古墳
14. 葉師山古墳
15. 住吉神社裏古墳
16. 金崎古墳群
17. 上浜弓1号墳
18. 上浜弓9号墳
19. 宮田1号墳
20. 宮田2号墳
21. 浜弓1号墳
22. 菅田20号墳
23. 菅田20号墳
24. 馬込山古墳群
25. 大内谷古墳群
26. 貝崎古墳群
27. 小丸山古墳
28. 深町古墳群
29. 深町横穴墓
30. 福山古墳群
31. 馬込山古墳群

管玉などの装身具、分銅形土製品がある。原の前遺跡と同様、川辺りの生活や朝鈴川の洪水などの痕跡を知る遺跡である。なお、貝崎遺跡や橋本遺跡からも弥生上器が採集されている。

古墳時代 朝鈴川流域の低丘陵には多くの古墳が分布し、出雲地方でも密集地の一つとなっている。古い時期の古墳は少なく、山崎1号墳や柴尾2号墳が知られているに過ぎない。山崎古墳は一辺15mの方墳で、排水溝をもつ。割竹形木棺が直葬されていたと推定されるが、副葬品は少なく、鉄剣と銅鏡のみが出土している。柴尾2号墳は朝鈴川中流域の下東川津町に所在する一辺8mの小規模な方墳で、内部主体としては割竹形木棺と箱形木棺1基が検出されている。出土品には古式の十師器壺、甕がある。中期以降になると周辺部の丘陵に多くの古墳群が出現する。その多くは、須恵器が出現するころのもので、柴古墳群(3基)、馬込山古墳群(4基)、金崎古墳群(11基)、上浜門古墳群(9基)、住吉神社裏古墳などがあり、一辺20m以下の方墳が相当数築造されるようになる。また、出土品が多く、時期を明確にできないものの、前期から後期にかけてのころと推定されるものに、宮田古墳群、菅田古墳群、大内谷古墳群、福山古墳群、深町古墳群などがある。これら古墳群の中でも規模が大きいのが金崎古墳群で、その1号墳は、全長35mの前方後方墳で、小型の横穴式石室をもつ。副葬品には做製内花文鏡、子持勾玉などのカケ類や剣や矛等の武器や各種の須恵器があり、この古墳は朝鈴川流域一帯を支配した首長の墓と考えられる。副葬品は少ないが、薬師山古墳からも做製珠文鏡や古式の須恵器が出土している。しかし、後期には、横穴式石室をもつ古墳は原の前遺跡の付近には全く存在しなく、横穴墓も深町横穴墓のみが知られる程度である。この時期には上流の持田地区付近には太田古墳群(5基)に代表される各壁一枚石で構成する石棺式石室をもつ古墳が多く築造されている。さらに、全長50mの前方後方墳で横穴式石室を2個もつ薄井原古墳も出現する。これらの古墳の被葬者は、後に出雲國府の置かれた意宇川下流域の古墳群の勢力には及ばないものの、かなり力を有していた首長がいたことがうかがえる。一方、築落跡は調査例が少なく、柴遺跡や堤廻遺跡が知られる程度である。柴遺跡は小さな谷合の奥部に所在し、前期の竪穴式住居2棟が調査されている。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、竪穴住居21棟と掘立柱建物跡2棟を検出し、この時代の集落を知るうえでの好資料を提供することになった。その時期は3棟が前期、7棟が中期前半、9棟が後半で計18棟が確認されている。なお、西川津遺跡、タテチヨウ遺跡、原の前遺跡の河川堆積物中に古墳時代の土師器や須恵器をはじめ木製品などの遺物が大量に含まれている。この時代の集落が川沿いに幾つも存在し、洪水時にその一部が川に押し流されたことを示している。また、最近の調査結果よりこの時代も今とほぼ同じところが流路となっていたことが知られた。

(西尾)

参考文献

- 島根県教育委員会 『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書』 I~IV 1979~1992
- 島根県教育委員会 『西川津遺跡発掘調査報告書』 I~V 1980~1989
- 山本 清 『古代』『川津郷土誌』 1982
- 松江市教育委員会 『山崎古墳』 1984
- 松江市教育委員会、(財)松江市教育文化振興事業団 『柴尾遺跡発掘調査報告書(1)』 1994
- 松江市教育委員会 『堤廻古墳』 1984

2. 「出雲國風土記」時代の朝酌川流域－西川津地域を中心として－

I. はじめに

朝酌川流域については、タテチヨウ遺跡についての4冊の調査報告書^(注1)、西川津遺跡（海崎地区）は3冊の調査報告書^(注2)などより、考古学的な知見が報告されてきた。また、歴史地理学的な面から古代条里の復元作業^(注3)もなされてきている。ここでは、天平5年（733）に勘造された『出雲國風土記』の記載によりながらこの地域をみていく。

II. 山口郷

現在の朝酌川流域のうち、西川津地域は『出雲國風土記』によれば、島根郡山口郷のうちに比定されている^(注4)。奈良時代の「郷」は、律令制下の行政区画のひとつである。当時の行政区画名にはいくつかの変遷があったが^(注5)、『出雲國風土記』編纂時の天平5年段階では、国一郡一郷一里であった。「郷」は、五十戸をひとまとまりにするという法的な原則であり、擬制的編戸によるもので、かならずしも自然村落をあらわすものではなく、またその範囲を確定することはできない。

『出雲國風土記』の記載によれば、「山口郷」には3つの「里」が存在したが、その里名を知ることはできない。谷重豊季氏^(注6)は古代条里復元作業の結果、つぎの三地域に3つの「里」を比定している。1つめは現小倉川・現持田川・現朝酌川合流域、2つめは現坂本川・現保田川・現朝酌川合流域、そして3つめは現福原川・現川原川合流域である。

さて、島根郡家は『出雲國風土記』の記載から「山口郷」にあったと考えられている^(注7)。この郡家と関連する遺跡として、松江市福原町の芝原遺跡がある。規格制をもつ規模の大きな掘立柱建物群が検出され、この芝原遺跡は島根郡家域に含まれていた可能性が強いと考えられている^(注8)。西川津地域は、『出雲國風土記』時代、島根郡家から秋鹿郡家への通り道にあたっていたようである。

『出雲國風土記』には^(注9)、

布自枳美高山。郡家の正南七里二百一十歩なり。高さ二百七十丈、周り一十里なり。

烽あり。（鳩根郡条）

布自枳美烽は、鳩根郡の正南、七里二百一十歩なり。（卷末）

とあり、布自枳美高山（現嵩山）の頂上には烽がある。『出雲國風土記』には他に「馬見烽」（出雲郡、現大社町壹背山）、「土椋烽」（神門郡、現出雲市神原町大袋山）、「多夫志烽」（出雲郡、現平田市旅伏山）、「暑垣烽」（意宇郡、現安来市飯梨車山）が見える^(注10)。嵩山の「布自枳弥社」の東の平坦地、



第5図 律令制下の島根郡 () は風土記地名

また、ここからの採集遺物である須恵器、土師器の小破片はこの布自枳美峰に関連した物と考えられている^(注1)。周辺の山として、『出雲国風土記』には「女岳山」(現和久羅山あるいは現嵩山の支峰)、「森野」、「毛志山」(現澄水山)が記載されている。

タテヨウ遺跡から「駅」と墨書きされた須恵器の坏が、昭和53年に島根県教育委員会による調査時に出土している^(注2)。このことから、当時朝鶴川河口付近になんらかの公的性格を帯びた施設のあったことを示唆しているとの解釈がある^(注3)が、この須恵器の坏が出土で使用された後埋納されたものか、あるいは他の地域で使用されたのち山土地に埋納されたものか、埋納状況が不明であり、朝鶴川河口付近に公的性格を帯びた施設の存在を云々することはできないであろう。

この地域の河川として『出雲国風土記』には、

一水の源は、郡家の東北三里一百八十步なる毛志山より出で、
水草河。源二つあり。
一水の源は、郡家の西北六里一百六十步なる同じき毛志山より出づ。
二つ

の水合ひ、南に流れて入海に入る。附あり。

と、現在の川津川に比定された「水草河」のみがみえている。

『出雲国風土記』には、布自伎弥社(現上東川津町嵩山、布自岐美社)、門江社(上東川津町国石大明神)、加佐奈子社(東持田町加佐奈子神社)、比加夜社(坂本町比加夜神社)、川原社(川原町川原神社)、虫野社(福原町虫野神社)、持田社(西持田町持田神社)と、朝鶴川流域の「社」が見えるが、門江社以下持田社までの祭神は伊弉奈根命、大国主命、素戔鳴尊など「古事記」「日本書紀」に見える神である。『出雲国風土記』鳴根郡山口郷条には、次のような地名起源伝承が記載されている。

須佐能彦命の御子、都留支口子命の詔りたまひしく、「吾が敷き坐さむ山口の處なり」と詔り
たまひて、故に、山口と負せ給ひき。

ここにみえる、都留支口子命は現布自岐美社の祭神であるが、「古事記」「日本書紀」にはみえない神である。

『出雲国風土記』には鳴根郡の郡司として、(人領)社部臣訓麻呂、(少領)社部石臣、(主政)坂朝臣、(主帳)出雲臣がみえる。このうち、山口郷に関連するものとして、「社部臣」「社部石臣」があり、その遺称が現在の下東川津町納佐の字子名「小正部屋敷」と考えられ、このあたりに社部氏の本拠地があったと推定されている^(注4)。

III. むすび

平安時代になると、現坂本町別所に、軒丸瓦・軒平瓦・延喜通宝2枚入った藏骨器を出土した「坊床廃寺」が建立されている。

古代の「山口郷」地域は、中世になると「長田郷」、近世では「川津」と呼ばれるようになる^(注5)。
(野々村)

注

(1) 島根県教育委員会『朝鶴川河川改修工事に伴うタテヨウ遺跡発掘調査報告書』

I (1979年), II (1987年), III. (1990年), IV (1992年)

(2) 島根県教育委員会『朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書(海崎地区)』

- (海崎地区) 1 (1987年), 2 (1988年), 3 (1989年)
- (3) 山本 清「川津・持田平野の条里制」『川津郷土誌』 1982年。
谷重義季「島根郡の条里について」「ふいーるど・のーと」第7号 1985年。
- 服部 旦氏の『出雲国風土記』島根郡家関係の一連の論考、「『山雲国風土記』島根郡家の比定」『山陰史談』第21号 1985年等。
- (4) 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』1981年。
- (5) 律令制下の地方行政区画は、
(大宝令制) 国-郡-里 → (奈龟元年715~) 国-郡-郷-里
→ (天平11年739末~) 国-郡-郷
- と変遷する。岸俊男「古代村落と郷里制」『日本古代籍帳の研究』1973年。
- (6) 前掲注(3)谷重豈予論文。
- (7) 前掲注(4)加藤義成『修訂出雲国風土記参究』。
- (8) 松江市教育委員会「芝原遺跡」1989年。
- (9) 「山雲国風土記」の書き下し文は、加藤義成『修訂出雲国風土記参究』による。
- (10) 内田律雄氏は、出雲5烽のうち出雲国守から見えるのは、布自枳美烽のみであり、布自枳美烽は、他の4烽から発せられた信号を一旦すべて集め、出雲国守へ伝えるという、出雲5烽のうち最重要な位置を占めていたのではないかとしている(前掲注(2)「海崎1」P. 19)。
- (11) 前掲注(10)と同じ。
- (12) 前掲注(1)『発掘調査報告書』I (1979年)。
- (13) 前掲注(2)「海崎1」P. 22。前掲注(3)『川津郷土誌』では、「黒田駅」のものか、「千鈞駅」の備品と推測している。
- (14) 朝山聰「出雲国風土記に於ける地理上の諸問題」P. 464。平泉澄監修『出雲国風土記の研究』1953年。前掲注(2)「海崎1」P. 27。
- (15) 前掲注(2)「海崎1」所載 井上寛司「中世の朝鈴川-西川津地域を中心として-」参照。「長田郷」の史料上の初見は文永8年(1271)11月の関東御教書(杵築大社三月会相撲舞頭役結番帳千家文書『新修島根県史』史料篇I P.226~230)であり、「川(河)津」「東川津」「西川津」の初見はそれぞれ戦国期の多胡家證文「西長田郷所領目録」(山口県文書館書所蔵 諸臣證文II), 慶長7年(1602)「島根郡東川津村御検地帳」慶安5年(1652)3月「島根郡之内西川津村御検地帳」(ともに広島大学附属図書館所蔵)である。

(3) 原の前遺跡の地質と自然環境

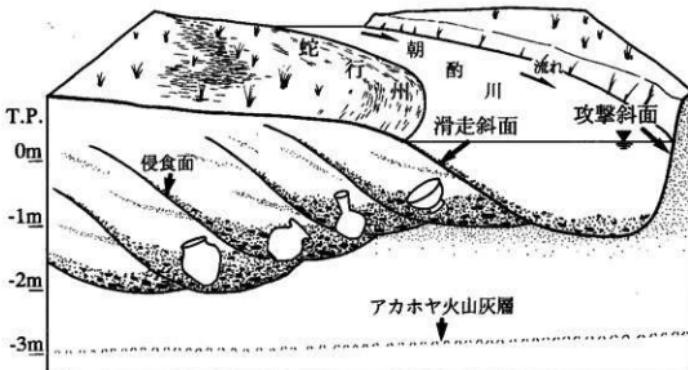
堆積状況

原の前遺跡の遺物包含層は河川の自然堆積層で、弥生時代以降を中心とした各時代の遺物が混在する形で含まれる。河川堆積層は初生的に東落ちの傾斜を持ち、泥層と砂礫層からなる地層のユニットが削り面を界して側方へ付加されており、蛇行州堆積物とみられる(第6図)。地層の走向、疊の重なり方(インブリケーション)および地層中に含まれる自然流木の伸張方向から、河川は北東から南西に向かって流れ、原の前遺跡付近では南東側に凸の曲流をしていたとみられる。この方向は河川改修以前の朝釣川の方向とほぼ同じである。

河川堆積層を形成した堆積作用は以下のようと考えられる。朝釣川は水量が少なく、海面との比高が小さく河床勾配も小さいので流れがゆるやかである。平常時には水に浮遊した状態の細かな泥や植物片が運ばれて堆積する(第7図-1)。洪水で水量が増し、流れが強くなると砂や礫などが運ばれ、泥や植物片も多量に運ばれる。このとき、住居などが流されたり、すでに堆積物中に埋もれている遺物が洗い流されて運ばれる。また、攻撃斜面では強い侵食力が働く(第7図-2)。流れが弱まるとはじめに砂や礫、大型の材が堆積して砂礫層が形成される。この時点では泥や植物片は運ばれ続ける(第7図-3)。さらに流れが弱まると泥層が堆積する(第7図-4)。これを繰り返しながら河川は攻撃斜面側へ移動し、滑走斜面側へ蛇行州を形成した。

まれに泥層中に大型の土器があることがある。泥層が堆積するときには大型の土器を運ぶ水流はないことから、これらは人が持ち込んだか、投げ込んだ可能性が高い。

地層の堆積時期は、I区の北西部の地層が4世紀前半でもっとも古く、II区の南東部が12世紀の地層であった。この上位は河川改修以前の朝釣川の近世の堆積物であった。このことから、4世紀～12世紀まで河道が西から東へ移動し、12世紀以降はほとんど移動しなかったとみられる。4世紀より古い時期の河川堆積層も存在すると思われるが、調査区内では確認できなかった。なお、I区とII区は



第6図 原の前遺跡模式断面図

朝鈴川の両岸に隔てられているが、現在の河道は近年人工的に掘削されたもので、本来地層は一連のものである。

河川堆積層の下位には、遺物を含まない泥層が分布する。この泥層はほぼ水平で、粗粒な砂・礫をほとんど含まず層相変化の少ない地層である。地層の厚さは4mに達する。細粒物質で構成されるという堆積状況から、この地層は湾や湖の水底に堆積したと考えられる。泥試料を分析すると、海水の流入する環境で堆積したことを示す硫酸が高い濃度で含まれており、泥層が堆積した水域は海に通じた内湾（湖）であると考えられる。また、泥層には約6,300年に降下した鬼界アカホヤ火山灰層が挟まれている。

自然環境の変化

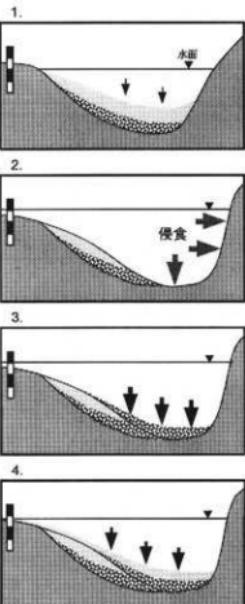
地質年代では現在は新生代第四紀完新世という時代である。約170万年前に始まる第四紀は幾度かの氷期が繰り返された時代で、最終氷期（ウルム氷期）が終わった1万年前を境にこれ以前が第四紀更新世、以後が第四紀完新世と分けられている。

氷期には氷河、氷床が発達するため水が陸上に閉じ込められ、海面が低下する。ウルム氷期の最盛期には現在より100m程度低くなつたと考えられている。この時の朝鈴川は谷を作つて現在より5m以上低いところを流れている。この川は本州と島根半島の間の低地を西流し、日本海へ流れていった。

氷期が終わり気温が上昇すると海面が上昇する。1万年前から6,000年前にかけては、堆積物が谷を埋めて平野（デルタ）を形成するよりも早い速度で海面が上昇した。この海進を縄文海進といふ。少なくともアカホヤ火山灰の降下した約6,300年前までには原の前遺跡のさらに上流まで海が入り込んでいた。アカホヤ火山灰降下時の原の前遺跡は縄文海進で入り込んだ海（古穴道湾）の海底の環境であった。

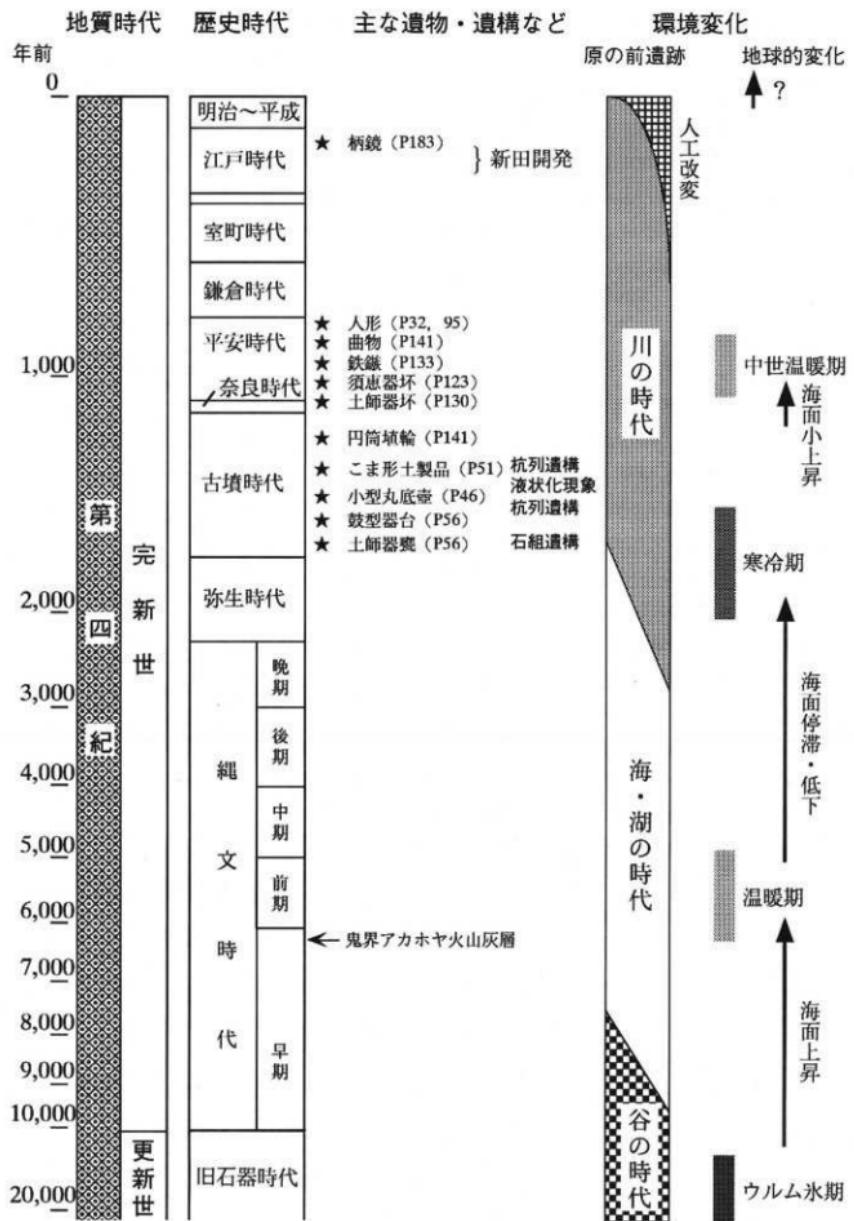
海面上昇速度が鈍化し、停滞あるいは停滞に転じるとデルタが前進し、平野が拡大した。原の前遺跡では4世紀の河川堆積層が認められることから、少なくとも4世紀以前には陸化していたといえる。上流の西川津遺跡では弥生前期の河川堆積層が確認されており、原の前遺跡付近も弥生前期～中期には陸化して河川が流れていであらう。

原の前遺跡では4世紀から12世紀まで河川が移動を続けるが、12世紀以降は河道はあまり移動していない。これは水田開発や都市開発など、人間の環境への働き掛けの結果と考えられる。



第7図 朝鈴川の堆積概念図

（中村）



第8図 原の前遺跡の歴史

第1章 原の前遺跡I区の調査

(1) 調査の経過

(調査区の設定)

平成4年度の調査区は、ガラガラ橋北側の朝鈴川右岸側の河川敷に南北約110m、最大幅約16m、最小幅約5mの範囲約1,300m²を設定した。グリッドの設定は、国上座標を使用し、座標軸X=-57,120 Y=82,410の交点をB1とし、東に向かってB2, B3、北に向かってC1, D1と呼び、各方眼の北東の交点をグリッド名とした(第9図参照)。

現地調査は、5月上旬から、12月下旬までの約7カ月半を要した。

調査区は、排水路が調査区を横断するように流れていた関係で、南側と北側の2区に区分して、それぞれ南区・北区と称することとした。また、北区は南北に長いため、Gライン付近で便宜的に南北に分け、北側を北区北半、南側を北区南半と称することとした。

(表土掘削)

調査は、5月上旬に、旧水田面の耕作土の除去から開始した。平成元年7月の試掘調査の結果により、遺物を含まない耕作土を、標高1.0~2.0mの地表面から約0.7~1.3m除去して遺物包含層上面を出した。

(トレンチの設定と掘削)

つぎに、河川の自然移動に伴う複雑な堆積層が想定されるため、調査区の北区において東側面から南側面にかけて逆L字形に幅3m、延べ全長110mのトレンチを設定し、また、南区においても、調査区の西側面から古堤防側の南東側面にかけてL字形に幅2m、延べ全長34mのトレンチを設定した。

トレンチの掘削は、5月中旬より開始して、7月中旬までの約2カ月を要し、遺物包含層上面から深さ1.5~2.3m付近で、遺物を含まない粘質土層に到達した。

このトレンチ掘削では、古墳時代から中世に至るまでの遺物が、ほぼ北から南に順を追うように出土した。そこで、河川の自然移動が、北から南に向かって順次行われていたものと推測した。また、これと併せて北区の北半側に古墳時代中期(5世紀頃)の遺物を伴う杭列遺構の一部が、北区中央部の東壁面に地震による噴砂と思われる柱状の砂層が確認された。

(調査手順の設定)

そこで、調査区の掘削は、堆積の新しい南方面から逐次行うことにして、南区の掘削、ついで北区の南端から新しい順に河道の検出を行いながら北上することとした。

(調査区の掘削)

南区の調査

作業の進捗とともに、南区南寄りの古堤防に近い付近で、上面の泥炭層から粘り気の強い粘質土層にかけて、椀、下駄などの木製品が出土した。さらに、河道の右岸側と考えられる、傾斜を伴う堆積層の掘削を進めると、標高-1.7m付近で、十輪器とともに、人形などの木製品が出土した。

それ以降、引き続き掘削を継続したが、遺物の出土が見られなくなり、調査面の低下とともに出水が急速に激しさを増し、おりからの雨で調査区の旧堤防側のシルト層の壁面が徐々に崩壊していくので調査を終了することとした。

北区の調査

7月中旬にトレント掘削を終え、調査区の南端から掘削を開始した。トレント掘削の段階から、調査区の南端D4・D5区の遺物包含層上面近くで、土師器の破片が出土していたが、まず、土師器出土層に沿って河道を検出した（平安時代の河道）。

その後、粘質土の間に薄いレンズ状の砂層・泥炭層を挟み込んだ傾斜層に沿って河道の傾斜面を検出するように掘り進んだ。8月上旬までに北側の南端では遺物包含層の最下層、標高約-2mの砂疊層に到達し、この8・9世紀の須恵器を下限とする土器を出土する砂疊層を引き揚げて河道跡を検出した（奈良時代の河道）。

さらに、掘削（調査区を北進）を続け、F6・F5・E5・E4区の標高-0.6～-1.4mにかけて6世紀の須恵器を下限とする須恵器ほかを含む洪水層を検出した（洪水跡）。

この洪水跡は、トレント調査の時点で発見された地震の噴砂の直上に位置していたため、ついで噴砂を含む層を掘削して、さらに、その下層の砂疊層を掘削して、段階的に遺物を検出して、噴砂ができた時期を特定していくこととした。

これと併せて、北区の北半I8・I7区付近でも、杭列およびその周囲の掘削を開始し、杭列の上面であったと考えられる標高-0.5m前後の層位から、土師器の高环脚をはじめとする5・6世紀の遺物を多数検出した。この後、杭列は断面を出しながら裁断して、立面図を作成した。この裁断により、地震による噴砂の痕跡とともに、屈曲した杭も検出されたため、引き続き杭列の下層の砂疊層の掘削を行い、遺物を検出することで杭列の時期をさらに特定することとした。

一方で、杭列よりさらに北側、調査区北端J8・J9区の掘り下げを行うこととした。ところが、掘り下げを行はずじめたところで、標高0mあたりに傾斜を伴う石組護岸造構が現れたので、石組造構の企容を検出するために周辺を掘り広げてみた。その結果、石組護岸造構の背後から、傾斜面に並行するように大杭1本を含む横一列の杭列が検出された。この掘削にあたり、石組護岸造構から前に突き出す形でセクションベルトを残し、粘質土の堆積状況を観察し、これが水際の堆積であるかどうかを確認することとした。また、石組護岸造構検出後は、同造構背後の杭列を裁断した。

(2) 遺構の概要

この遺跡は、朝酌川の川岸に位置し、河川堆積に伴う流入遺物や、川岸に置かれあるいは廃棄されたと考えられる遺物を多く含む。平成4年度は、北から南に向かって順次移動が行われていた河道と、それに伴う杭列・しがらみ・石組などの遺構、および、地震とともに噴砂が検出された。

(平安時代の河道)

北区の南端の遺物包含層上面近くで、土師器の破片が出土していたが、調査区南区と北区の南端C3・D3・D4区において、土師器出土層に沿って東西にのびる河道を検出した。

(奈良時代の河道)

北区の南端では遺物包含層の最下層、標高約-2mの砂礫層に到達し、奈良時代後半から平安時代初期の須恵器を下限とする土器を探取した。その結果、完掘後D4・D5・E4・E5区において東西にのびる河道が検出された。あわせて、完掘後の粘質土上面から流水の痕跡を検出した。

(しがらみ遺構)

奈良時代の河道跡を掘削する過程で、D4区、標高-2.0~-2.3m付近で砂礫層中から丸木によって組まれたしがらみが検出された。

(古墳時代後期初頭の洪水)

北区の南半F6・F5・E4・E5区の標高-0.6~-1.4mにかけて6世紀前半の須恵器を下限とする須恵器はかを含む大粒の砾を主体とした洪水跡を検出した。

(古墳時代中期初頭の河道)

北区の南半F6・F5・E5・E4区の標高-1.7~-2.3mにかけて、5世紀の土師器を下限とする砂礫層に到達した。

(地震の液状化現象)

北区の中央F6区付近、洪水の跡の下層において、古墳時代中期の河道に伴う砂礫層から砂が噴き上げているのが確認された。

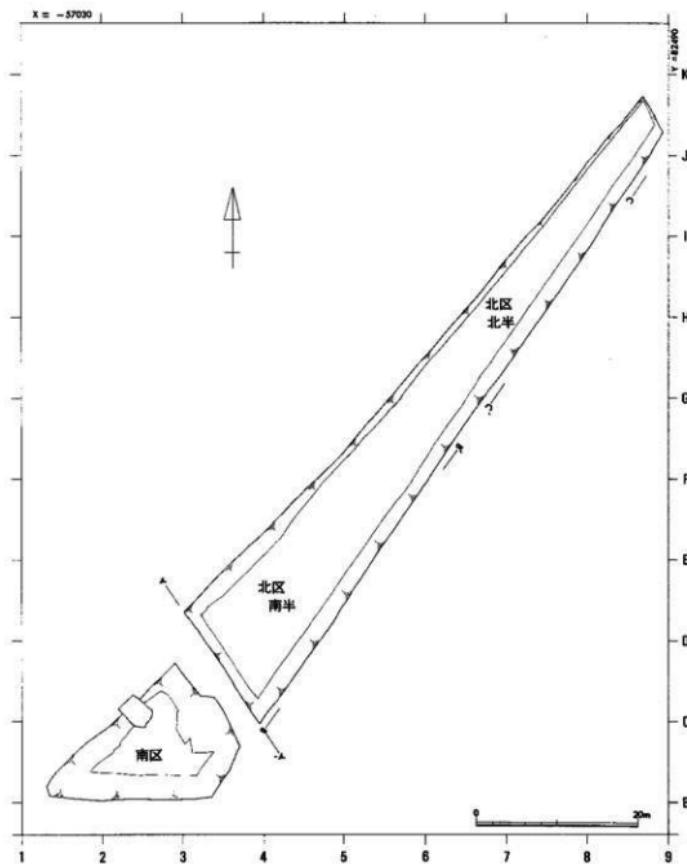
(杭列遺構)

北区の中央からやや北寄りI7・I8区の標高0~-1.5mにかけて、5世紀の土師器を含む粘質土層に打ち込まれた杭列が検出された。この杭のなかで遺物包含最下層に到達した杭に地震によるところみられる屈曲したものもみられた。

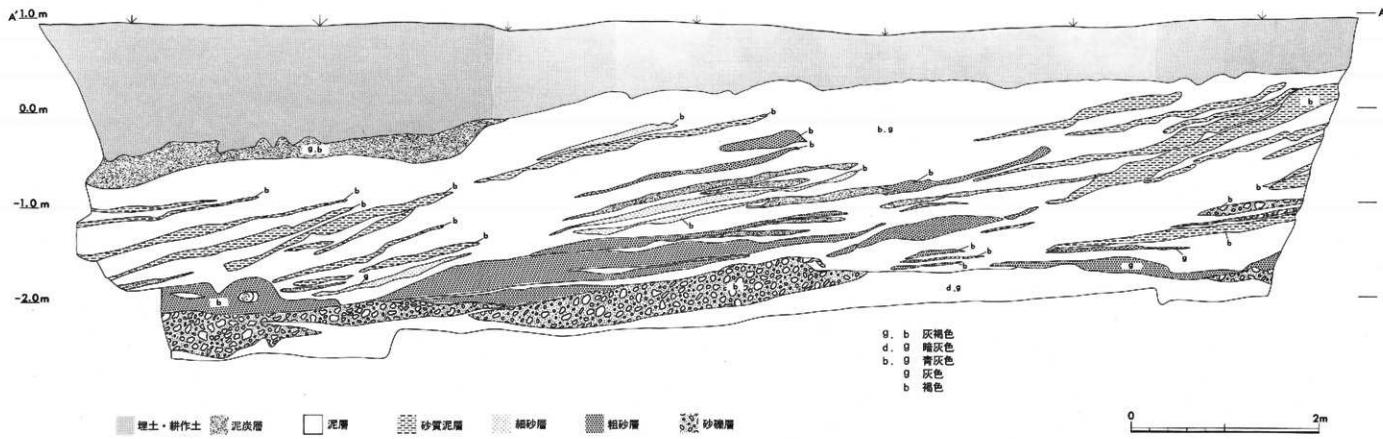
(石組護岸遺構)

北区北端、標高0~-1.2mあたりに南東向きの傾斜を伴う石組護岸遺構が検出された。この石組およびその付近からは、古墳時代前期の土師器が出土した。また、石組の背後からは、横一列の杭列も検出された。

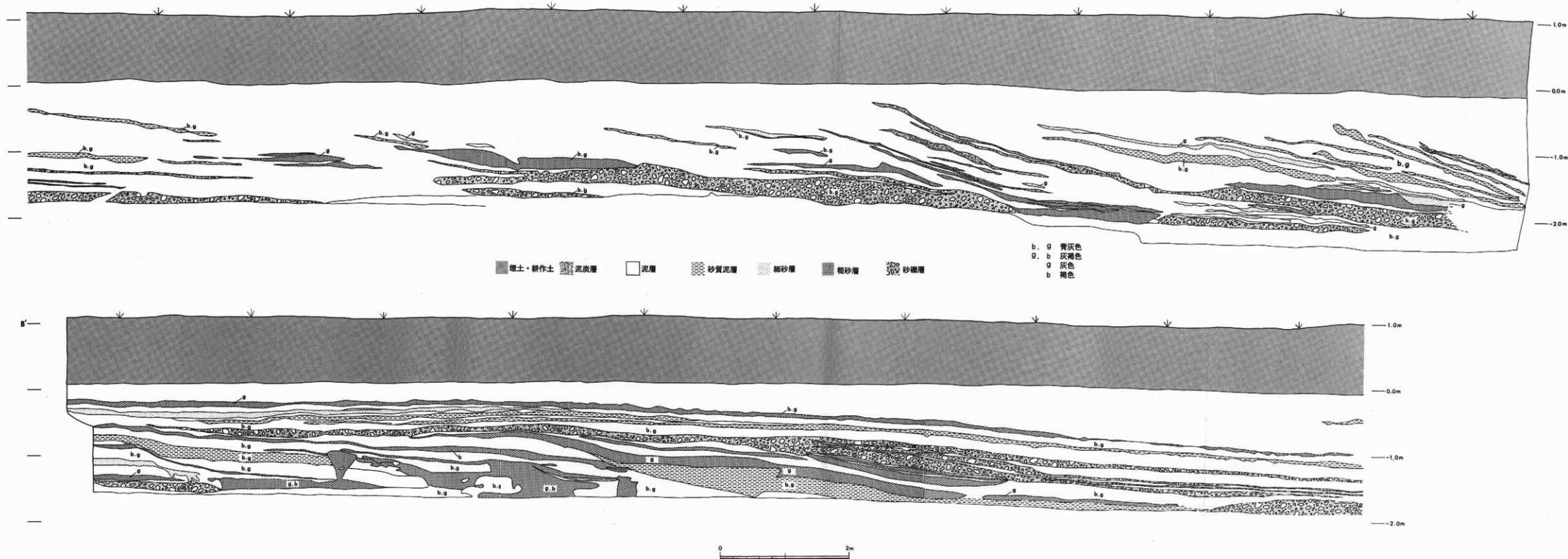
このように、平成4年度の調査では、古墳時代前期（4世紀頃）から平安時代にいたる約900年にわたる、川を軸に自然と関わりあった人々の歴史の痕跡が明らかとなった。



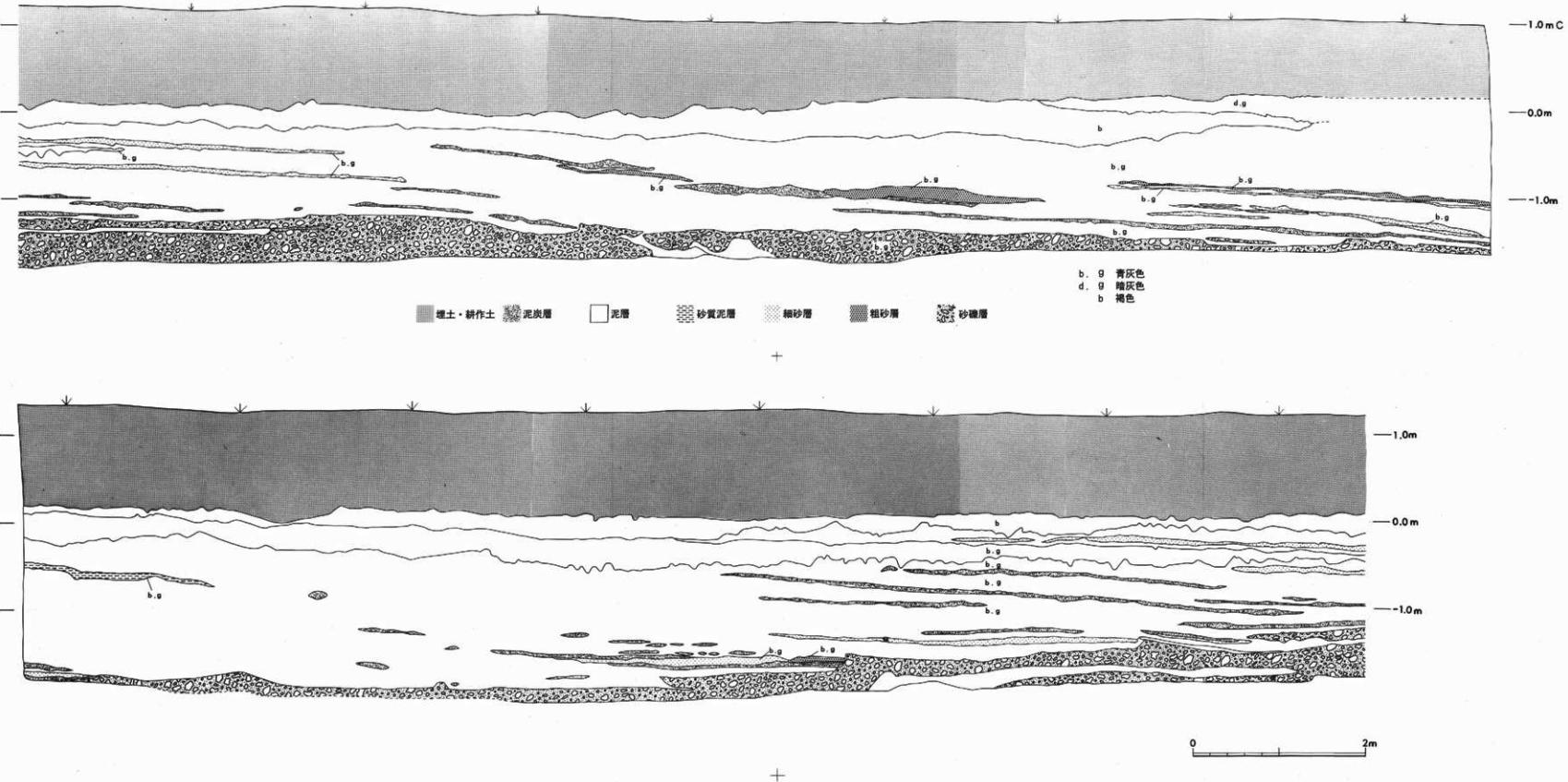
第9図 調査区平面図 (1 : 600)



第10図 北区南壁土層堆積図A-A' (1:40)



第11図 北区南半・東壁土層堆積図B-B' (1 : 40)



第12図 北区北半・東壁土層堆積図C-C' (1 : 40)

(3) 旧河道と災害跡

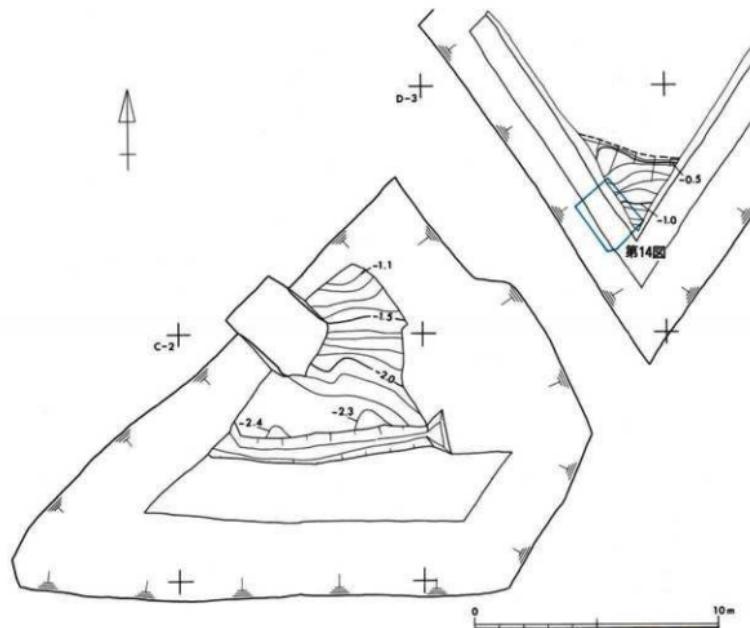
a. 平安時代の河道

南区C 3・D 3から北区D 4にかけて、土師器（後述）を伴う河道を検出した。

D 4区では、調査区南西から東南側壁面に沿って逆L字形にトレンチを掘削し始めた段階で、南角の標高-0.3m付近において破壊された土師器片多数を発見していた（第14図参照）。これらは、植物繊維を多く含む粘質土に覆われ、やや南向きに傾斜した状態で出土した。また、これらは破片が周囲に散乱することなくまとまって出土していること、植物繊維が多く含まれた粘質土が破片出土部分に限られていたこと、さらに、底部の残存状況などから、2個体以上の土師器（うち1個体は第16図-1、他は復元不能）が破壊されて後、投棄されたのではないかと考えられた。

のことから、この付近に川岸の埋没が想定されたことや、河道の時代特定の可能性も考えられたので、破壊された土師器片の周囲を掘り下げて、土層の堆積状況を観察することにした。北西側に北東方向から南東にむかって段状になるように壁面を設定して掘削を進めていく過程で、破壊された土師器片の北西側から、南に傾いた2個体の土師器が並んで押しつぶされたようなかたちで出土した（第16図-2、3）。

そこで、さらにこの周囲の堆積状況を確認する目的も含めて第16図-2、3を残したまま周囲をさ

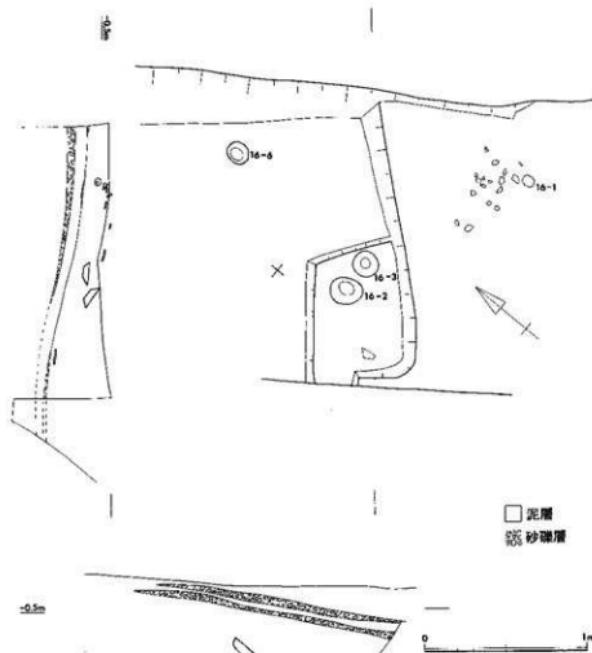


らに掘り下げたところ、須恵器の終末期のものと類似した坏（第16図-5）が南に傾いたかたちで1個体出土した。

これらから、この付近に平安前期ころの川岸があったことが推定された。さらに、この周辺の堆積が南方向に傾いたものであったことから、この付近では川が東西に流れ、流路が南に向かって移動していたものと推測された。

この結果をうけて、傾斜した堆積層に沿って調査区を掘削し、河道を検出した（第13図D 4 区付近）。

一方、南区でも旧堤防側から傾斜した堆積層に沿って掘削をおこなった。昭和30年代まで機能していた南区南縁にある旧堤防の残存部分の際から泥炭層を掘り下げ、C 3 区上層から漆器、下駄などが出上した。さらに粘質土に細くかみこんで傾斜した細砂層、泥炭層を掘り下げるうちにD 3区の標高-1.2～-1.3m付近で土師器の灯明皿（第16図-6）が出土し、その周辺から木製品（第19図-1）が、さらにその同一面C 3 区標高-1.8m付近で人形（第18図）が出土した（出土面測量図、第13図）。こ



第14図 土師器出土状況実測図 (1 : 30)

の河道は、土師器の灯明皿から、平安後期ころのものと推測され、北区の河道からさらに南に移動したものと考えられた。

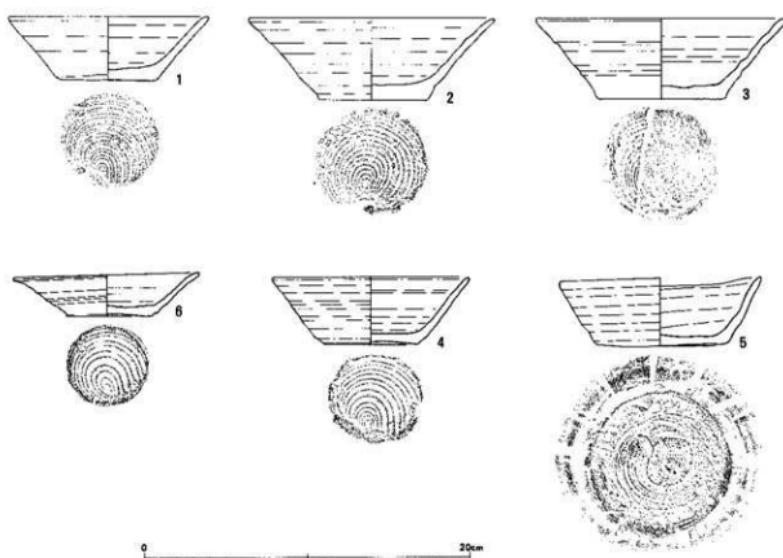
南区の河道の向きは、それよりやや古い時期のものと考えられる北区南端のものとほぼ同方向に向いており、昭和30年代の旧河道の向きとおおむね同じである。

平安時代の土層出土土器

平安時代の土器には土師器が7点以上ある。第15図-1は壺の完形で、単独で出土している。口径16.4cm、器高4.5cmを測る大型品。体部はやや湾曲し、口縁部は少し外反する。調整は体部回転ナデ、底部外面は糸切。胎土には1mm以下の砂粒を含み、焼成は良く、色調は肌色を呈す。同形態のものを出土させている遺跡には安来市の人坪3号墳上塚などがあり、その時期は平安時代中期ごろとされている^(注1)。第16図-1～5は壺、完形品も2点含まれるが、破片となっているものも多い。出土状況より本来は完形品であったと推定される。投棄時に壊されたか、その後割れたかは定かではない。体部は外開き気味となる。体部は回転ナデ、底部外面は糸切、内面はナデ、胎土は緻密。これらの土器は形態や調整より須恵器の終末期のもの、例えば松江市の古曾志平塚田窯跡^(注2)出土の壺に類似している。時期は平安時代前半ごろと考えられる。



第15図 平安時代の土層出土土器実測図(1)(1:3)



第16図 平安時代の土層出土土器実測図(2)(1:3)

表1 平安時代の河道出土土器観察表

件名番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
16-1	十輪蓋 杯	粘土層	口径 器高 14.4 4.0	体部は開き気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：緻密 焼成：不良 色調：黄褐色	
…2	坏	粘土層	口径 器高 15.2 5.1	体部は若干外反気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：緻密 焼成：不良 色調：黄褐色	
-3	坏	粘土層	口径 器高 15.7 5.0	体部は若干外反気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：緻密 焼成：不良 色調：黄褐色	
-4	坏	粘土層	口径 器高 12.0 4.2	体部は開き気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：褐色	完形品
-5	坏	粘土層	口径 器高 10.4 4.7	体部は開き気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰褐色	完形品
-6	皿	粘土層	口径 器高 11.6 2.6	体部は外反気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底 部回転系切り 内面：体部回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：黄褐色	完形品 スヌ付器 (燈明皿)

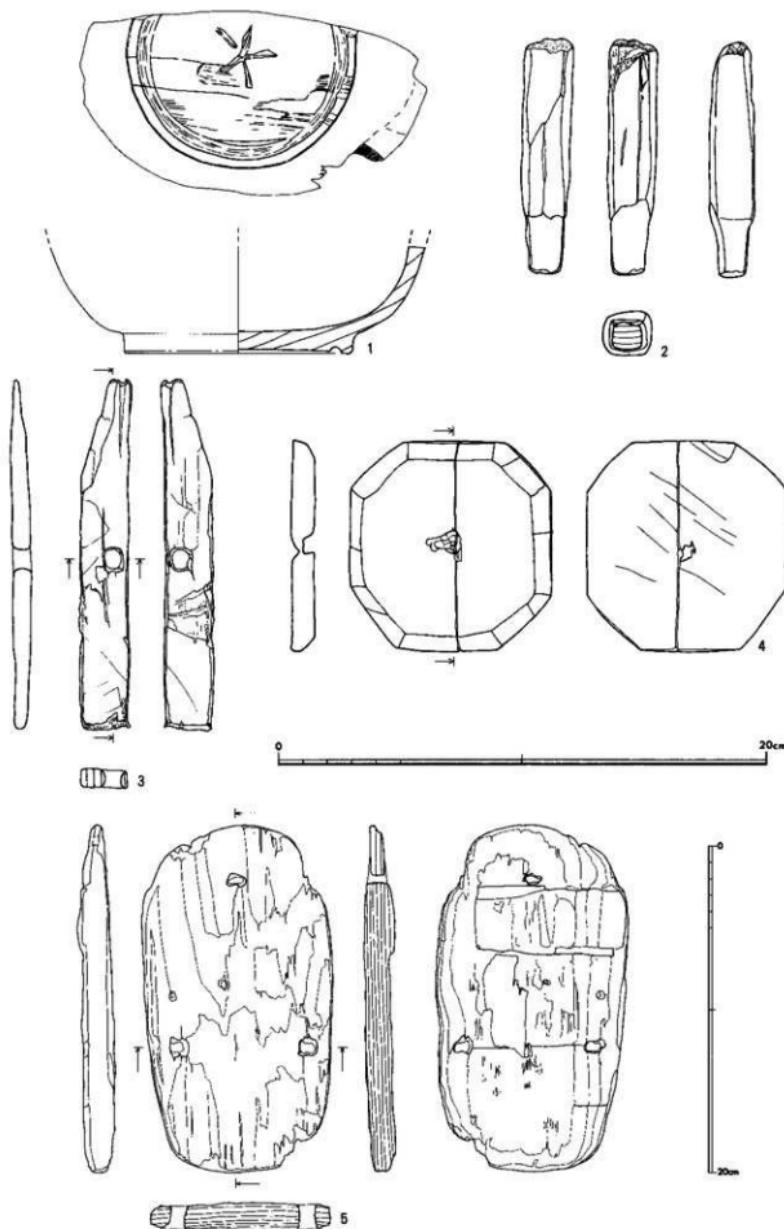
6は皿で、口径11.6cm、高さ2.6cmを測る完形品。体部は外開き気味に立ち上がる。体部は回転ナデ、底部外面は糸切、内面はナデ。外面の一部に焦げ状のススが認められ、灯明皿と考えられる。時期は平安時代中ごろから後半と思われる。

平安時代の河道出土木製品（第17～19図）

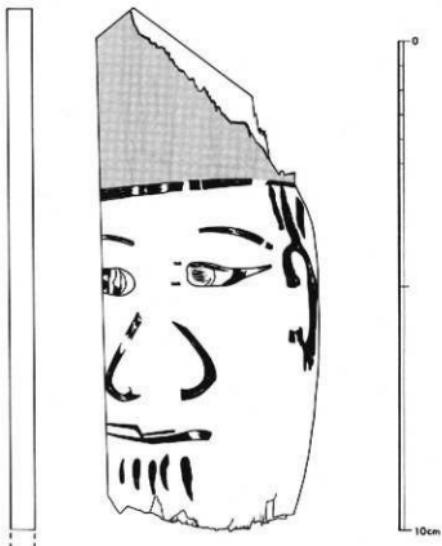
第17図1は漆器碗である。内面および底部を除く体部の外面に黒色漆を塗布している。高台は裏面を浅い溝で凹めて作りだし、ほぼ垂直に立ち上がる。裏面の全体には粗い加工痕が残る。また、裏面の中央には「火」の字状の刻みが認められる。2～4は、いずれも用途不明の小形の木製品である。

2は長さ9.6cm、太さ1.9cmの角柱状の材の一端を削り栓状に加工している。3は、扁平な板材の中央に1×0.8cm円孔を空け、短辺の一端を斜めに削りだしている。短辺のもう一端は欠損している。4は八角形の板材である。長さ8.6cm、幅8.3cm、厚さ0.9cm、柾目取り。中央には表裏両方から孔を穿っているが、貫通していない。裏面には剃刀刃状の擦痕が残っている。5は台と歯を一本で作る連歯下駄である。前緒穴を台の中央にあけ、後緒穴を歯の内側にあけたもの。長さ21.1cm、幅11.6cm、厚さ1.9cmを測る。台と歯の横幅はほぼ等しく、台の平面は隅円方形を呈する。前歯～前緒、後歯～後緒の長さはほぼ同じで3.8cmである。歯は磨滅のためかはっきりせず、特に、後歯は消失しかかっている。現状で前歯の厚さは3.5～4.0cmである。緒穴は前・後とも8字形を呈している。

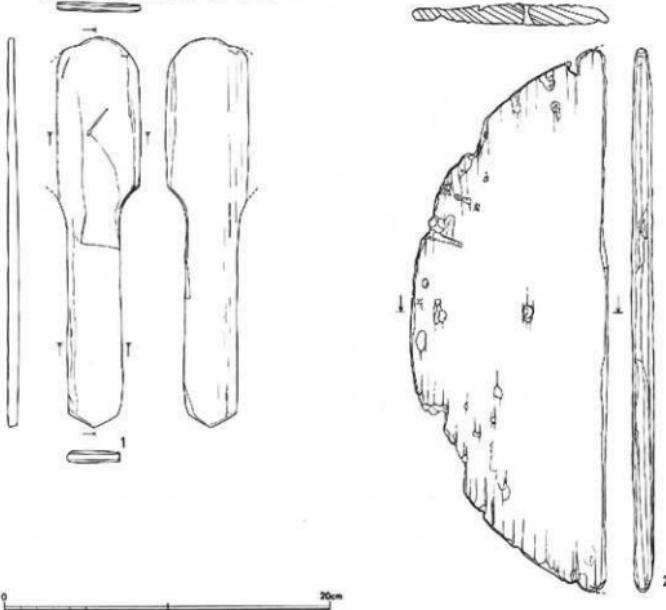
第18図は人形の頭および顔の部分で、鳥帽子をかぶった男性の正面像が描かれている。頭部の輪郭は鳥帽子を含めて切り抜いており、顔の部分とあわせると10.7cmを測る大形の人形である。顔の一部が失われており全体を窺い知ることはできないが、目、鼻、口、眉、耳を非常に写実的に描いている。なかでも大きな鼻とあごひげが特徴的である。各部の切れ目が不明のため時期の比定が難しいが、写実的に顔が表現されており9世紀ごろではないかと思われる。第19図-1は杓文字状の木製品である。柄の先端は山形に切断されている。長さ24cm、幅5.1cm、柄で幅3.1cm。12は円形曲物の底板かと思われる。



第17図 平安時代の河道出土木製品実測図(1)(1:2, 5は1:3)



第18図 人形実測図 (1 : 1)



第19図 平安時代の河道出土木製品実測図 (2) (1 : 3)

b. 奈良時代の河道

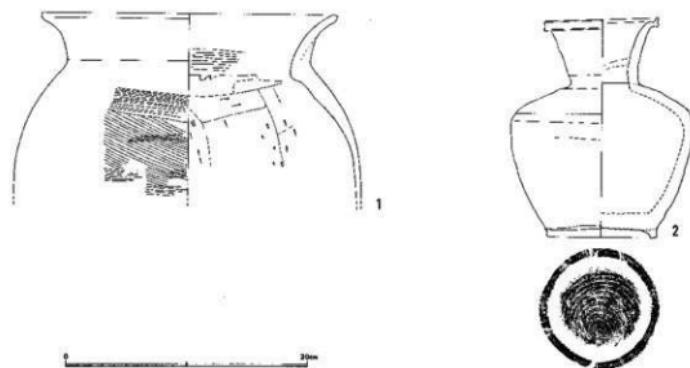
北区、D 5・D 4・E 5・E 4にかけて奈良時代の須恵器を下限とする土器を包含し、砂礫層を主体とする河道を標高-1.5～-2.4mにかけて検出した。

[河道の上層]

これに先立って、F 6 区の標高 0 m付近で、平安時代初期の完形品の須恵器壺が横倒しになった形で出土している（第20図-2）。この壺は、完形品であるうえにヨシなど植物纖維を含む粘質土層から出土していることや、この周辺から上器片など流入にともなう堆積物が検出されなかったこと、また、分厚い粘質土層を基調とした堆積層が続くことなどから、流れ着いたものではなく河川の後背地に放置され、そのまま流速の遅い水がかりによる粘質上の堆積とともに埋まつたものと推測される。

[奈良時代の河道としがらみ遺構]

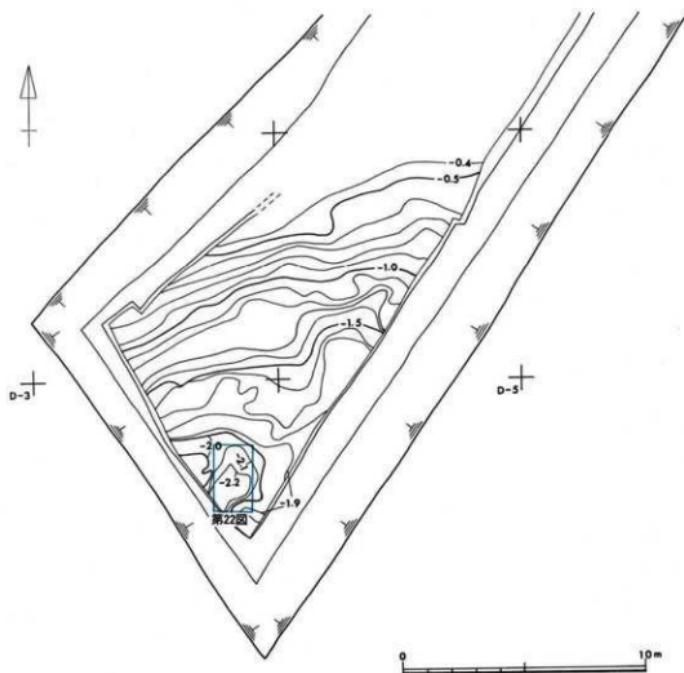
奈良時代の河道は砂層および砂礫層になりたち、平安時代初期の須恵器が出土した位置からや南側の、同須恵器出土層位の下側にあたる。この砂礫層を掘削する過程で、D 4 区の調査区南端、標高-2.0～-2.3mでしがらみ遺構が検出された。遺構は東西約 1 m、南北約 3 m の範囲で、第21図の-2.0 m 等高線の内に位置する。しがらみ遺構は木皮のついた 8 本の丸木によって組まれており（第22図）、うち 2 本が先端を杭状に削ってとがらせ、1 本は鋭利な刃物で斜めに伐られた痕跡があった。また、部分的に炭化したものも 1 木みられた。このしがらみの下から、奈良時代の土師器を下限とする土器



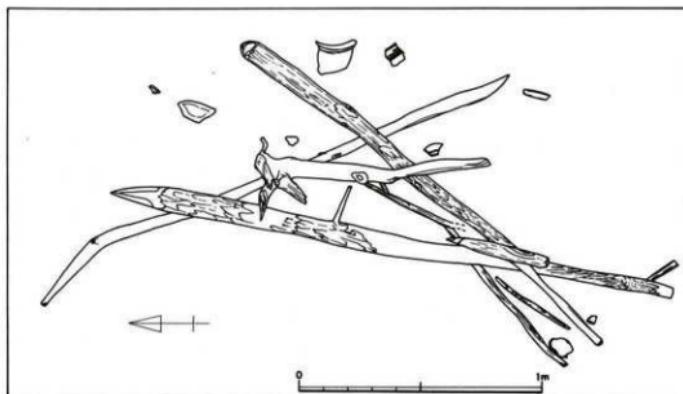
第20図 奈良時代の河道出土土器実測図(1) (1 : 4)

表2 奈良時代の河道出土土器(1)観察表

調査番号	器種・層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調 備考
20-1	土師器 要 粘土層	口径 幅最大径 24.6 28.6	LJ部は大きく外反する。	外面：口縁部横ナデ、体部 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラタケスリ	胎土：1mmの砂粒を多 く含む 焼成：白灰 色調：黄褐色
-2	須恵器 要 粘土層	口径 幅最大径 9.3 15.0 高台径 9.0	肩の強った体部に短い頸 と低い高台が付く。	外面：口縁ナゲ、底周回 転系切り 内面：口縁ナゲ 頸部に枚り口残る	胎土：1mm大の砂粒を多 く含む 焼成：白灰 色調：暗褐色



第21図 しがらみ遺構検出面測量図（1 : 200, 10cmコンター）



第22図 しからみ遺構実測図（1 : 20）

が出土した（第24図-6）。このしがらみが何に用いられたかは不明である。しかし、しがらみが作られた時期の朝駒川の水位が、少なくともしがらみのレベルから大きくかけ離れて高いものではなかったことが推測される。

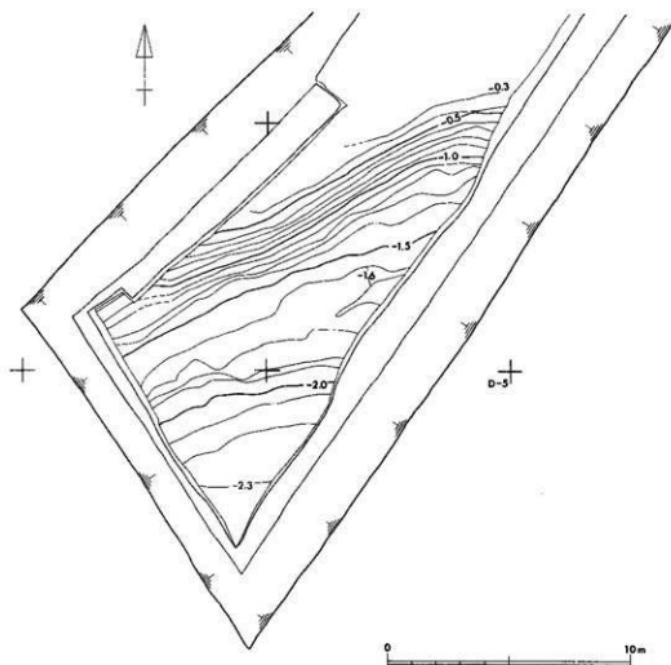
また、しがらみの上流側に、しがらみに遮られたように、円筒埴輪片1点を含む数点の上器片が検出された（第22図）。おそらく、しがらみが作られた後に、流速の速い水流によって砂礫を土体とした土砂とともに流入したものであろう。

〔奈良時代の河道と流水の痕跡〕

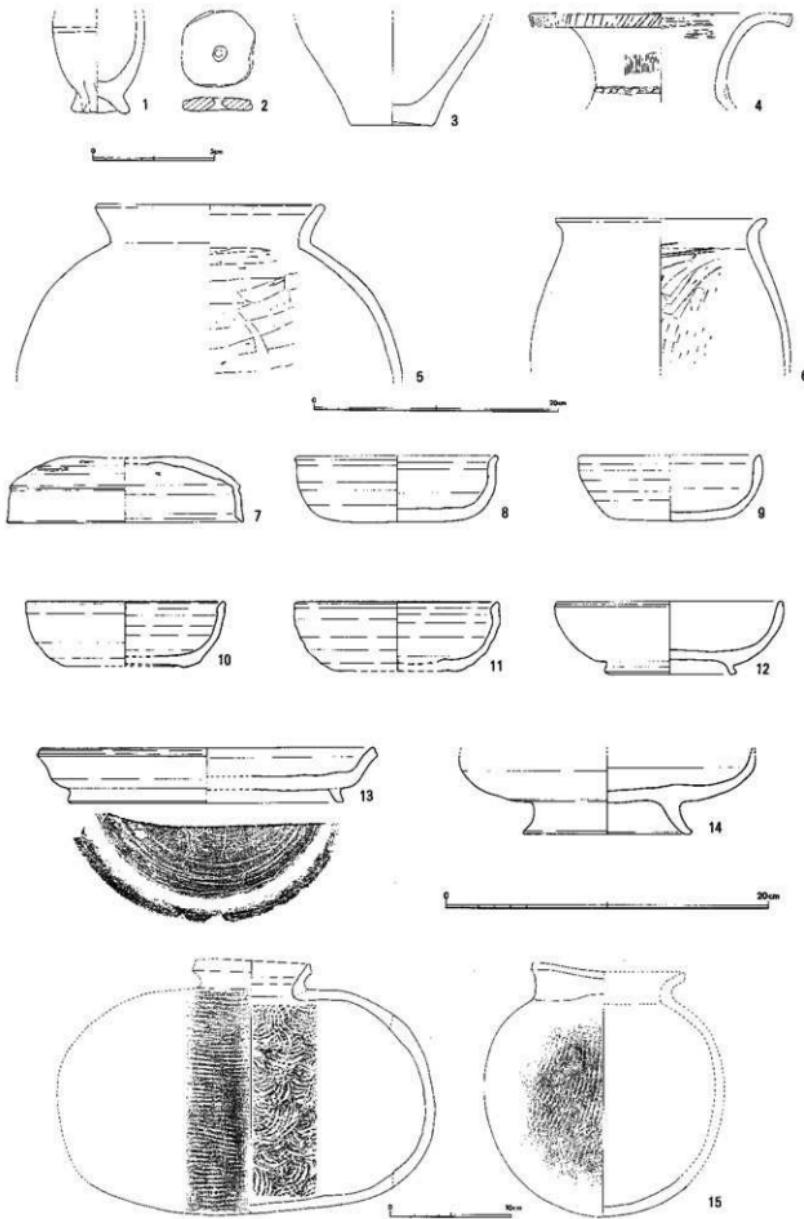
しがらみ遺構を包含している調査区南端の砂礫層を撤去すると、その下層にあたる粘質土層の上面に流水の痕跡がみられた（写真図版8-2）。ちょうど第23図の-2.0～-2.3m等高線の間に位置する。このことから、流痕を形成しつつ増水と速い水流によって、砂礫および砂が急速に流入堆積したものと考えられた。それ以後は、堆積した砂礫層は侵食されることなく、平安時代前期にかけて、その上層に急速な粘質土層の堆積をみたものと推測された。

なお、先のしがらみは、流痕を持つ粘質土層には到達していない。このことから、砂礫層が一定の堆積をみた時点で作られ、その後、さらなる砂礫層の堆積によって埋没したものと考えられた。

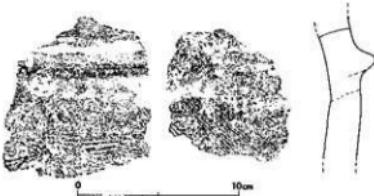
このことから、奈良時代の後半から平安時代初頭にかけての一時期にこの付近の水辺の環境に、朝駒川の水の流量や水位に急速な変化がみられたものと推測された。



第23図 奈良時代の河道測量図 (1 : 200, 10cmコンター)



第24図 奈良時代の河道出土土器実測図(2) (1 : 2, 1 : 3, 1 : 4)



第25図 円筒埴輪実測図 (1 : 3)

表3 奈良時代の河道出土土器(2)観察表

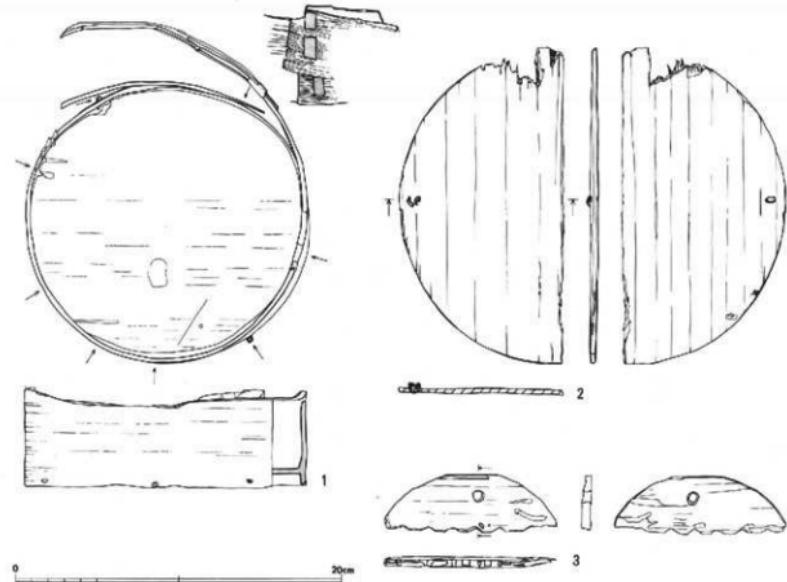
序号	器種	部位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	施上・焼成・色調	備考
24-1	弥生土器	砂礫層	脚径	2.4	腹部に二条の沈線をもつ。手捏ねによる。ナデ仕上げ。	施土：緻密 焼成：良好 色調：黄褐色	ミニチュア土器
-3	壺	砂礫層	底径	6.6	平底	外面：不明 内面：ヘラミガキ	
-4	壺	砂礫層	口径	21.6	口縁部は大きく開き、腹部へうらに弱目を残す。 腹周外側に指擦付痕をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ、頭部前方へのケーブル付痕をもつ。 内面：ヘラミガキ	施土：1mm未満の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色
-5	土師器 甕	砂礫層	口径	18.4	口縁部や外反する。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	施土：1mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色
-6	壺	砂礫層	口径	17.3	口縁部は短くからく外反する。	外面：口縁部ヨコナデ、体部不規則、内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	施土：1mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色
-7	須恵器 壺	砂礫層	口径 器高	14.5 4.0	直立する口縁部と体部の間に横が付き、口部内面に縦や斜な段をもつ。	外面：口縁部回転ナデ、大升筋、ラケスリ 内面：回転ナデ	施土：1mm以下の中細い砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色
-8	壺	粘土層	口径 器高	12.3 4.1	口縁部は僅かにくびれる。 底部は平坦。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：良好 色調：灰褐色
-9	壺	粘土層	口径 器高	11.3 4.1	口縁部は直立で、肥厚する。 底部は平坦。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：1mm以下の細い砂粒を含む 焼成：良好 色調：暗青色
-10	壺	砂層	口径 器高	12.2 4.0	口縁部は僅かにくびれる。 底部は平坦。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：良好 色調：暗青色
-11	壺	砂礫層	口径 器高	12.3 4.3	口縁部は僅かにくびれる。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：良好 色調：灰褐色
-12	高台付壺	粘土層	口径 器高 高台径	13.9 4.5 7.3	口縁部は内溝。 外反する内溝をもつ。 低い高台が付く。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：良好 色調：黄褐色
-13	高台付壺	砂層	高台径	10.5	体部と底との境にかすかに横が付く。 低い高台が付く。	外面：不明 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：不良 色調：灰褐色
-14	盤	砂礫層	口径 器高 高台径	20.8 3.4 17.0	口縁部は短く、やや外反する。 底筋外縁ちかくに低い高台が付く。	外面：口縁部回転ナデ、底筋、切り込み 内面：口縁部回転ナデ、底筋	施土：密 焼成：不良 色調：灰褐色
-15	横瓶	砂層	口径 器高 側面径	9.3(推定) 21.0 20.5(推定)	袋型の壺	外面：口縁部回転ナデ、体部平行、押しまとガキ目 内面：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ	施土：密 焼成：良好 色調：暗青色

奈良時代の河道出土土器(1)

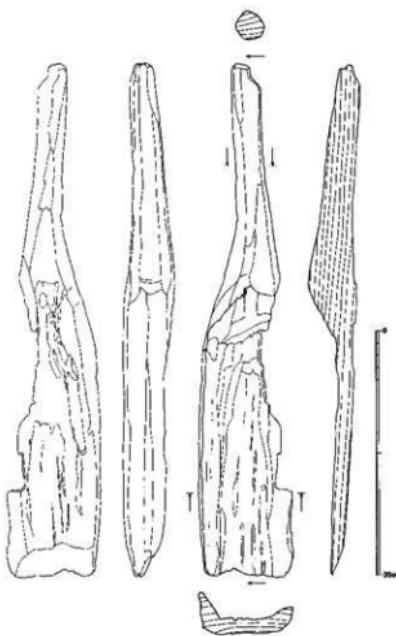
土師器の壺と須恵器の壺が出土している。土師器壺（第20図-1）は口縁部は大きく外反する。口縁部は横ナデ、体部の外面はハケ、内面はヘラケズリで、古墳時代後期から奈良時代にみられる形態である。須恵器壺(2)は胸部に稜がつき、肩が張った体部に短い頸をもつ。口縁部は短く、直立する。底部外面は糸切で、端に低い高台がつく。平安時代初頭のもの。完形品であるが、体部に焼成時のひび割れが認められる。

奈良時代の河道出土土器(2)

奈良時代の河道(2)からは弥生土器、ミニチュア土器、土師器、須恵器、埴輪円筒が出土している。第24図-1は弥生土器の壺で、胸部に2条の沈線が引かれ、やや開く高台状の脚をもつ。手捏ねで成形された弥生土器のミニチュア品である。2は弥生土器の一部を使用した紡錘車であり、径2.5cm、厚さ2mmで、中央部に径4mmの孔をもつ。4は口縁部が大きく外反する壺で、頸部には指頭圧痕文帯があり、中期に属する。5、6は土師器の壺で、口縁部は短く、外反気味。古墳時代後期から奈良時代にみられる形態である。7は須恵器の壺蓋で、口径14.5cmを測る大形品。口縁部と体部との境界に稜をもち、口唇部にかすかに段がつき、古式の須恵器に属する。8~11は須恵器の壺で、糸切底をもつ。体部は済曲し、口縁部は僅かにくびれるもの、直立て口唇部が肥厚するものがある。時期は奈良時代後半から末。12、13は須恵器の高台付壺。12は体部が内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部外面にかすかに段をもつ。13は外に開く高台がつく。時期は奈良時代。14は須恵器の盤で、口径20.8cm、高さ3.4cmを測る大形品。糸切底で、低い高台をもち、体部は短く、やや外反する。奈良



第26図 奈良時代の河道出土木製品実測図(1)(1:3)



第27図 奈良時代の河道出土木製品実測図(2)(1:4)

時代。15は横瓶で、半分以上が残る。古墳時代後期のものか。第25図は埴輪円筒のタガ部分の破片。内外面ハケ調整、タガ部分はヨコナデ。胎土には1mm大の砂粒を含む。焼成は良く、橙褐色を呈す。

奈良時代の河道出土木製品

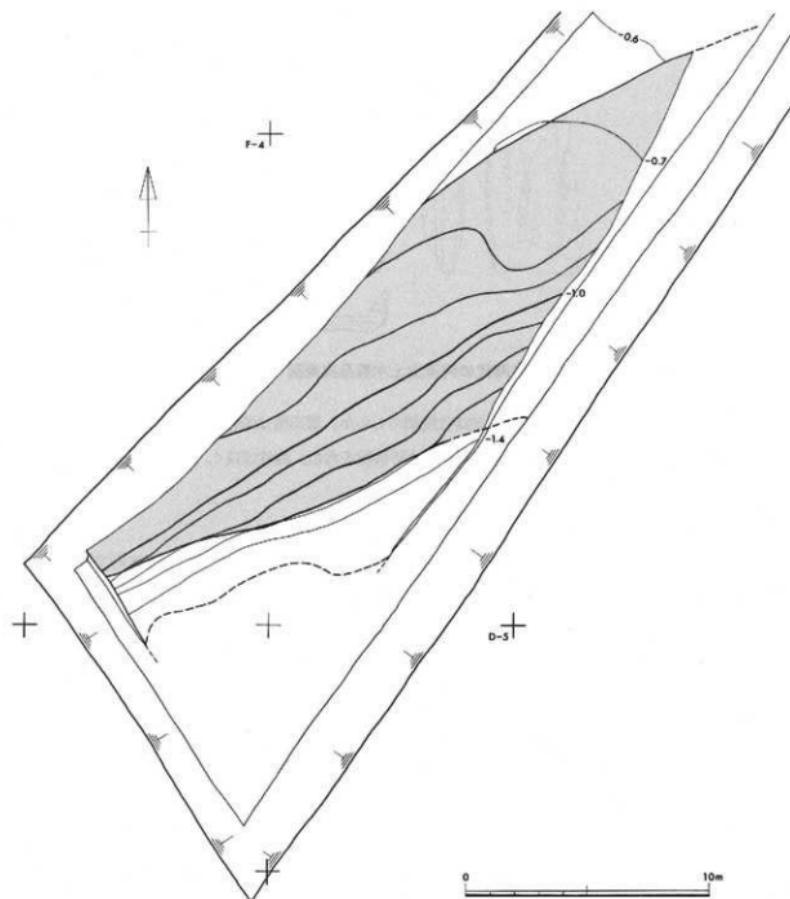
第26図1・2は円形曲物。3は用途不明の木製品である。底板と側板は7か所の木釘で結合されている。底板は径17.4cm、厚さ0.4cm、側板は高さ6.0cm、厚さ0.3cmで、底板の径と側板の高さの比はほぼ3:1である。側板は、途中で外れてしまっているが、桜皮縫じは、上縁が外縫じ、下縁は内縫じの上外下内3段縫じである。2は円形曲物の底板で、桜皮で側板を接合する。1か所に桜皮が残っているが、その位置から見ても1か所あり、1対を成していたのではないかと思われる。底板は径19.2cm、厚さ0.3cmで、柾目取り。周縁はほぼ垂直に裁ち落している。3は扁平な板材を半月形に加工し、長辺側に6か所にV字形に刻みをいれている。また、径0.6cmの円い孔が穿たれており、形態は「直柄横鍬」状を呈する。

第27図はアカトリ状木製品である。柄の端部は失われているが、現存長は42.3cm、幅7.6cm、柄の太さは2.2cmを測る。身は長方形を呈し、側板の高さは右上端で2.2cmで、底内・外面ともほぼ平坦だが、底面は端部を上向きに斜めに削っている。柄は外底面および上端面の延長で延び、上面が端部に向かって緩やかに下がっている。

c. 洪水の跡（古墳時代の後期）

北区南半F 6・F 5・E 4・E 5区の標高-0.6~-1.3m付近で、南南東に向かって緩やかに傾斜している洪水跡を検出した（第28図網かけ部分）。

この洪水跡の層は2~3cm大の青灰色の礫を主体にした比較的薄い層で、細かく破壊された多くの土器片や自然木の破片を含んでいた。また、この層の堆積は、堆積後に二次的な擾乱をうけた痕跡が見られなかった。このことから、流速の速い水によって、これら遺物が押し流されてきて後、あまり時間を置かずその上に粘質土と細砂の交互の堆積が急速に行われたものと推測された。この層の範囲

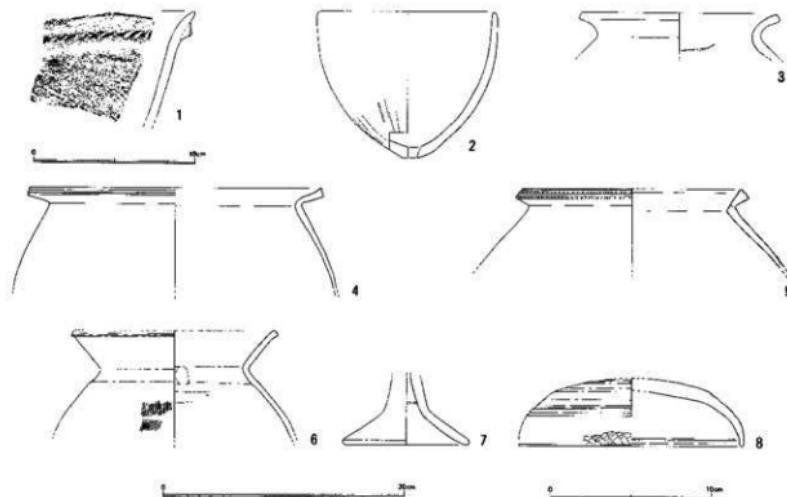


第28図 古墳時代後期初頭の洪水跡測量図（1:200, 10cmセンター）

は、標高で-0.6m付近が上限となっており、洪水時の水位を考える指標となる。なお、標高-1.3m付近以下のレベルでこの層がとぎれるのは、奈良時代の河川の侵食によるものである。

また、この層は地震の液状化現象に伴う噴砂跡のかみこんだ層の直上の層にあり、地震が発生した時期の下限を知る手がかりを得る重要な位置にある。この層からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器など各種の土器片が出土したが、古墳時代後期の須恵器が時期的には下限であった(第29図-8)。

従って、この洪水跡は古墳時代後期のもので、洪水後は比較的流速の遅い状況で水位が上昇し、急速に堆積が進んだものであろう。



第29図 古墳時代の洪水層出土土器実測図(1:3, 1:4)

表4 古墳時代の洪水層出土土器観察表

探査番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
29-1	縄文土器 深鉢	砂礫層		口縁部はゆるく外にする。 縦筋近くの外側に割目を 施した駆け突起をもつ。	外面: 二枚貝条痕ハケ目 内面: 二枚貝条痕ハケ目	粘土: 1~2mmの大砂粒を多く含む 焼成: 面斑 色調: 外部は褐色、内部は浅褐色	
2	弥生土器 盆	口径	14.8	口縁部は単純で、直立す る。底部から底部にかけては はざみがある。	外面: ハケ目の後ナデ 内面: 割りの後ナデ	粘土: 1mm以下の砂粒を 含む 焼成: 自然 色調: 淡褐色	底部には構成前の径1cmの孔が 穿たれている。
-3	壺	砂層	10.0	口縁部は短く、外反する。 内側は丸味がある。	外面: 不明 内面: 不明	粘土: 1mm以上の砂粒を 含む 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-4	壺	砂礫層	24.0	「く」の字状に回転する。 口縁部の底面はやや凹曲 し、外側に凹縁を形成す る。	外面: 口縁部不明、体部 ハケ目 内面: 口縁部不明、体部	粘土: 1mm以下の砂粒を 含む 焼成: 白灰 色調: 黄褐色	
-5	壺	砂礫層	18.0	「く」の字状に回転する。 口縁部の底面は肥厚す る。外側に凹縁と割目を 有す。	外面: 口縁部ヨコナデ、 体部ナデ 内面: 口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	粘土: 1mm以下の砂粒を 含む 焼成: 自然 色調: 黄褐色	
-6	上輪壺 壺	砂礫層	17.0	口縁部は大きく「く」の 字状に回転する。 端部は少し肥厚する。	外面: 口縁部ヨコナデ、 体部ハケ目 内面: 口縁部ヨコナデ、 体部ハケ目	粘土: 1mm以上の砂粒を 含む 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-7	(高环) (脚部)	砂礫層	10.5	脚は両側から屈曲して人 字型開く。	外面: 高环: ガキ、裾部 ハケ目後ナデ 内面: 体部ハケ目 外側: 体部ナデ	粘土: 1~2mmの大砂粒を 含む 焼成: 良好 色調: 黄褐色	脚部内面に布 目模様。
8	須恵器 壺	砂礫層	13.8 4.2	天井部と口縁部の間に 幾つかの凹縁がある。口縁部 内面に一条の凹縫がある。	外面: 天井部ハラ削り、 口縁部ヨコナデ、その他の 内面: 体部ナデ	粘土: 1~2mmの大砂粒を 含む 焼成: 良好 色調: 黄褐色	口縫部外側にヘ ラ状T.具で押圧 している。

古墳時代後期初頭の河道（第32図）

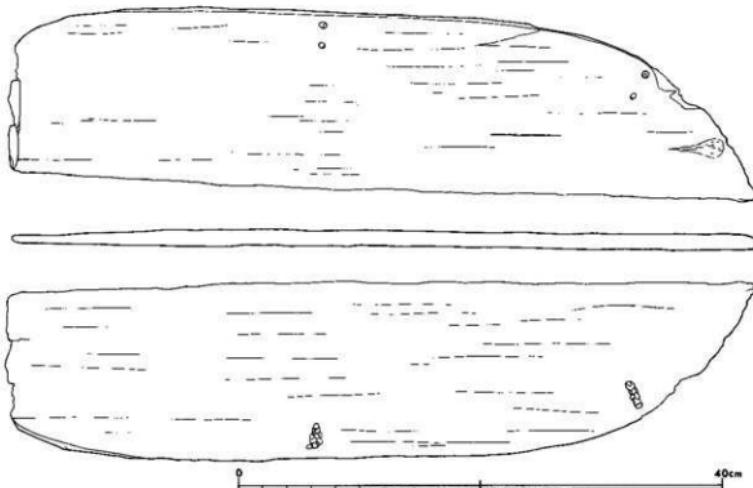
この層位は、地震による噴砂がかみこんでいる層である。厚い粘質土層と比較的薄い砂層が交互に堆積している。この層位からは遺物出土は少なかった。出土遺物は、弥生土器片のほか古墳時代中期から後期初頭にかけての上師器の壺片がわずかに見られる。

古墳時代の洪水層出土土器

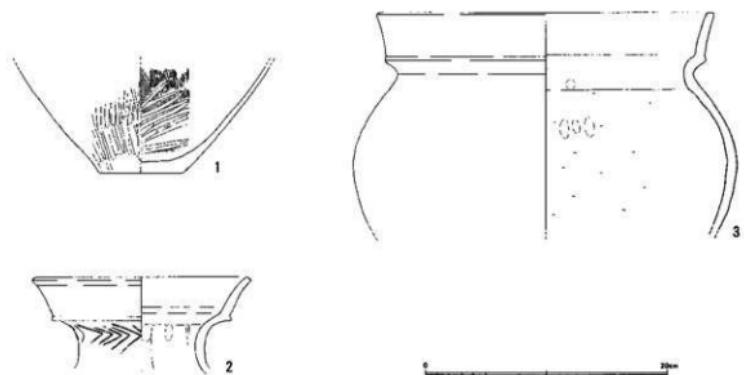
古墳時代後期の洪水層からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。第29図-1は縄文土器の深鉢。口縁部は緩く外反し、刻目を施した貼付突帯をもつ。晩期。2～5は弥生土器。2は鉢で、口径14.0cm、器高は12.1cmを測り、卵型を呈す。尖底に直行する口縁部をもつ。底部には焼成前に開けられた孔がある。時期は不明。3は壺で、口縁部が短く、かつ、外反する。時期は中期か。4、5は「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ大形の壺。口縁部の端部には二条の凹線を施す。5には刻目がつく。中期。6は上師器の壺。口縁部は大きく「く」の字状に屈曲し、端部は肥厚する。古墳時代中期。7は土師器の高环の脚部。小形品で、口径10.5cmを測る。筒部から屈曲して大きく開く。脚裾部に布目痕が残り、型造りと考えられる。時期は中期。8は須恵器の蓋で、口径13.8cm、器高4.2cmを測る。天井部と口縁部の境に二条の沈線があり、口唇部内面には一条の凹線が残る。山陰須恵器編年Ⅲ期に属し、後期の前半にあたる。

古墳時代の洪水層出土木製品

第30図は楕円形曲物の底板ではないかと思われる。二個一対の円孔を2か所に穿っている。長さ61.6cm、厚さ0.6～1.3cmを測る。柾目取り。



第30図 古墳時代の洪水層出土木製品実測図（1：4）



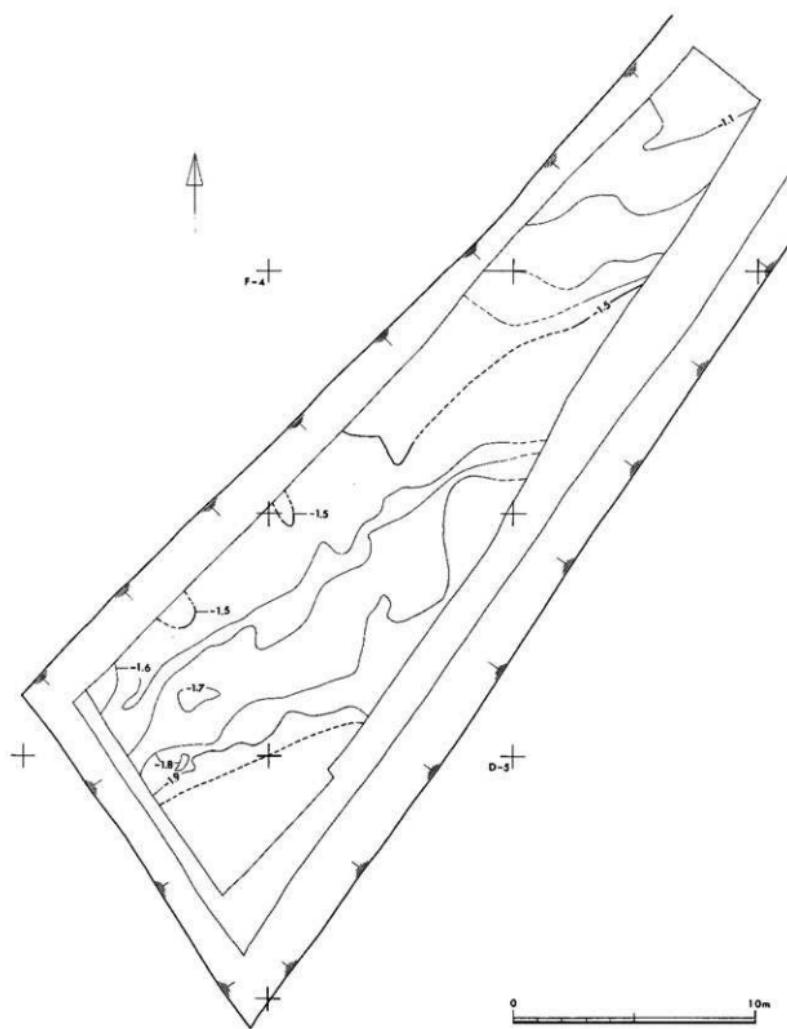
第31図 古墳時代の土層出土土器実測図（1：4）

表5 古墳時代の土層（中期と後期前半の間にある洪水層）出土土器観察表

検査番号	器種	部位	法県(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
31-1	弥生土器 (底面)	底面	6.8	しっかりした平底	外面：ハケ目の後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	胎土：2mm以上の砂粒を含む 焼成：良好 色調：灰褐色	
-2	土師器 壺	砂層	口径 27.5	複合口縁。肩部から体部 は丸くなる。	外面：口縁部ヨコナギ、 体部不規則 外側：口縁部ヨコナギ、 体部ヘラ削り	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰色	
-3	壺	砂礫層	口径 17.4	複合口縁。頸部外面に羽 状文施す。	外面：口縁部ヨコナギ、 内面：頸部に指跡付痕残 る。	胎土：2mmの砂粒を含む 焼成：良好 色調：深灰色	

古墳時代の土層（中期と後期前半の間にある洪水層）出土土器

古墳時代中期の洪水層と後期前半の洪水層に挟まれた層からは、弥生土器と土師器が出土している。第31図-1は、弥生土器の底部。薄手で、内外面はミガキで仕上げる。2、3は古墳時代前期の土師器壺である。2は複合口縁をもち、胴部は張る。3も複合口縁で、頸部には羽状文を施す。

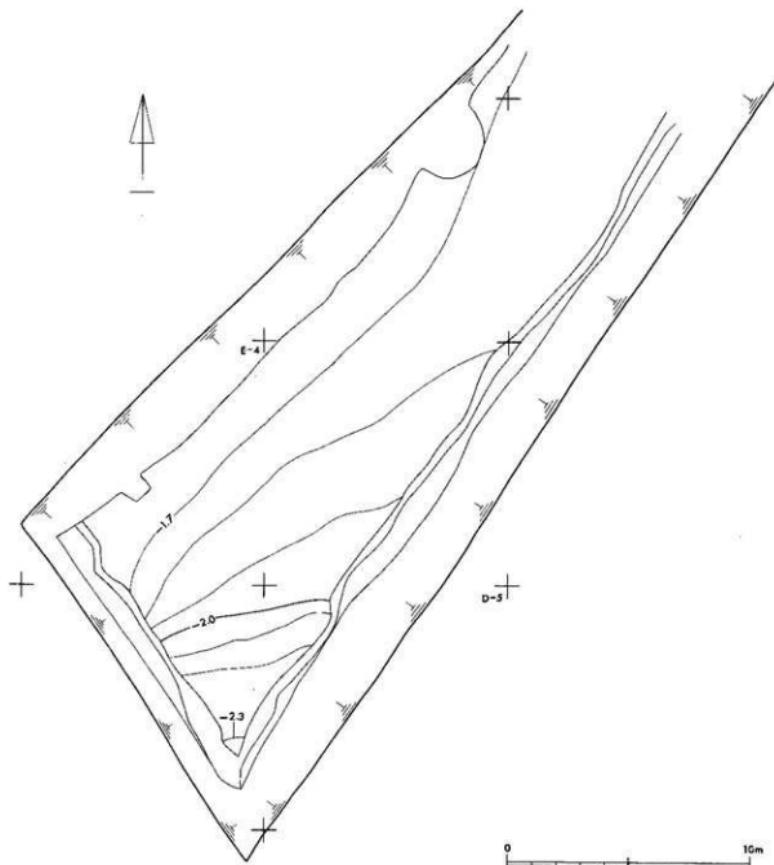


第32図 古墳時代後期初頭の河道測量図（1 : 200, 10cmコンター）

d. 古墳時代中期の河道

遺物包含層の最下層にあたり、厚い砂礫層で構成されている。第33図は、遺物包含層である砂礫層を引揚げた後の粘質土層が露出した状況である。北区南半のF 6・F 5からE 5・E 4区の北端にまで広がり、標高-1.6m～-1.9m付近にかけて、南東向きに緩やかな傾斜面をつくっている。ただし、D 5・D 4区の標高-2.0m付近以下は、奈良時代の河道が侵食した跡である。

この砂礫層が、古墳時代後期初頭の粘質土層に食い込んだ地盤による噴砂の供給源である。少なくとも地震が起きた当時、すでに埋もれていたこの層位は水分を多く含んだ層位であったことを示している。



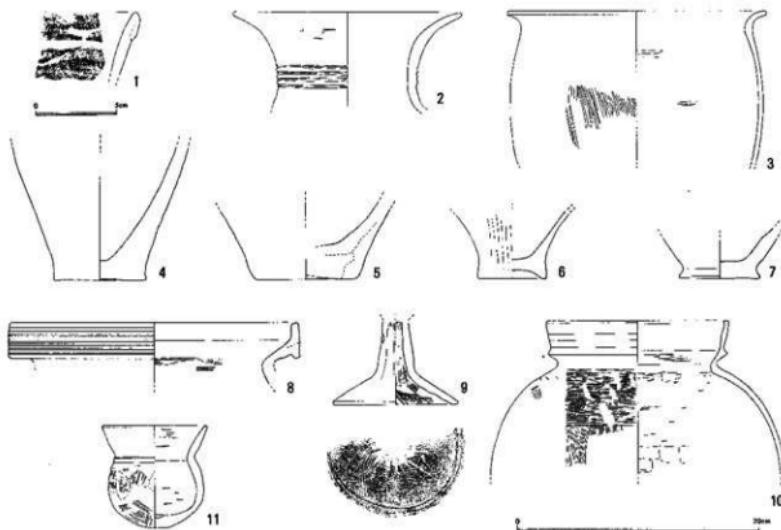
第33図 古墳時代中期初頭の河道測量図（1 : 200, 10cmセンター）

この層位からは、縄文・弥生土器から土師器にいたる多くの土器片が出土している。破壊・磨滅をうけたこれら多くの土器片は、運搬・堆積を繰り返してこの場所に到達したものと考えられた。この層位は、朝霧川が比較的速い流速で流れている時に、砂礫が押し流されてきて堆積したことが推測された。この中に唯一完形の丸底の上師器が出土しており、これが出土遺物の中で最も新しい上に、破壊をうけていないことから、この河道の時期を知る鍵となる遺物と考えられた（図34-11）。

また、この層位は、第12図の最下層=北区北半の杭列下層の砂礫層と同一層である。

古墳時代の土層（最下層）出土土器

調査区の最下層で、古墳時代中期の洪水層からは縄文土器、弥生土器、上師器が出土している。第34図-1は縄文時代前期の深鉢。口縁部には貼付肥厚帯をもつ。2～8は弥生土器で、他の時期よりも量的には多い。2は前期後半の壺で、大きく外反する口縁部をもつ。頸部にヘラ描きの平行沈線文を4条施す。3は口縁部が大きく外反する中期の壺。4～7は底部。薄手と厚手があり、時期も前期と中期のものが混ざる。6、7は蓋の可能性もある。8は複合口縁部で、6条の凹線状沈線をもつ。後期後半。9～11は上師器。9は高環の脚部で、円筒状の筒部に大きく開く裾部がつく。古墳時代中期。10は壺。複合口縁をもち、頸部には羽状文を施す。形態より古墳時代前期。11は完形の小形丸底壺。球形の体部にやや外開きの口縁部がつく。中期のものか。前述の高環とともに祭礼にかかる遺物と推定され、河道に投棄された可能性が強い。



第34図 古墳時代の土層（最下層）出土土器実測図（1：4）

表6 古墳時代の土器（最下層）出土土器観察表

件名番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
34-1 萬葉土器 深鉢	砂礫層			口縁部はやや外側となる。 口縁部外面に貼付把羣 帯をもつ。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土上：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：茶褐色	
-2 弥生土器 等	砂礫層	口径	16.8	口縁部はゆるく外反し、 底部に横筋を平行寸線文 を4条施す。	外面：ハケ目以後ミガキ 内面：ミガキ	胎土上：2~3mmの砂粒 を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-3 盤	砂礫層	口径	23.0	口縁部は短く、大きく外 反する。	外面：口縁部ヨコナタ、 内面：ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナタ、 内面：ヘラミガキ	胎土上：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：茶褐色	外面にスス付着
-4 底部	砂礫層	底深	7.7	しっかりした底部	外面：不明 内面：不明	胎土：3mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：茶褐色	
-5 底部	粘土層	底径	8.0	しっかりした底部	外面：不明 内面：全体と底部の境に 指痕压痕残る	胎土：2mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-6 底部	砂礫層	底径	5.8	上げ底の小さい瓶部	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	胎土上：1mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-7 底部	砂礫層	底径	6.6	円盤状の底部	外面：ハケ目 内面：ヘラミガキ	胎土上：2mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-8 壺	砂礫層	口径	23.6	口縁部は複合状を呈し、 外表面に6条の凹線状沈線 を施す。	外面：ヨコナタ 内面：口縁部ヨコナタ、 類部ハケ目	胎土：2mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-9 上開器 高环 (脚部)	砂礫層	脚径	10.4	脚部は筒部から組曲して人 字形開き。 脚部はへうて曲取り を施している。	外面：ヘラミガキ、底面 の脚部に組曲があり、 内面に脚部取りの凹 ヶ入り、底部ハケ目	胎土：1mmの砂粒を含 む。 焼成：良好 色調：黄褐色	脚部は光形 環部を少く。
-10 壺	砂礫層	口径	15.0	複合口縁部は直立気味。 縁部は平滑面をなす。 前部には羽状の刻突文を 施す。	内面：口縁部から肩部まで はヨコナタ、脚部ハケ目。 内面：口縁部はヨコナタ、 体部はヘラケ目。	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	口縁部内面に布 痕認められる。
-11 小形丸底 壺	砂礫層	口径 岩高	8.6 8.1	外側する口縁部。 球形の体部。	外面：1脚部から肩部まで はヨコナタ、脚部はヘラケ 目。 内面：口縁部ヨコナタ、体部 はヘラケ目。内面は後ナデ。	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	完形品

(4) 杭列遺構・地震の液状化現象

〔杭列の概要〕

北区北半のI 8・I 7区にかけて、杭列遺構が出土している(第35図)。この杭列では、丸杭・角杭あわせて28本の杭が見られた。杭の大きさは、長さがおおむね小さいもので40cmから大きいもので120cm位のもの、太さがおおむね5cmから15cmのもので構成されている。破損したものもあると思われるが、元の長さがどの程度であったか推測することは困難である。この杭列のレベルは、杭頭が標高0m付近が上限、-0.5m付近が下限、また、杭先は標高-0.5m付近が上限、-1.5m付近が下限である。

〔杭列と周辺の環境〕

この付近では、標高-0.3m～-0.4mにかけて、高坏脚を中心に土師器、自然木が多く出土した。自然木は、北東から南西方向に向かっておおむね…様の方向に並んで出土しており、比較的緩やかな流れの中で漂着し、水が引いた後とり残され、その後再度の冠水と上砂の堆積に伴い、埋没したものであろう。土器は壊れているが、土砂とともに押し流されたような磨滅や移動に伴う極端な破片ともいうべき破壊はうけていない。さらに、この付近の堆積層では、標高-1.2m付近以下に砂礫層が堆積しているが、それ以上の層位では粘質土層を基調にして、ところどころにレンズ状の細砂層を含むもので、流速が比較的遅い水際付近で堆積したものであろう。しかも、このレンズ状の細砂層は東南方向に向かって緩やかに傾斜しており、杭列が打ち込まれた当時、この付近の河道の線は北東から南西方向に向かっていたものと考えられた(第35図、杭列遺構実測図参照)。

従って、この杭列は水際付近に打ち込まれたもので、除々に水位が上昇し、上砂が堆積することで、旧杭が用をなさなくなる度に、新たに打ち加えられたものではないかと推測された。

〔遺物の出土状況から〕

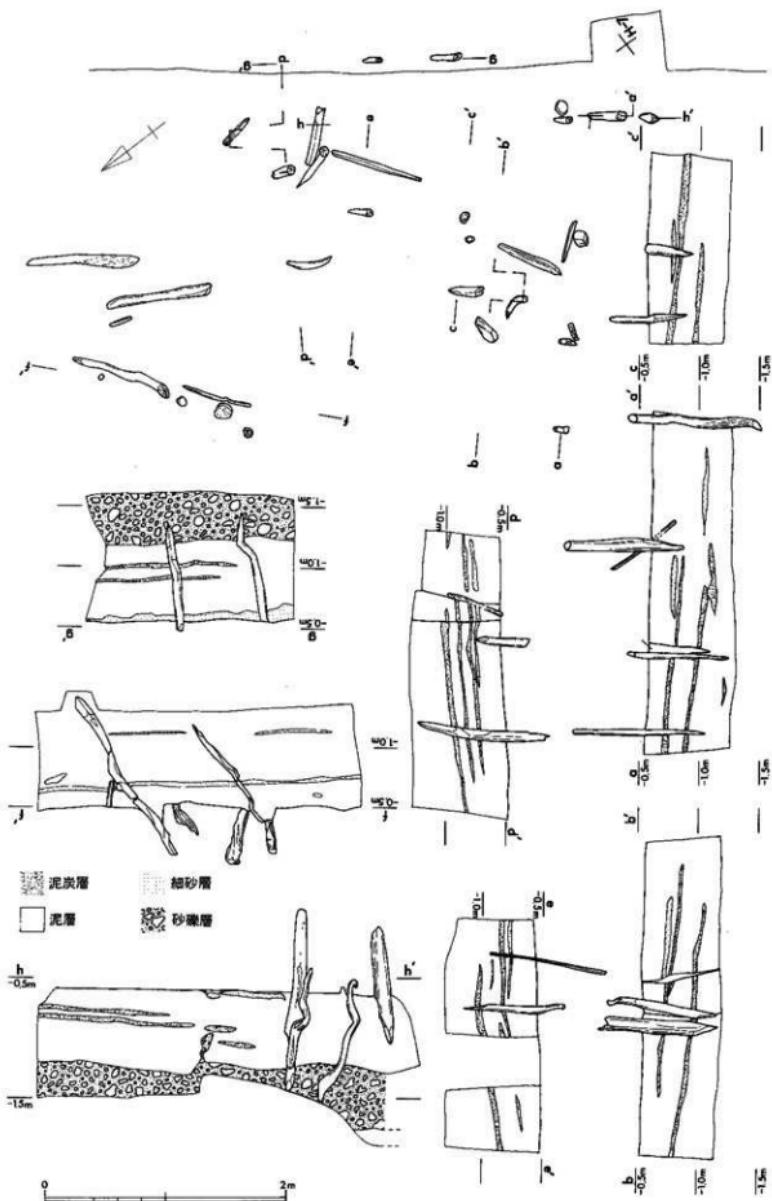
先述のとおり、この杭列付近から出土した土師器は、出土状況から大きな移動を伴って堆積したものではないことが推測された。完形品はないが、接合可能な破片が比較的まとまりを持って出土しており、壊れたものがこの付近に投棄されたか、壊れて川岸付近に放置された土器片が落ちこんだものかではないかと考えられた。

〔屈曲した杭〕

出土した杭列の杭のうち、裁断面g-g'、h-h'の4本には屈曲がみられた。いずれも遺物包含最下層の砂礫層にまで打ち込まれた丸杭であった。この砂礫層から上層の粘質土層に向かって、裁断面h-h'の中央部分に見られるような地震に伴う液状化現象の痕跡がみられる。また、この砂礫層は、北区南半の噴砂の供給源になっている古墳時代中期の河道跡につながっており、この屈曲と地震との関係が考えられる。

〔杭列の時期〕

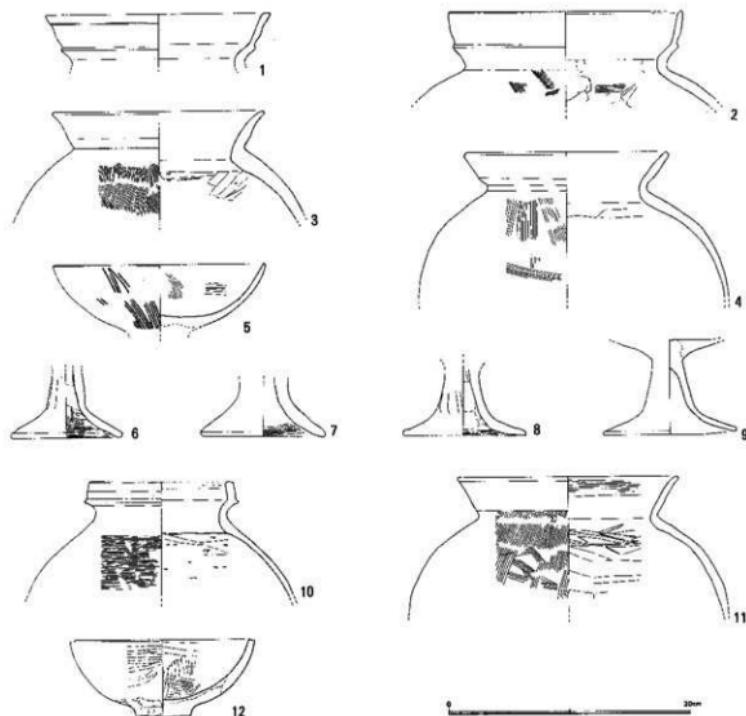
標高-1.2～-1.6mにかけて広がる杭列下層の砂礫層からは、弥生土器・土師器、木製品などが出土している。そのうち、時代的に下限となるのは古墳時代中期の土師器壺である(第38図-12)。また、杭の頭部付近から出土した土師器は、すべて古墳時代中期のものである(第36図)。したがって、この杭列は古墳時代中期のものであると推測された。



第35图 桩列遗构实测图 (1:40)

古墳時代の土器（杭列の上部、中間の層）出土土器

第36図は、古墳時代の中期に打たれた杭列の上部と中程の粘土層から出土した土師器。器種には壺、甕、高环などがある。時期的には古墳時代前期から中期のものまで認められるが、量的には中期が多い。1、2は複合口縁をもつ甕。1の複合口縁は退化し、縁は鈍い。2は、口縁部は直立気味で、縁はやや鈍い。3、4は甕で、口縁部は「く」の字に外反する。口縁部外面下方にはかすかに稜が残る。時期は前期から中期にかけてのものか。5～9は高环で、中期のもの。5は楕形をする坏部。6～9は高环の脚部。円筒状の筒部に、大きく開く裾部が付く。6は完形品で、8、9には赤色顔料が塗布されている。これらの高环は祭祀にかかる遺物と思われ、河道に投棄されたものと推定される。10は甕。複合口縁をもち、口縁部は内傾する。時期は前期。11は甕で、口縁部は「く」の字に外反する。口縁部外面下方にはかすかに稜が残る。時期は前期から中期にかけてのものか。12は楕形土器。楕形を呈し、円盤状の底部が付く。時期不明。



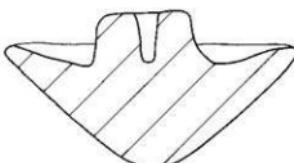
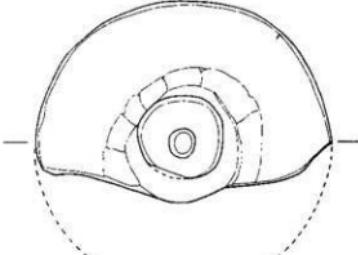
第36図 杭列上・中層出土土器実測図 (1 : 4)

表7 古墳時代の土層(杭列の上、中層)出土土器観察表

検出番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手 法 の 特 徴	胎上・焼成・色調	備 考
36-1	十脚器 甕	粘土層 口径	18.4	複合口縁部は退化して、縁は純い。	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白紅 色調: 黄褐色	
2	甕	粘土層 口径	19.2	複合口縁部は直立気味。縁はやや純い。	外面: 口縁ヨコナデ 内面: 口縁ヨコナデ 手法: 砂押捺目直立後ナデ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	口縁部の外側にスス付着
-3	甕	粘土層 口径	17.2	口縁部は外傾し、外面下方にかすかに縫が認められる。	外面: 口縁部から底部にかけてヨコナデ、直立後ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデと底部に横縫 手法: 振り込み	胎土: 1mm以上の砂粒を多く含む。 焼成: 白紅 色調: 黄褐色	
-4	甕	粘土層 口径	16.8	口縁部は外傾し、外面上方にかすかに縫が認められる。	外面: 口縁部ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデ横縫 手法: ヘラケズリ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白紅 色調: 黄褐色	
-5	高环 (环部)	粘土層 口径	17.2	ゆるやかに内側する輪形の縁部	外面: 口縁部ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデ横縫 手法: ヘラケズリ	胎土: 密 焼成: 不良 色調: 黄褐色	
-6	高环 (脚部)	砂層 脚径	9.0	円筒形の脚部から縁部に大きく聞く。	外面: ヘラミガキ 内面: 司部は絞り目、脚部ハケ目	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 黄褐色	脚部は完形
-7	高环 (脚部)	粘土層 脚径	10.4	縁部が大きく広く。	外面: ナデ 内面: 縫部は絞り目、縁部ハケ目	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-8	高环 (脚部)	粘土層 脚径	10.1	円筒形の脚部から縁部に大きく聞く。	外面: ヘラミガキ 内面: 司部は絞り目後ヘラケズリ、縁部はハケ目	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	赤色顔料塗布
-9	高环 (脚部)	粘土層 脚径 脚高	11.0 6.2	円筒形の脚部から縁部に大きく聞く。 环部の底は平坦。	外面: ヘラミガキ後ヨコナデ 内面: 司部は絞り目後ヘラケズリ、縫部ハケ目ヨコナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡黄色	赤色顔料塗布 环部ヘラミガキ
-10	甕	粘土層 口径	11.8	口縁部は短く、やや内傾する。 口縁部は平坦。	外面: ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデ、脚部ハケ目 手法: ヘラケズリ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-11	甕	粘土層 口径	18.0	口縁部は外傾し、外面上方にかすかに縫が認められる。	外面: 口縁部ヨコナデ、脚部ハケ目 内面: 口縁部前方のハケ目後ヨコナデ 手法: ヘラケズリ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	口縁部に黒斑
-12	甕	粘土層 口径 器高	15.2 6.4	丸底のある脚部よりゆるやかに内倒し、口縁部に至る。 底部に径4.5cm、高さ0.5cmの円盤状の高台が付く。	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内面: 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	蓋の可能性もある。

こま形土製品

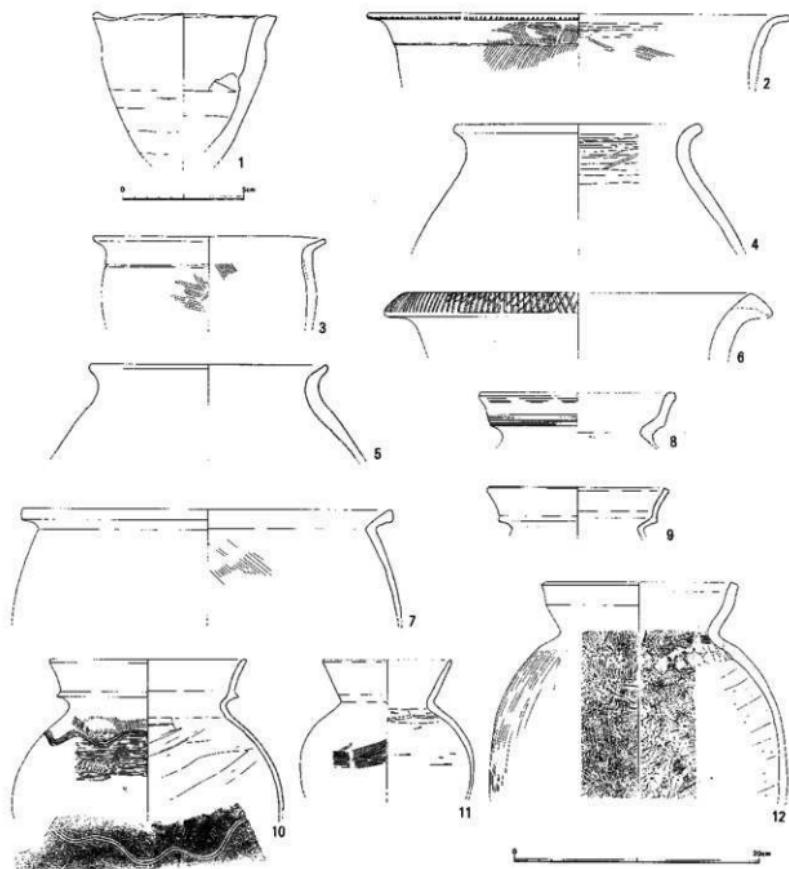
傘形および独楽(こま)形を呈す。傘部の径は6.0cm、高さは2.5cmを測り、ナデにより丁寧に仕上げられている。中央の突起部は径1.8cm、高さ1cmで、傘部との境に指ナデ痕が残り、その中央部に深さ1.0cm、径4mmの孔をもつ。胎上は密で、焼成は良く、黄褐色。なお、この用途は定かでない。紡錘車、祭具ともいわれている⁽⁴³⁾。



第37図 こま形土製品実測図 (1:1)

古墳時代の土器（杭列の下層）出土土器

杭列の下部にある砂礫層からは弥生土器、土師器が出土している。第38図-1はミニチュア土器で、口径7.6cmを測る。口縁部はやや外開きになり、体部との境に段をもつ。前期の壺を模したものか。2、3は弥生時代前期の甕で、口縁部は大きく外反する。2は口径24.6cmの大形品で、口縁部と体部の境に段をもち、口唇部に刻目を施す。3は体部との境にヘラによる沈線をもつ。4、5は前期の壺。ごく短く外反した口縁部をもち、なで肩で、胴張りとなる。6は中期の壺。口縁端部は下方に拡大し、クシによる斜格子文を施す。7は中期の大形甕。口縁部は大きく外反する。8は後期の甕。口縁部の外面にクシによる数条の沈線が入る。9、10は複合口縁をもつ古墳時代前期の甕。10は肩部に3条のクシによる波状文を施す。11は丸底壺。口縁部は外へ直線的に開く。外面体部は細かなハケ目後、ナデで丁



第38図 杭列下層出土土器実測図（1は1：2, 1：4）

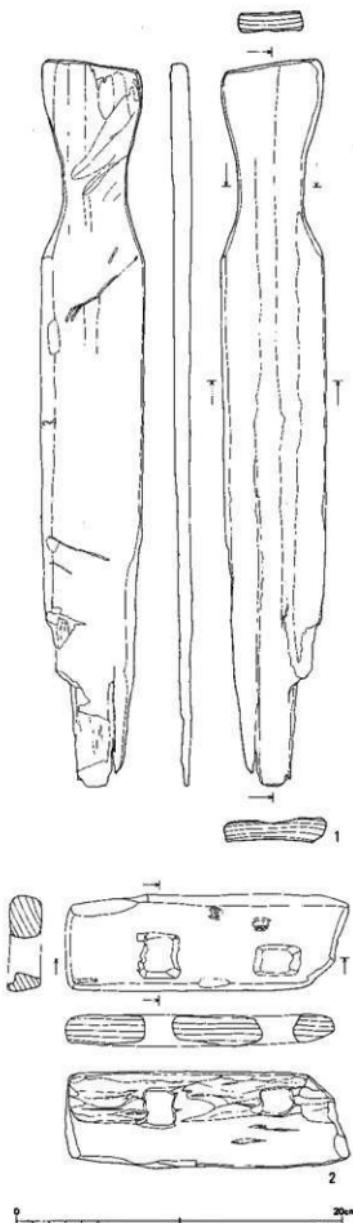
表8 古墳時代の土層(杭列の下層)出土土器観察表

補問番号	器種	部位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
38-1	寄生上器 鉢	砂礫層	口徑 7.6	口縁部の奥から口部周囲にかけてやや内側部にはねらかに厚いが外側部にはねらかで、音を響いている。	外面：手型で成形し、横方向のナデで仕上げる。 内面：手振扱い、ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：黄褐色	ミニチュア土器内外面に黒斑あり。
-2	甕	砂礫層	口径 24.6	口縁部は大きく外反する。 口縁部に刻目。ハケ目 原体による弱い段をもつ。	外面：荒いハケ目 内面：ハケ目の後、ヨコナデ	胎土：2 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色	
-3	甕	砂礫層	口径 19.2	口縁部は大きく外反する。 ヘラによる条の状線を施す。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ、 体部ヨコナデ	胎土：1~2 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：茶褐色	外側スス付着
-4	甕	砂礫層	口径 20.0	口縁部は丸かく、外反する。 肩振り。	外面：ヨコナデか 内面：ハラミガキか	胎土：1 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：茶褐色	
-5	甕	砂礫層	口径 19.6	口縁部は短かく、外反する。 肩振り。	外面：風化のため不明 内面：ハラミガキか	胎土：2~3 mm大の砂粒を含む 焼成：不良 色調：灰褐色	
-6	甕	砂礫層	口径 28.2	口縁部は大きく開き、口縁部はやや細く、口縁部は下方に斜めに、クシ彫りの刻字を施す。	外面：口縁部ヨコナデ、 頭部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ	胎土：1~2 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色	
-7	甕	砂礫層	口径 30.6	口縁部は「く」の字状に屈曲する。	外面：口縁部ヨコナデ、 頭部ハケ目後ナデ	胎土：1 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色	
-8	甕	砂礫層	口径 16.0	複合口縁で、やや外反する。 口縁部外側にクシ彫りの状線がある。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	胎土：1 mm以下の砂粒を含む 焼成：良好 色調：黄褐色	口縁部外面にスス付着
-9	十輪器 甕	砂礫層	口径 15.0	複合口縁で、やや外反する。 端部は平坦で、素の状態がある。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：茶褐色	口縁部の内・外側にスス付着
-10	甕	粘土層	口径 16.2	複合口縁で、やや外反する。 肩部に二条の波状文が施されている。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ、 体部ハケ目	胎土：1 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：茶褐色	外側スス付着
-11	甕	砂礫層	口径 10.6	球形の体部に外傾する口縁部が付く。	外面：口縁部から肩部までヨコナデ、底面細かいハケ目 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ目	胎土：密 焼成：良好 色調：淡黄色	
12	甕	砂礫層	口径 16.2	口縁部はやや外開きとなる。 口縁部の中途にかすかな棱が認められる。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ、頭部微凹。体部ハケ目	胎土：1~2 mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：褐色	外側スス付着

寧に仕上げている。中期か。12は中期の甕で、口縁部にかすかな稜をもつ。調整は外面ハケ、内面頭部に指頭圧痕が難に残る。

木製品

第39図は1・2とも用途不明の加工材である。1は楔状の板材である。上端は両側から抉りをいれて握り状に作りだし、下端をやや細く尖り気味にしている。長さ44.9cm、幅6.3cm、厚さは上端で1.2cm、下端で0.6cmを測る。2は長さ17.5cm、幅5.9cm、厚さ2.0cmの板材で、2か所に方形の孔が掘り込まれている。

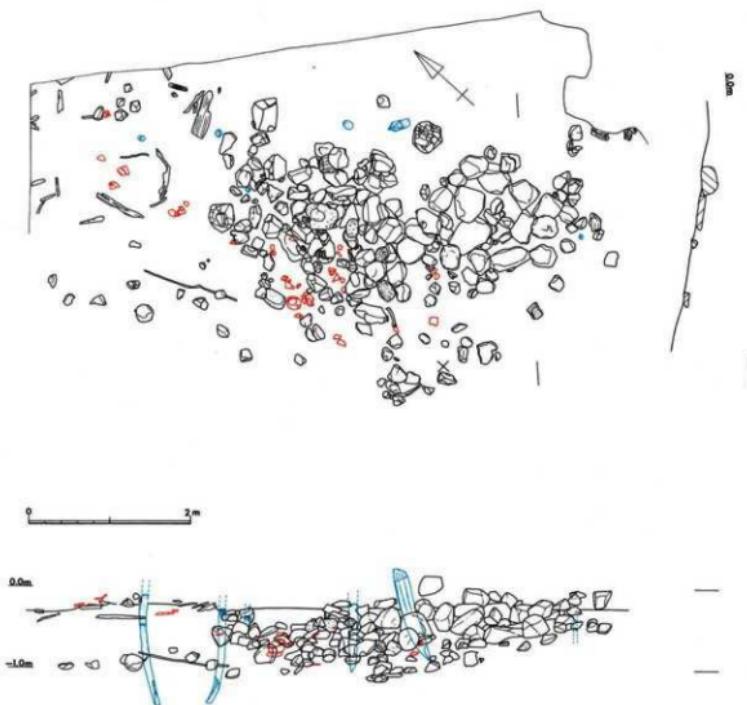


第39図 杭列下層出土木製品実測図 (1 : 3)

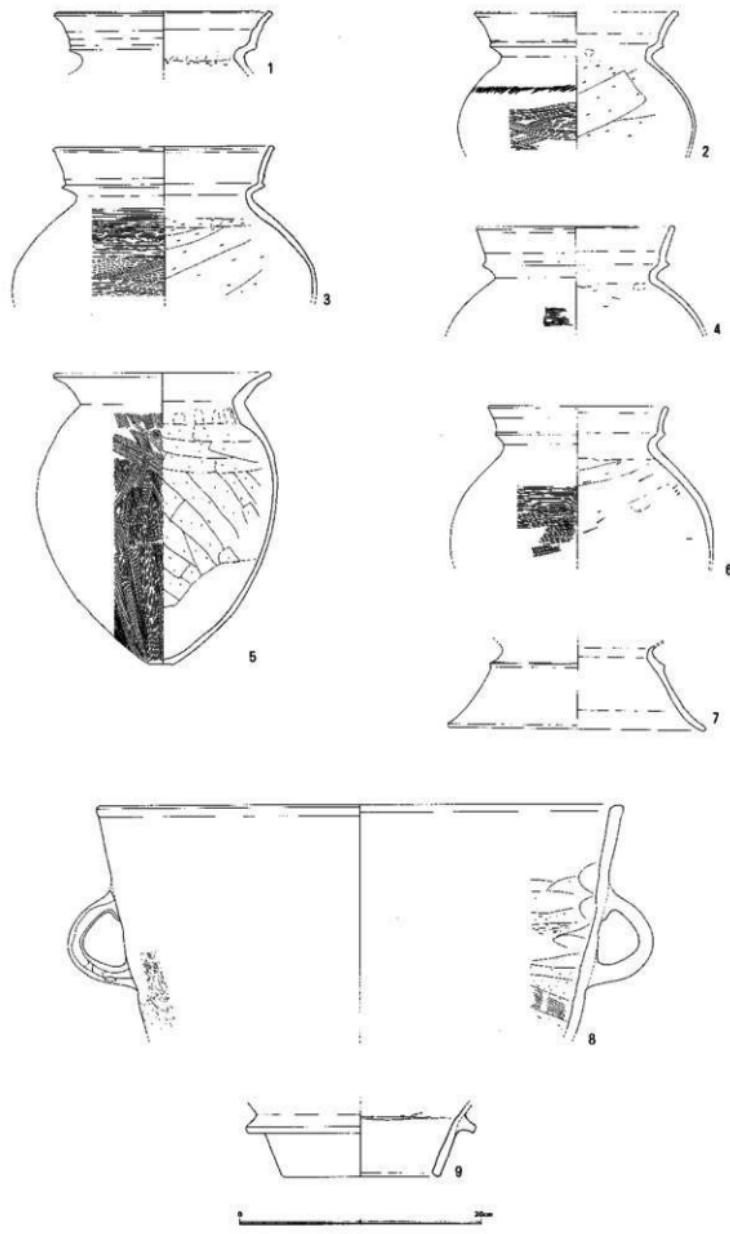
(5) 石組護岸遺構

この遺構は北区北側にある河道の切り込み肩部で検出された。石組は肩部の東側に位置し、 15° の緩やかに傾斜する粘土層の上面に220個程が集石する。その高さは標高0 mから-0.5 mの間にあたり、大きさは拳大から人頭大の河原石である。その配置には規則性はないが、人頭大のものは標高0 mから-0.3 mの間に点在する。石材としては、朝駒川上流の河原にある安山岩、玄武岩、流紋岩などが大半を占め、近くから運ばれたものと思われるが、中には大根島産の玄武岩も数個含まれ、中海から運ばれたことが知られる。

石組の西側には杭列が存在する。人頭大の石群に接して、幅20cm、長さ1.3m以上を測る大形のものが打ち込まれている。この杭で注意される点は上端に波や舟食虫による腐敗した痕跡が認められることであり、これは水面に永く存在した結果生じたものであるという^(注4)。この杭が打たれた時期の水面は、標高0.2mから0 mの間ということになる。杭付近にある同時期の流木の堆積層との関係においても、その標高が-0.2～-0.4 mであり、水面の高さとは矛盾しない。水面の高さが正しいと



第40図 石組護岸遺構実測図 (1 : 60)



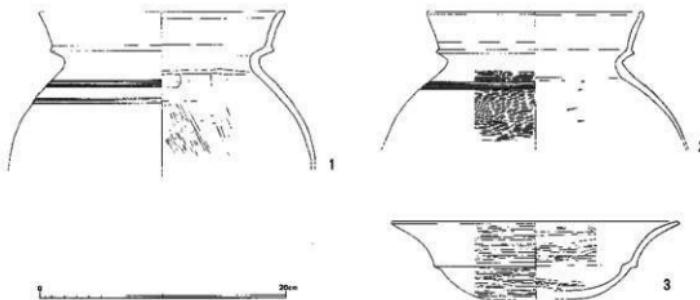
第41図 古墳時代の石組護岸造構出土土器実測図（1：4）

すると、石組の上場は水深10~30cmであり、深いところでは1m程と推定される。これらの事実からこの遺構の性格は、船を繋ぎ泊める船杭で、その前面の水面下に敷かれた石は船着き場の石組護岸と考えられる。この船杭の下流側にも3本の杭が川に沿って直線的に並ぶ。北側の杭は船杭から50cm南に打たれており、大きさも深さもほぼ同じである。形状や深さおよび大きさより、この杭も船杭の可能性が高い。同時に存在していたものか、あるいは打ち替える以前のものであろうか。南側の2本は、径10cmの自然木を利用したもので、深さ1m以上まで打ち込まれている。これらの杭も石組護岸遺構と同時期に打たれたもので、石組に関連すると考えられるが、用途は不明である。

石組護岸に伴う出土品として土器の甕があり、標高-50cmから1mに分布する。特に、第41図5の甕は、完形品が転倒した状態で、石の間より発見された。また、その周辺や上場付近の流木付近からも上器が出土している(第41、42図)。これらの土器は古墳時代前期に属し、石組護岸はその頃に作られたと判断される。

表9 古墳時代の石組護岸遺構出土土器観察表

辨識番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
41-1	上面器 甕	粘土層	口径 18.0	複合口縁で、やや外反する。 突出部の縁は鋸い。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	口縫部外面スス付着
-2	甕	粘土層	口径 16.8	複合口縁で、やや外反する。 突出部の縁は鋸い。 背面外側に斜め突起が施される。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	口縫部スス付着
3	甕	粘土層	口径 18.2	複合口縁で、やや外反する。 突出部の縁は鋸い。 背面外側に斜め突起が施される。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	外表面スス付着
-4	甕	粘土層	口径 16.2	複合口縁で、やや外反する。 突出部の縁は鋸い。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	外表面スス付着
-5	甕	粘土層 砂基 底径	口径 17.6 23.9 1.8	底面は「く」の字形に彫り出る。 底面は傾かに平たく、体部は球状となる。	外面：1段から4段までヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	表面スス付着
-6	甕	粘土層	口径 13.3~14.6 (底みあり)	複合口縁で、やや外反する。 突出部の縁は鋸い。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1~2mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	表面スス付着
-7	器台	粘土層	口径 21.2	角部から脚台部の破片。 鼓形器台。突出部の縁は鋸い。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ、脚台 部ヨコナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-8	鼓形土器	砂礫層	口径 43.2	口径10cmをこえる大口器。 口縁部はヨコナデで、 体部には把手が縦方向 に付く。	外面：ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：不白 色調：灰褐色	
-9	鼓形土器	粘土層	口径 13.0	体部にかけて大きく開く 底。 底から4cmの高さに幅1 cmのツバをもつ。	外面：ヨコナデ、 内面：底部ヨコナデ、体 部：ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	内面にスス付着



第42図 石組護岸遺構周辺出土土器実測図(1:4)

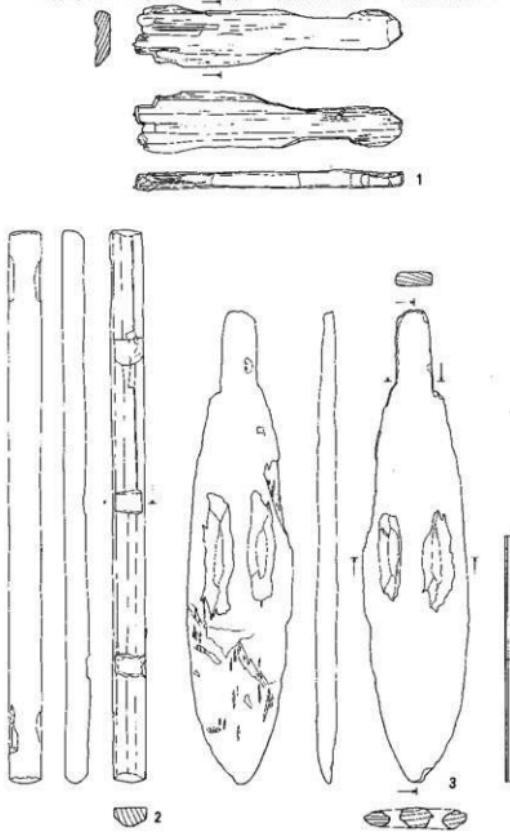
表10 古墳時代の石組周辺出土土器観察表

標印番号	器種	肩位	法径(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	施土・焼成・色調	備考
42-1	上師器 壺	粘土層	口径 20.2	複合口縁で、やや外反する。 肩部のクシによる二条と四条の平行沈線文が施されている。	外面：口縁部から肩部にかけてヨコナデ、体部ハケ目棒ナデ。 内面：口縁部ハケ目棒ナデ、体部ハケナズリ	施土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	表面スス付着
-2	壺	粘土層	口径 17.6	複合口縁で、やや外反する。 肩部の後は鏡文(1)、前は鏡文(2)と五条の平行沈線文が施されている。	外面：口縁部から肩部にかけてヨコナデ、体部ハケ目棒ナデ、内面ヨコナデ、体部ハケナズリ	施土：1mm以下の砂粒を混じる 焼成：良好 色調：黄褐色	外表面スス付着
-3	高坏 (杯部)	粘土層	口径 23.6	複合口縁で、口は長く、大きく外反する。	外面：口縁部ヨコナデ、側辺はヨコナデ、側辺は要なへミガキ。 内面：口縁部は段付近ヨコナデ、他のハミガキ	施土：密 焼成：良好 色調：黄褐色	

古墳時代の石組護岸遺構出土土器

石組護岸遺構から古墳時代前期の上師器が一括出土している。第41図-1～6は壺。5は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプに属し、他は複合口縁をもつ。複合口縁の突出部には鋭い稜があり、口縁部はやや外反する。肩部に斜行刺突文(2)や平行沈線文(3)をもつものもある。5は胴部から底部の

知れる唯一のもので、口径17.6cm、胴部の最大径20cm、底径1.8cm、器高23.9cmを測り、球形の胴部に僅かに平たい底部がつく。出土状況から他の複合口縁と同時期の上器である。なお、総ての壺の表面には煤が付き、煮炊きの後、投棄された土器と推定される。7は鼓形器台の下台である。形態より壺と同時期のものである。8、9は瓶。同一個体かどうかは不明。8は口径13.0cmの大形品で、体部に幅4.5cmの把手がつく。9は底径13cmで、ツバをもつ。



第43図 石組護岸遺構出土木製品実測図 (1:4)

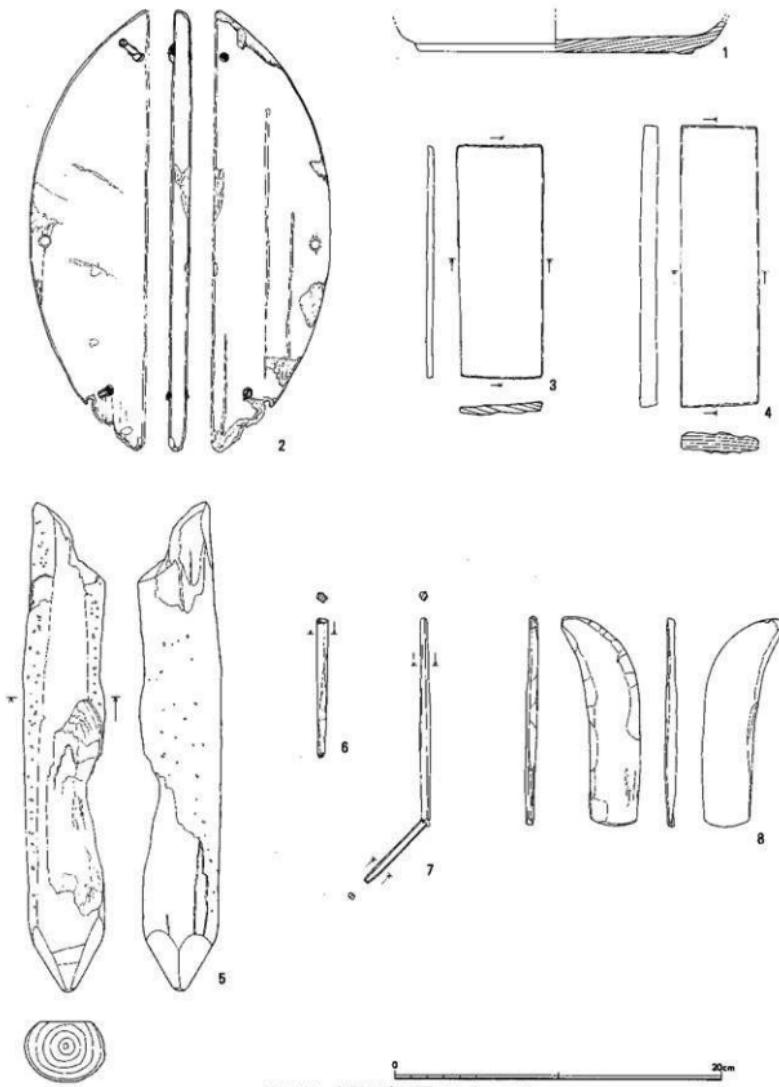
古墳時代の石組護岸遺構周辺部出土土器

石組護岸遺構周辺部からは古墳時代前期の上師器の壺(第42図-1, 2)と高坏(同3)が出土している。壺は複合口縁をもち、突出部には鋭い稜がある。肩部にはクシによる3～5条の平行沈線文が施されている。第41図の壺と同形態で、一連の土器と推定される。3は高坏の杯部。復

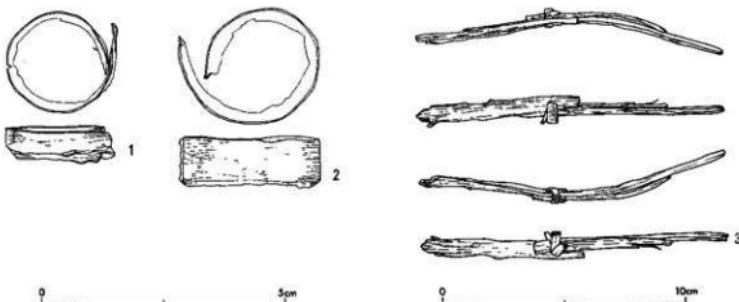
合口縁で、口縁部は大きく外反する。調整では、内外面ともヘラミガキが顕著である。

木製品

第43図-1は用途不明の有頭の板状木製品である。長さは現状で22.2cm、頭部の幅3.3cm、長さ4.2cm。2は長さ45cmの棒状の木製品である。一面は面取りし、両端近くに浅い刻みをいれている。他面



第44図 木製品実測図 (1) (1 : 3)



第45図 木製品実測図(2) (1:1, 1:2)

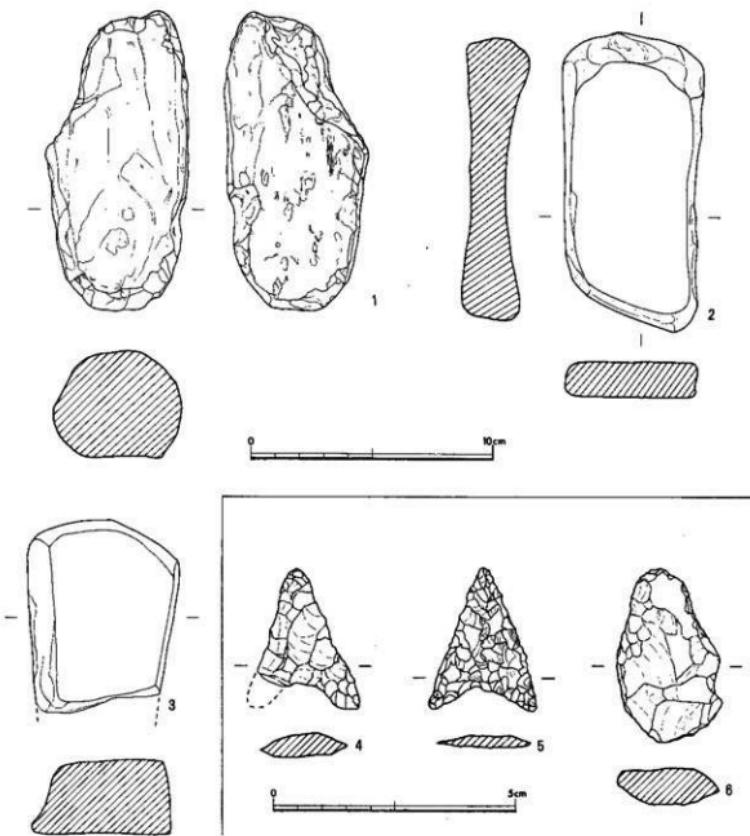
には3か所に抉りをいれている。3は組み合わせ鋤の身である。柄との接合は、身の上端に作りだした軸で柄の上端を、柄の下端は身の中央近くに左右2か所穿孔し、紐で結合する「紐結合法」を用いている。全長は38.9cm、幅は8.5cm、厚さは1.7cmである。着柄軸は長さ6.6cm、幅は2.7cm。

(6) その他の遺物

木製品

第44・45図は北区南半東側トレンチから出土した河道および造構に伴わない木製品である。1は挽物の皿である。高台はわずかに凹みをつけて表現する。底径は16.6cm、体部外面上に漆が認められる。2は曲物の底板の一部である。長さ27cm、厚さ1.2cm。側板を桜皮で留めるもので二か所に桜皮を残している。また、1か所に径0.7cmの円孔が穿たれている。その位置からみて、もう1か所あり、2孔で1対であったと思われる。3は柵目取りした長方形の札状の木製品である。長さ14.3cm、幅5.3cm、厚さ0.6cm。4は板状の木製品で、長さ17.3cm、幅4.8cm、厚さ1.4cm。いずれも両小口は垂直に裁ち落している。5は太さ5.0cmの芯持ち材の先端を尖らせた杭状の木製品である。樹皮を残したまま先端を一面から尖らせ、もう一面は杭全体を面取りし、先端をわずかに加工している。現状で長さ30.1cm。6・7は箸状の木製品である。6は両小口端とも欠いているが、現状で長さ8.6cm、上端で0.7cm、下端で0.4cmでやや先細りである。断面は上端は方形をなすが、下端は面取りして三角形に近くなる。7は、先端から5.1cmのところで折れている。長さは17.6cm、両端がやや細くなる形態で、両端は0.4cm、中央部で0.6cmを測る。これらは7の先端が折れていることから、舟串として用いられ、地面に突き立てた際に折れた可能性が考えられる。8は用途不明の木製品で、丁寧に削り刃部を表現している。小口は斜めに切り落している。全長は12.8cm、柄のところで幅3.3cmを測る。

第45図1・2は桜皮で、いずれも巻き込んだ状態になっている。幅は1が0.5cm、2は1.0cm。曲物の接合に用いるために採集されていたものと思われる。3は曲物側板の上縁の一端で、桜皮の綴じあわせが残っている。桜皮は側板上縁の外で綴じあわされている。



第46図 石器実測図 (1 : 1, 1 : 2)

石器

石器は5点図化している。1は叩き石, 2は砥石, 3は用途不明。4～6は黒曜石製の石鎚である。1は塩基性片岩製の叩き石。長さ12.0cm, 幅5.9cm, 厚さ4.4cm, 重量569.81gの円柱状の自然石を利用している。2は砂岩製の砥石。平面は隅が丸みを帯びた長方形を呈している。一面のみが非常に良く使用されており、四面をなす。長さ10.2cm, 幅5.5cm, 厚さは2.6～1.5cm, 重量は215.58g。3は先端が丸みをもった、いびつな長方形を呈した用途不明の石器。3面が平坦面をなす。長さ7.9cm, 幅6.3～5.0cm, 重量は142.61g。4・5とも凹基式石鎚。4は長さ2.9cm, 幅2.3cm, 厚さ0.5cm, 重量1.40g。基部の一端を欠く。5は長さ3.0cm, 幅2.3cm, 厚さ0.2cm, 重量は1.30g。6は凹基式石鎚の未成品で、第1次剥離面を残している。長さ3.6cm, 幅2.2cm, 厚さ0.8cm, 重量5.91g。

(7) 小 結 -平成4年度調査の成果-

平成4年度の朝鈴川右岸側の調査では、調査区の北端から南端に至る約130m、古墳時代前期（4世紀頃）から平安時代後期（11世紀頃）までのあしかけ800年にわたる河道の変遷を追うことができた。さらに昭和30年代まで使用されていたII堤防を含めれば、約1,700年にわたるこの付近での朝鈴川の移動の歴史が追えたことになる。

河道は、基本的にはどの時代も北東から南西方向に向かっており、おむね北から南に向かって平行移動している。そして、この河道は平安時代以降昭和30年代まで、この付近ではほとんど移動していない可能性が高いことがわかった。

本年度の調査では、この川の移動の跡を追いながら、川のほとりの生活の痕跡を多く検出することができた。また、海平面の影響をうけやすい朝鈴川の水位の変動の手懸りも得られた。

〔石組護岸遺構〕

調査区の北区北端から検出した古墳時代前期の遺構で、護岸の背後に太い杭が一列に打ち込まれている。そのうちの1本は特に太いもので、1m以上打ち込まれており、舟杭と考えられたが、どの程度の大きさの舟の着岸に備えたものか興味深い。また、石組の中の石に、中海に浮かぶ大根島に座する玄武岩が数個含まれている。これが遠路どのような経路ではこぼれてきたのか、比較的近隣の朝鈴川上流部から調達したのではなく、わざわざ遠路を運搬してきた理由がなんであつたかなど当時の水上交通を考えるのに面白い手懸りである。一例にすぎないが、今後の検討を待つ必要があろう。

また、石組の間から伏せたような形で出土した煤つきの甕や石組の隙間に挟まれたように出土した鼓形器台片など、土器の出土状況が何を意味するものか併せて今後の検討が必要であろう。これらの土器は古墳時代前期のものに限られ、使用時期も短期であったと考えられている。

〔杭列遺構〕

調査区の北区北半の、石組護岸遺構が出土した地点からやや南にはなれた位置から出土した。杭の配列に規則性らしいものはみられないため、舟着き場などの可能性を考えつつも、その機能がなんであつたのか現在のところ明確にはできない。遺物としては杭列の周囲から、杭列とほぼ同時期のものと考えられる高環、甕が多く出土しているが、杭列とどのように関わるものか今後要検討である。また、一連の上器群がこの杭列近辺で用いられて放置されたものか、破損したものが投棄されたのか、高環の脚（完形品が多い）に比して受部の出土数が極めて限られているのはなぜかなど、疑問は多く残された。

なお、こま形土製品もこの遺構付近より発見されている。前述したように、性格は明確にし得ないが、河川堆積層より出土している点が注目される。

〔地震に伴う液状化現象〕

およそ5世紀後半から6世紀はじめにかけて起こったと推測される地震によって、生じた液状化の痕跡は、いずれも、当時の地表面にまでは達していないが、M6クラスの地震が起つものと推測された^(註5)。

また、噴砂の供給源である砂礫層にまで打ち込まれている杭には屈曲したものがあり、地震の影響によるものと推測された。

この地震は、出雲地方においては、現在知りうる最古のものである。

〔奈良時代の河道〕

河道から縄文時代以降の土器片が多量に出土している。中でも多いのが奈良時代に属する須恵器の坏類であり、十師器では壊の割合が高い。

奈良時代の朝鶴川の水位を考える指標となるのは、しがらみ遺構である。この遺構は、-2m以下のレベルにある。この遺構が作られた時点に、水位がこの遺構のレベルより極端に高かったとは考えにくい。少なくとも浅瀬か水面よりは上に作られた可能性が高いと推測される。この遺構が作られた前後の川の水流は、この遺構が砂礫層の堆積によって埋まっていたことからして、かなり速かったものと考えられる。これらのことは、この付近の極端な地盤沈下を考えない限り、海水面の影響をうけやすい朝鶴川の特徴からして、この時期の海水面の低レベルを考える手がかりになるであろう。

〔平安時代の河道〕

北区南端にある平安時代の河道の岸には、隣接して上師器の破碎されたものと、並べて放置されたものと推測されるものが検出された。破碎されたものは、使用後廃棄されたものと考えられるが、並んで出土したものについても上器の出土状況が何を意味するものか、併せて今後の検討が必要である。これらの上師器は須恵器生産が衰退した平安時代中期以降のもので、山陰地方では出土例が少なく、この時期の編年を考える上で貴重である。

また、この河道に同時代の木製品としては島根県内では初見の墨で顔が描かれた人形がある。II区で発見された大型の人形も同様であるが、律令的祭祀にかかる木製品で、原の前遺跡より上流に存在したであろう祭場より流されたものと考えられる。

注

- (1) 広江耕史 「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 松江考古学談話会 1992年
- (2) 島根大学理学部地質学教室のご教示による。
- (3) 清水真一 「お祭り用具と考えられる遺物についての覚え書き」『長瀬高浜だより』27号 長瀬高浜遺跡 調査事務所 1981年
- (4) 島根大学汽水域研究センター長 徳岡隆夫氏のご教示による。
- (5) 自然科学分析 (1) 西田良平「原の前遺跡の液状化現象」を参照。

参考文献

- (1) 山本 清 「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971年
- (2) 奈良国立文化財研究所 『木器集成図録 近畿原始篇』 1993年
- (3) 同 『木器集成図録 近畿古代篇』 1985年
- (4) 金子裕之 編 『律令期祭祀遺物集成』 1988年



自然科学分析（1）



原の前遺跡の液状化現象

鳥取大学 西田良平

遺跡に砂地盤の液状化による噴砂跡が見つかり、噴砂現象の原理を説明し、山陰地方の地震活動について述べる。地震とは地下に歪エネルギーが蓄積され、それが限界になると、地下で断層が生成され、地震波が発生する現象である。強い地震が地表に達すると、地表面付近で砂地盤の液状化が生じる。ある地域の地震活動を調べるために資料は、地球の歴史に比べて我々が知っている地震の記録は非常に短い。日本での地震観測による解析は約100年間、古文書より調べる資料でも約1500年前からしかない。最近、それより古い地震については遺跡調査で発掘される地震の被害跡、地変跡が証拠になっている。その中でも、地震波による砂の流動化に伴う液状化跡の解析は多くの遺跡で発見され、各地の地震活動の歴史をより古い時代まで遡ることが出来るようになった。

液状化現象

主に堆積平野で砂と泥の互層で地下水を含んでいる時、地震動により繰り返し押されることがにより砂地盤中の地下水の水圧が上昇し、砂が液状化して支持力を失い、ビルなどの重いもの沈み、地中に埋設している中空の構造物は浮力により浮き上がり、地表面には表層地盤の割れ目や沿って下層の流動化した砂が上昇し、地下水や砂を吹き上げる砂噴火の状態や、帶状の貫入層（砂脈）を見ることが出来る。図1は液状化前後の状況を示す。

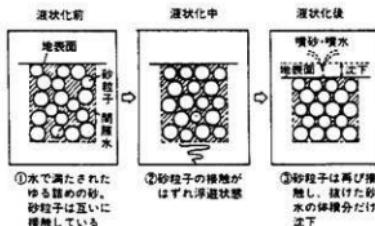


図1 砂地盤の液状化の過程（若松(1991)より）

原の前遺跡の状況と解釈

地震動による地盤の液状化の証拠は2つ確認されている。1つは下層の砂層が上層の粘土層を貫いており、写真1と図2から流動化した砂層は地表面から約2.5mの深さで、古墳時代前期の上部器が含まれていたことから4世紀以前の堆積層と推定される。砂脈が約50cmほど暗褐色の粘土層を貫いて、粘土層の途中で扁状に広がっている。実際の形状は10数cm幅の砂の帯であると推定される。この粘土層の堆積年代は詳細に決めることが出来ないが、粘土層の上にある砂れき層から6世紀ごろの須恵器が出土していることで、液状化現象が発生したのは4世紀から6世紀の間と推定される。2つ目は船着場に打たれていた杭が曲がっていることである（写真2）。杭を打つ時はまっすぐな杭が、粘土層に打たれるので、その後地震による砂の流動化によって上層の粘土層は動かず、下層の砂が流

動したため杭が折れ曲がったと推定される。

これらの現象からこの地域が5世紀頃に強い地震動を経験したことを示している。地震動の強さの推定は、砂脈が粘土層の途中まで止まっていることと、杭が折れ曲がるほどの流動化現象は相反しているが、粘土層が固いと考えれば、強い地震動があったと考える方が妥当である。

次章に述べるが、山陰地方で記録に残っている1番古い地震は880年の出雲地震（マグニチュード7.0）であり、液状化を発生させた地震は出雲地震ではない。5世紀に地震が発生した記録は残念ながら残っていない。1つの可能性は1874年の浜田地震の時に100km以上離れた出雲平野で砂噴火が発生しているように、近い地震である必要はない。遠くに発生した大地震でも砂の液状化現象は起こる。もう1つの可能性は比較的近くのマグニチュード6クラスの地震である。1991年8月28日のマグニチュード5.9の島根県東部の地震では、中海の埋立地の畑地で地下約1mの海成の砂が液状化し地表面に噴出し、砂脈と砂噴火が見られた。地盤が埋め立て直後で液状化の条件が整っていたと言え、M6よりも小さい地震で発生している。どちらとも証拠がないので結論することは出来ないが、松江市周辺に震度5程度の地震動を与える地震は、遠方の地震であれば、島根県の西部、鳥取県東部の地震であり、もし発生していれば、それらの地域にもっと他の証拠が残っていると思われる。しかし、その様な痕跡は発見されていない。さらに遠方の地震では四国沖に発生する巨大地震を考えられるが、なんらの証拠もない。最近の島根県東部の地震活動を解析していると、この地域では周期的にマグニチュード6クラスの地震が発生している。約1500年前も、山陰地方の地震活動が活発な時期で、液状化を伴うような地震（マグニチュード6クラス）が発生したことは充分可能性がある。



写真1 粘土層に貫入している砂脈



写真2 液状化現象により折れ曲がった杭

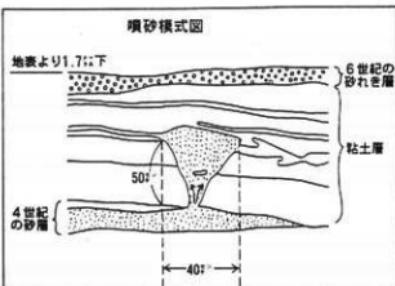


図2 写真1の概略図

山陰地方の地震活動

山陰地方は過去に被害地震を多く経験している。ここでは、島根県と鳥取県について主に論じる。歴史地震について詳細な資料は少ないが、ここでは宇佐美龍夫がまとめた「日本被害地震総覧」から、中国地方中東部から近畿地方北西部を含む範囲、北緯34度40分から36度までと、東経132度から135度20分までの地震を抽出し、地震活動の特徴を述べる。全体で38個の地震が記載されている（図3）。701年の丹波地震、868年の播磨地震、880年の出雲地震の3つの古い地震以外は江戸時代になってからで、この間約700年間は地震の記載がない。この長い期間、被害地震が全然発生していないとは考えられず、古文書が消失してしまったために地震活動が不明であると考えられる。山陰地方の江戸時代からの地震活動の時間変化を図4に示す。20世紀に入ってからは地震活動が活発化している。

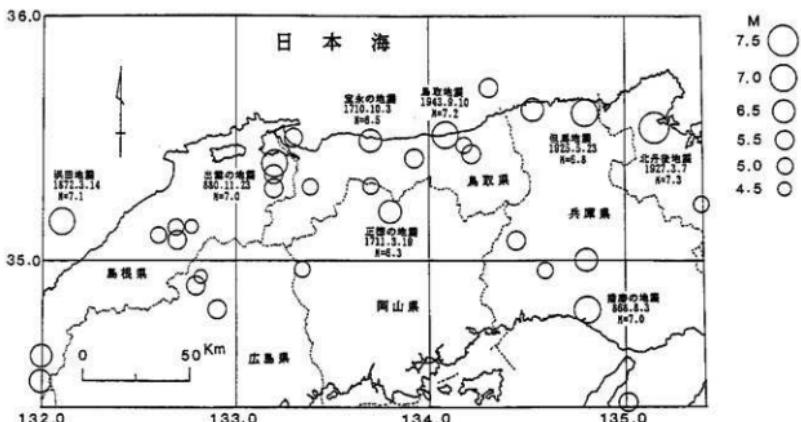


図3 中国地方の被害地震の分布（宇佐美龍夫著「日本被害地震総覧」から抜粋）

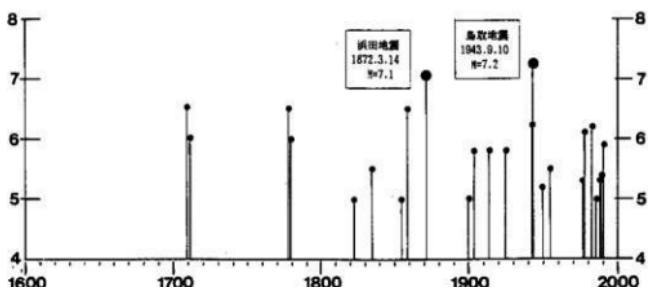


図4 山陰地方の地震活動の時系列（江戸時代以降の地震活動）

出雲地震（マグニチュード7.0） 880年11月23日（元慶4年10月14日）

山雲國（東経133.2度、北緯35.4度、深さ未決定）

三代實錄には「二七口丁未、出雲國言、今十四日、地大震動、

境内神社佛寺官舍、及百姓居廬、或顛倒或傾倒、損傷者衆、

其後迄千二十二日、晝一二度、夜三四度、微震動、猶未休止、」

と出雲地方で寺社や官舎など大被害を出し、余震があったことが記載されている。そして、京都の古文書、類聚國史には、「元慶四年十月一四日甲午、地大震」と、京都で同じ日に大きな震動があったことが記載されている。出雲地震が京都で有感であったため、地震のマグニチュードは7とされた。しかし、幾人かの研究者から、京都で感じられた地震は別のもので、それほど大きな地震ではないとの意見が言われている。これは出雲から京都への途中の国々（伯耆、因幡、丹波等）で、地震の記録がないことで、当時の文化圏から言えば、もし地動が感じられていれば地震の記載があると推定されるのにないためである。この論議は荻原尊札著「古地震」に詳しく解説されているが、結論を得るまで至っていない。そして、震央の位置についても諸説があり、「古地震」の木次町の南、また出雲大社の被害を強調すれば穴道湖の西が震央となり、出雲國府の位置から言えば飯石郡東山雲町付近と推定される。この資料では後者を採用している。この地震での震度は松江市で震度4以上であると推定される。

浜田地震（マグニチュード7.1） 1872年3月14日（明治5年2月6日）

島根県西部（石見・出雲）（東経132.1度、北緯35.15度、深さ未決定）

西日本では日本海の海底に発生したマグニチュード7以上の唯一の地震である。被害は全壊5000戸、死者600人以上で、島根県西部を中心に出雲地方、広島県に及んでいる。約1週間前から前震活動があり、本震に伴って地殻変動が起き、著しい海岸の昇降が見られた。そして、地震の後には名勝地「豈が浦」が出現していた。被害は無かったが小津波が発生した。この地震では出雲平野の各地に砂の噴砂現象が見られた。

鳥取地震（マグニチュード7.2） 1943年9月10日17時37分（昭和18年）

鳥取県東部（東経134.08度、北緯35.53度、深さ0km）

鳥取県東中部に大被害を与えた。死者は1083人で、全壊家屋は7485戸に達した。鳥取県が1年後にまとめた「震災小史」では亡くなった人は1200人以上で、鳥取市が壊滅的な被害を受けている。鳥取平野や海岸の砂丘地では各地に液状化に伴う砂噴火が見られた。この時、走行がほぼ東西方向の二つの地震断層が出現した。吉岡断層は長さ4.5km、北側が最大50cm沈下し、東方へ最大90cm移動した。鹿野断層は長さ約8kmで、西南西翼では北が南に対して最大75cm沈下し東方へ150cmずれ、東北東翼では最大50cm降起し西方へわずかにかずれた、蝶番断層である。余震は鳥取県中部に多く発生した。約半年前の3月4・5日に鳥取県沖地震（マグニチュード6.1）が発生し、双子型と云われている。これは山陰地方の地震活動の一特徴と考えられる。地震の前兆現象において、京都大学が兵庫県の牛野駿山内で観測していた地面の傾斜を測定する傾斜計が地震前数時間前から異常変化を示した。鳥取県東部では地震の前に多く発光現象が見られた。

中国地方の地震活動の特徴

明治年代に始まった気象庁による地震観測は日本の地震研究の基礎となり、全国の地震活動の特徴を最近100年間について研究することが出来る。そして、1923年の関東大震災以後は観測体制が確立し、1960年からは日本及び日本近海に発生するマグニチュード3以上の地震は正確に記録されるようになった。最近では、このデータがコンピューターに収録されて簡単に使用出来るシステムになっていて（SEIS-PC、石川有一他）。中国地方・近畿地方北西部の観測された地震を図5に示す。地震分布から見られるように地震が集中している地域「活動域」とそうでない地域「空白域」に分けられる。

西南日本内帯の地形的な特徴は日本海側、脊梁山脈、瀬戸内海側と分けることが出来る。地震活動もこの地形に対応する特徴を示す。一番活発な地域は日本海沿岸である。しかし、丹後半島から島根半島に至る日本海沿岸と島根半島より西方の日本海沿岸では地震発生の仕方が違う。前者は1927年の北丹後地震、1943年の鳥取地震などが発生した地震多発地域であるのに、後者はそれほどでもない。1872年の浜田地震が日本海海底に発生しているのみで、その相違は著しい。日本海海底に発生している地震は丹後半島の沖に北丹後地震の連続としてある。そして、兵庫県から鳥取県の沖にも少ないと発生している。これらの地震は今のところ小地震の大きさである。日本海海底に発生する地震について詳細はまだ研究されていない。

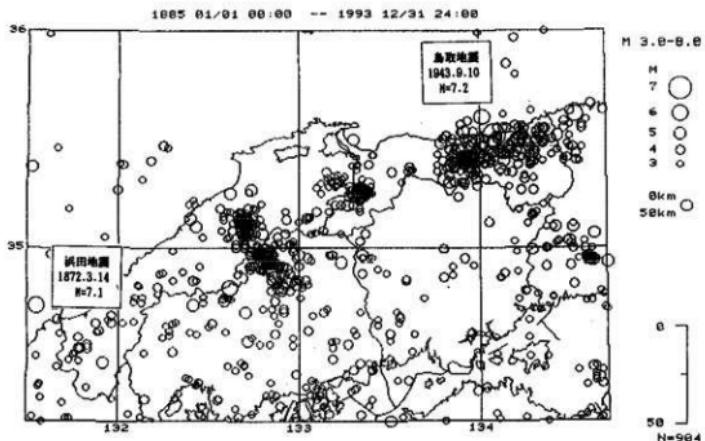


図5 最近100年間の地震活動（気象庁による地震資料）

脊梁山脈が連なる中国山脈では一般に地震が少ない。中国地方で一番高い大山火山付近は地震活動の少ない空白地域である。しかし、同じ第四紀の火山である三瓶山そして島根-広島県境付近に地震が発生している。三瓶山周辺が活発な理由には定説はないが、地下の状態を示す温泉分布を探ると、大山の山体内には温泉はない。すこし外れて米子市の皆生温泉そして東側の関帝温泉があるのに、三

瓶山には山頂付近に三瓶温泉（志学温泉）があり、周辺には池田温泉、千原温泉、出雲湯村温泉、湯抱温泉等がある。これは地下的熱的状態の差を示している。

瀬戸内海側では地震の巣と言える活動域は少なく、地震がバラついているのが特徴にも見える。この地域での活動域は活断層との関連で見ることが出来る。中国縦貫高速道路を大阪から西へ兵庫県福崎町のあたりから岡山県作用町まで高速道路は、西南日本内帯でも第一級の活断層である山崎断層の上を走る。この山崎断層に沿って地震の発生が見られる。

次に、最近20数年間の地震観測は精度が良くなり、観測される地震も多くなっている。1970年代は島根県東部の三瓶山周辺で活発化し、1977年にM=5.3、1978年にはM=6.1のこの地域で最大級の地震を記録している。1980年代はこの全地域で地震活動が活発化した時期である。鳥取県中部の地震、大山付近の地震、鳥取県西部の地震、と2~3年おきに活動が活発化し、地震活動が西へと移動している。1990年代は鳥取県西部の活動と島根県東部の地震が発生し、その後は地震活動の鎮静化が見られる。

特に、山陰地方では1980年以降に東から西への地震活動の移動が見られる。1983年の鳥取県中部の地震（マグニチュード6.2）は、鳥取地震以来最大の地震で、震源断層の走行は北西から南東で鳥取地震の断層と直交する左横ずれ断層である。その余震分布は珍しい%型をしている。地震の空白域である大山近傍で1985年6月から9月まで、関金町野添で鳴動が聞かれた地震活動があった。この活動は大山の火山活動との関連はないと考えられるが、今後大山山体内に地震が発生すれば注意が必要である。1989年10月27日から群発地震が鳥取県西部地域に発生して、3年以上に及ぶ鳥取-島根県境の地震活動が始まった。鳥取県西部の北西-南東走行の断層系の活動としてM5クラスの地震が5回発生している。1989年は主に断層の南東部分でM=5.3、M=5.4、1990年は主に北東部分でM=5.1、M=5.2、M=5.1が発生した。そして1991年8月27日にM=4.4が断層系の北西端に発生した。1991年8月28日には島根県東部の地震（M=5.9）が発生した。この地震は鳥取-島根県境の活動域内で隣接しているが、別の断層系の活動と考えられる。

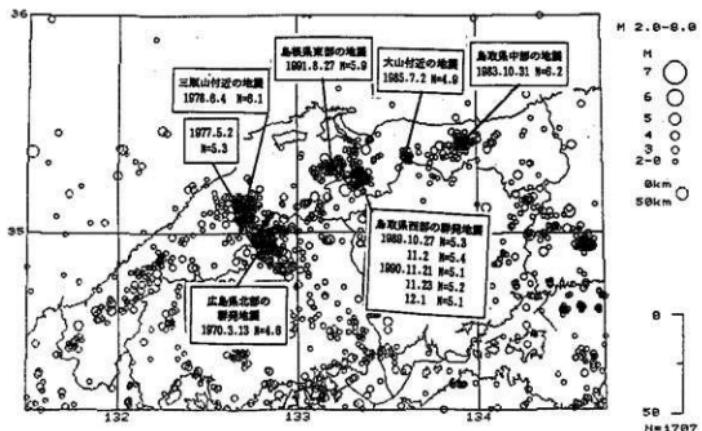


図6 最近の地震活動（1970-1993年の気象庁地震資料）



第2章 原の前遺跡II区の調査

(1) 調査の経過

II区は、中央部の北寄りに存在する排水路により2つに分断されていることから、便宜的に南側をII-A区、北側をII-B区とし、II-A区より調査に着手した。

調査前の表面観察で調査区の東端から南端にかけて打ち込まれた杭列の存在を確認していた。これは、河川改修以前の朝釣川（以下、IH朝釣川とする）の護岸のために打ち込まれたものと判った。この杭列をはずして重機による表土掘削を行った。この際、平成3年に行った試掘調査区1丁の埋土は全て重機で除去し、涌水などを溜める坑とした。

表土を約40cm掘り下げた段階で調査区のほぼ中央部で桶を、また、そこから北東に延びる暗渠を検出したため、このレベルより下層は人力で掘り下げるうこととした。

調査区内はI区と同一の国土座標を使用した10mグリッドを設定した。

下層の掘削に当たっては上層の堆積状況を確認する目的で調査区の西壁に沿って幅3mのサブトレ

ンチを設定し、泥層を

掘り下げ、砂礫層を検

出した段階で調査区全

面を掘り下げた。その

結果、砂礫層は南東に

向けて傾斜しており、

砂礫層からは奈良時代

の須恵器を中心に、繩

文土器・弥生土器・上

師器・平安時代の土師

器が出土した。砂礫層

の下層は泥層であり、

遺物を含まない地層と

考えられたが、サブト

レンチ1を設定し確認

をした。その結果、標

高-2.55mで火山灰層

を検出し、分析の結果、

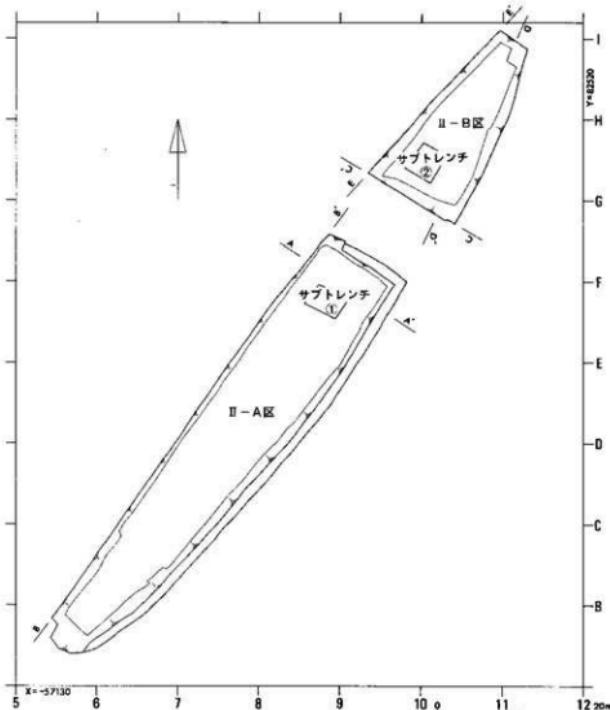
約6300年前に降灰した

鬼界アカホヤ火山灰で

あることが判った。

しかし、このII-A

区の調査では河道を横



第47図 II区 調査区配置図 (1:600)

断する土壟断面図をA-A'ラインでしか記録を作成しておらず、この点については調査方法に問題があったと思われる。

II-B区の調査では、A区で検出した河道の続きを検出するために砂礫層上面まで、全面的に掘り下げた。しかし、泥層と粗砂層とが互層状に堆積しており、A区で検出した河道の続きを確認することが出来なかった。最も旧い時期の砂礫層の上面まで掘り下げ測量図等の記録を作成した。D-D'ラインで土壟断面図を作成したあと、更に調査区を東に拡張した。

砂礫層の発掘終了後、A区と同様にサブレンチ2を設定し、更に下層を掘り下げ、鬼界アカホヤ火山灰を確認した。

平成5年度に河川堆積物の粒度分析およびイオウ分析、火山噴出物の分析を実施し、更に木製品の樹種鑑定を行った。出土木製品の保存処理については16点のみ行うこととし、平成5年度に記録を作成し、平成6年度に脚元興寺文化財研究所に委託して行った。

(2) 遺構の概要

埋上下の河川改修以前の水田面からは、旧朝釣川の護岸杭列と埋設桶3基、暗渠を検出した。これらは、かつての朝釣川の流路の判る遺構であり、化学肥料の使用により姿を消した当時の有機農法を知ることができる遺構と考え記録を作成した。

埋土・耕作土から下層は、河川堆積層で、粗砂層、泥層、砂礫層に大きく分けられる。粗砂層は江戸時代以降に朝釣川の流路が固定された後に堆積したものと思われる。

II-A区では、奈良～平安時代の河道を、II-B区では奈良～平安時代の河道と古墳時代後期の河道を検出した。いずれの河道も北東から南西へと流れしており、奈良～平安時代の河道は大きく南西に向けて蛇行している。奈良～平安時代の河道に伴う遺物としては、砂礫層からは奈良時代の須恵器を中心繩文～平安時代の土器が出土している。須恵器は完形に近い状態で出土しており、器種は环身の占める割合が高い。泥層からは自然流木・木製品が多く出土している。木製品は舟物等の日常用品が多く、人形・板塔婆などの祭祀関係遺物も僅ながら見られる。泥層からも、少量ながら須恵器・平安時代の土師器が出土しているが、いずれも押しつぶされたような状態で出土しており、非常に近い地点から意図的に投棄されたものと考えられる。この他、橋脚も出土しており注目される。これに対して古墳時代後期の河道からは木製品の他、土師器を中心とする土器が出土しているが、奈良～平安時代の河道に較べて量は少ない。木製品も農具・T工具類が多い。また、II-B区の平安時代の河道からは、ほぼ完形に近い状態で円筒埴輪が出土している。

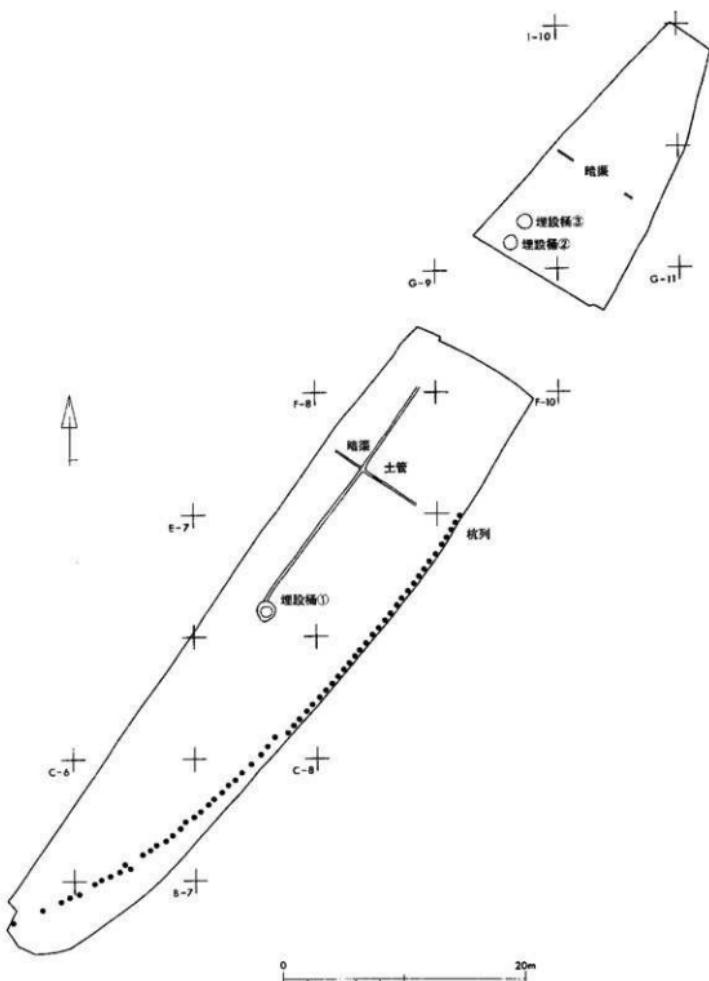
II-B区では3か所で、古墳時代後期～平安時代の河道に伴うしがらみ状の遺構を、また、矢板状の杭を検出している。

砂礫層より下層についてはサブレンチを設定して地層の堆積および遺物の有無について観察を行なった。標高-2.55mで泥層の間に挟まれている鬼界アカホヤ火山灰(B.P.6300年)を検出した。この結果、砂礫層より下層が当時の宍道湖の湖底に堆積した中海層泥層(完新統)であることがわかった。

(3) 河川改修以前の川と水田

既に記述しているように原の前遺跡Ⅰ・Ⅱは河川改修が行なわれる以前は一連の遺跡であった。巻頭のカラー図版3で判るように、かつては水田が営まれ、その東側を朝鈴川が流れていたのである。この発掘調査でも、河川改修以前の遺構を検出した。

遺構としては、旧朝鈴川の護岸に伴う杭列と、水田の暗渠と埋設構がある。杭列は調査区南端から



第48図 河川改修前の水田面遺構図 (1 : 400)

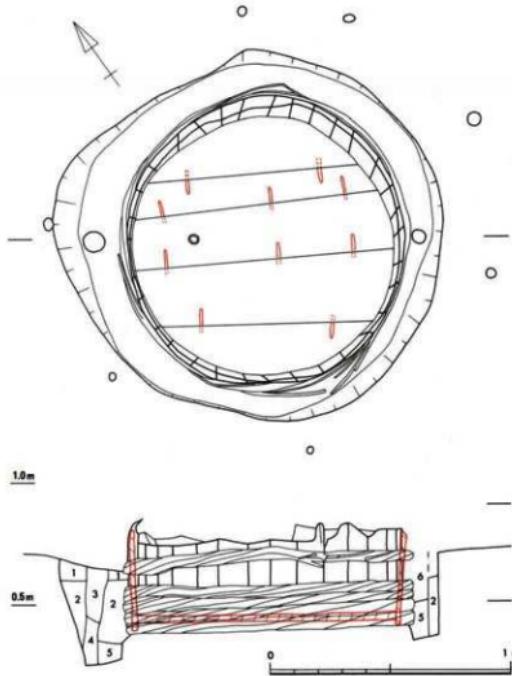
東端に向けて弧を描くように打ち込まれており、調査区内で61本確認できた。杭の大きさは直径8～11cmであった。杭の周囲には上流から流されて来たと思われる自然木が堆積していた。

暗渠は北東から南西へ杭列とほぼ平行に築かれているものと、それに直交するものの2本がある。前者が枝木を敷き詰めた粗雑な作りで、幅は約20cm程度。後者は幅約10cmの竹を用いた造りであった。二つの暗渠が交差する部分から旧朝鈴川へ50cmのところには陶製の土管が置かれて、さらに暗渠は旧朝鈴川へと延びていた。これは土管を開閉することで水田の水を溜めたり、排水する仕組みであったと思われる。この土管から護岸杭列までは約8mあるが、これは旧朝鈴川の堤防に相当するものと考えられる。

護岸杭列に伴い出土した遺物としては下駄1点がある(第51図-3)。下駄は長さ23cm、幅10.4cm。左足のもので、指の痕が明瞭に残っている。前歯から前顎までが7.5cmで、後歯から後顎までは2.7cmと前者の方が長い。後歯は摩耗している。板目取り。また、水田耕作土からは布志名焼きの湯飲み茶碗1点がある。口径7.0cm、器高4.3cm、底径3.4cm。口縁の一部を欠く。体部外面には◎Yの印がある。

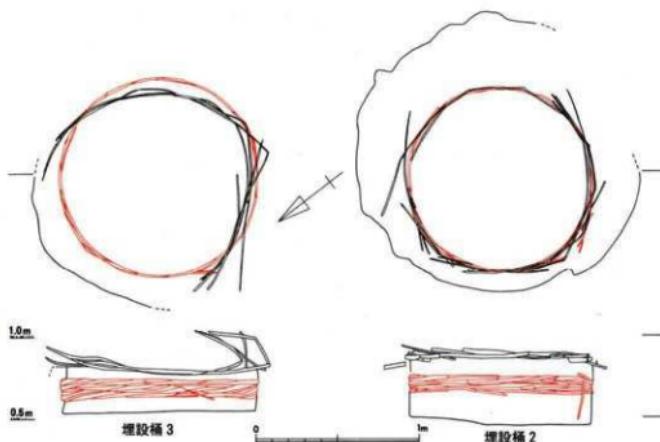
水田に伴う埋設桶はII-A区で1基、II-B区で2基が検出された。他に掘り形のみをII-B区の東壁で確認している。埋設桶は発見順に南から埋設桶1～3とした。

埋設桶1^(註1)は、遺跡中最も良好な遺存状態であった。桶は直径1.5m、深さは現状で45cmのややいびつな円形の掘り形の中に置かれていた。掘り形の周囲には7つの小さな柱穴がある。北側では柱



第49図 埋設桶1実測図 (1:20)

穴の間隔が空いており、ここから桶内の堆肥を水田へ汲みだしていたものと思われる。他に掘り形の埋土にも柱穴は掘り込まれている。これは西側の柱穴が直径9cm、東側の柱穴が直径5cmほどで、掘り形周辺に見られる柱穴が3～5cmであるのに較べてやや大形である。これは埋設桶の上屋の棟柱に伴うものと思われる。桶の構造は底板と側板を2段のたがで束ねたもので、底板は5枚の板を竹釘で結合したものである。底板の厚さ3.5～3.7cmで、上面は丁寧に面取りが施されている。竹釘は計10本で幅1.2cm、厚さ0.2cm、長さ7.0～7.7cmで先端の1cmを山形に削りだしていた。なかには竹釘の間に木片を詰



第50図 埋設桶 2・3 実測図 (1 : 30)

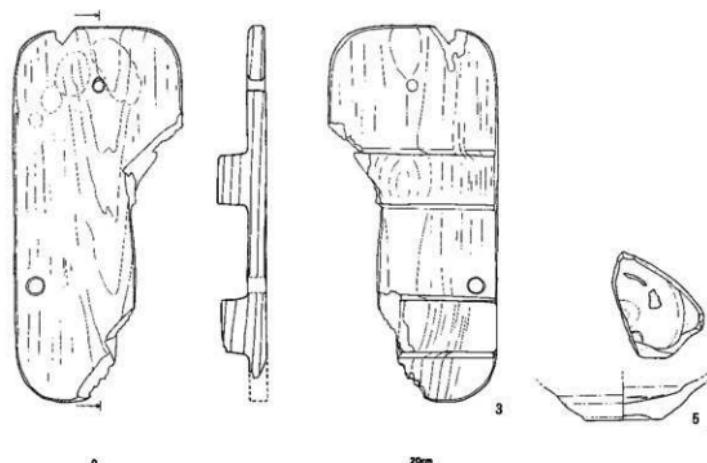
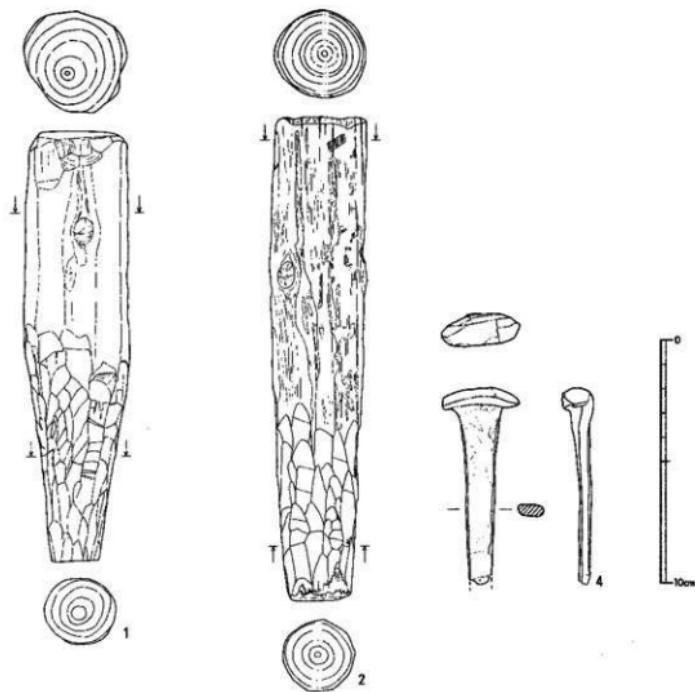
めて補強しているものも見られた。底板の1枚には径4.2~4.3cmの円形の穴が穿たれていた。桶内の排水を目的としたものである。桶内からは栓状の木製品が出土した。これは、この円形の穴と一致している。桶に堆積した泥層からは、板材のほか農薬の瓶や鉛筆やビニル袋などが出土しており、この桶が機能していた時期が河川改修前までであったことが判る。

埋設桶2・3はII-B区の北西隅に南北に約1m離れて並んで置かれていた。掘り形は明確に検出できなかったが、埋設桶2は径1.6~1.7mほどの円形プランで、桶自体は掘り形のやや東寄りに置かれていたものと思われる。桶は側板・底板とも失われており、「たが」のみが残されていた。たがも上から1段目はすでに外れており、2段目のみが残されていた。これは桶内の土層が擾乱されていることも合わせると、底板・側板のみを抜きだして再利用した可能性もある。

埋設桶2・3の堆積土中からは、桶側板の一部のほか、桶の栓と思われる木製品が出土した。また、桶2の堆積土中からは釘1本が、桶直下からは17世紀前半の肥前系陶器碗1点が出土している。栓はいずれも芯持材を用い横槌状に加工されたもので、「握り」に相当する部分を桶の穴に差し込み栓をして用いていた。1・2とも差し込み部分の加工は粗く、切れ味の悪い刃物で削り落したのではないかと思われる。1は長さ26.5cm、差し込み部の太さは2.8cm。2は1より大形で、全長29.7cm、差し込み部の太さは3.6cm。

II-B区の東壁D-D'ラインでは埋設桶の掘り形のみ検出している(第110図)。規模は南北の幅1.3m、深さ45cmを測る。また、掘り形の床面観察から桶自体の大きさは直径85cm程度ではなかったかと思われる。土層断面図には桶の掘り込まれた面から打ち込まれたと思われる杭の跡もあり、これも水田に伴うものと思われる。この桶は他の3基よりも東に造られており、あるいは時期が異なるかもしれない。

かつては、舟に載って松江の城下の家々まで汲み取りにいき、持ち帰った肥料を桶に移していたという。また、収穫された田の稲は舟で向こう岸に運ばれ脱穀などの作業が行なわれていたという。護岸杭列・桶・暗渠はいずれも河川改修前の朝駒川の水辺風景を映しだしていると言える^(注3)。



第51図 旧水田面出土遺物実測図 (1 : 3, 4 は 1 : 2)

(4) II-A区の旧河道の遷り変わり

a. 層序

土層堆積状況は、すでに序章において解説されているので、ここでは遺物の出土状況とそれからわかる堆積の時期を中心に記述していく。

埋土・耕作土の下には灰褐色泥層が堆積している。

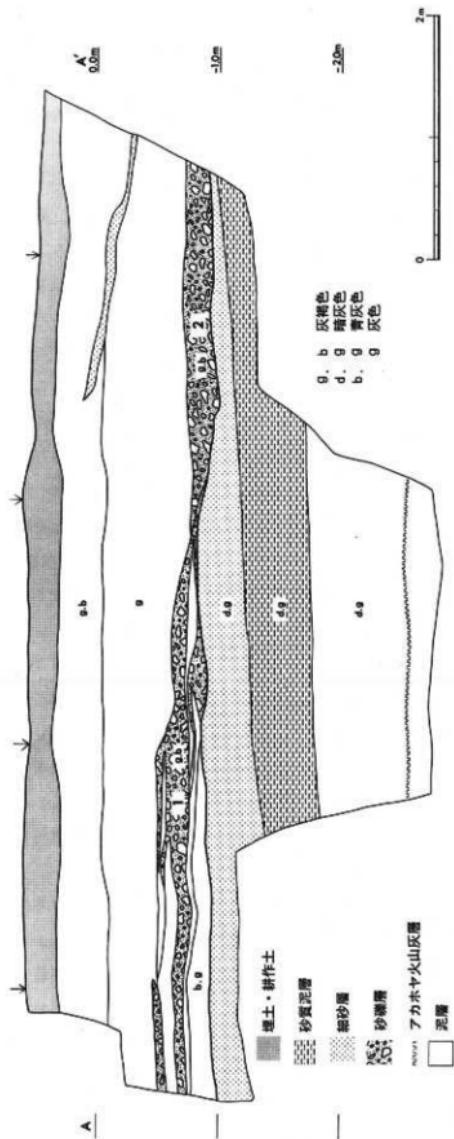
この下層には河川堆積層である灰色泥層と青灰色砂礫層が堆積している。泥層中から出土した遺物は木製品が中心で、土器は須恵器・平安時代の上師器が僅かに出土している。第58・61図の土器以外はいずれも砂礫層直上の泥層からであった。土器はいずれも10~11世紀の須恵器・上師器で、押しつぶされたような状態で出土しているものが多い。泥層中の遺物であることを考えあわせると、これらは上流から流されてきたのではなく、ごく近い場所から意図的に投棄された可能性が考えられる。

泥層の下層には砂礫層（砂礫層1・2）が堆積している。砂礫層は北東から南西にかけて拡がり、中州状の高まりとなっている。調査区北壁（第53図）でみると砂礫層1は大きく2時期に分かれている。さらに、西壁でみると砂礫層は間に泥層を挟みつつ下流側へ堆積しており、砂礫層は一時期にもたらされたものではないことが判る（第53~55図）。遺物は砂礫層・泥層のいずれからも出土している。しかし、砂礫層の運ばれた時期の違いについては分層が出来なかったため明確にし得なかった。

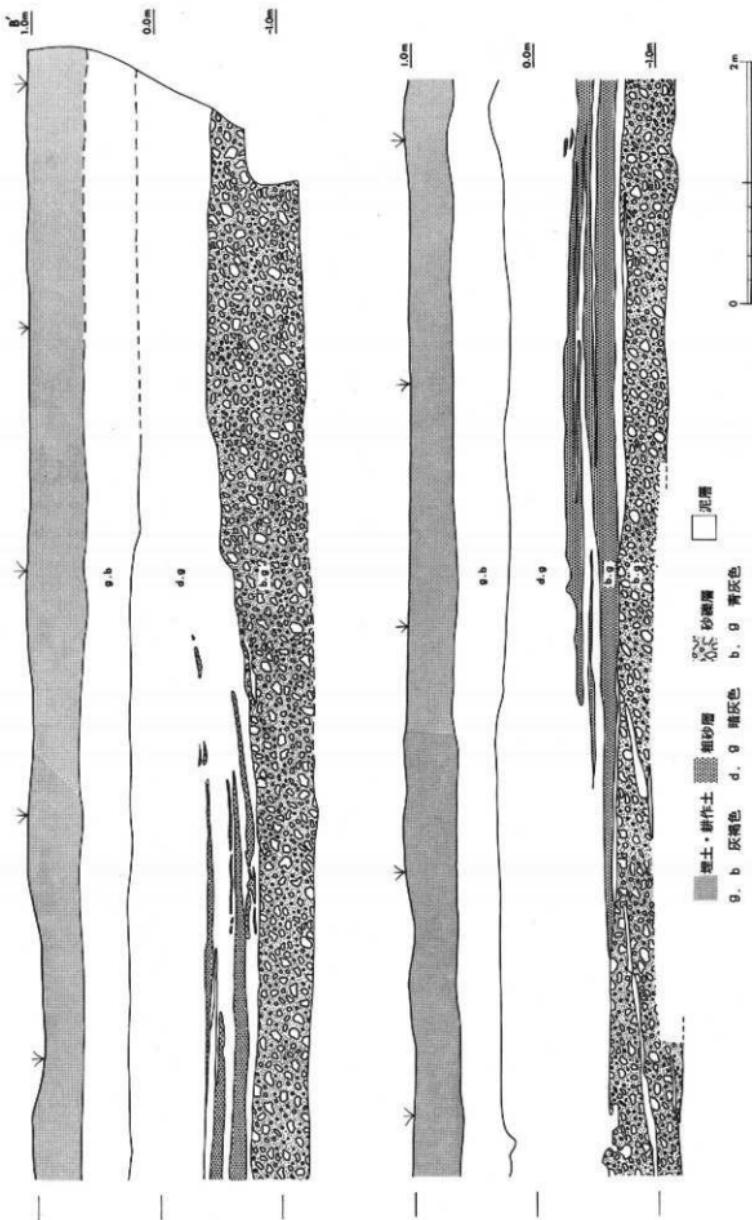
河道は北東から南西に向けて流れているものと思われ、この際に砂礫層を削りこみ第77図の須恵器・盤が傾いたものと思われる。この時に砂礫層中の遺物の一部は更に下流へ流されたものと考えられる。砂礫層の遺物は奈良時代から平安時代前半の土器を含んでおり、河道はそれ以降の時期とわかる。河道の底には、水流によって河床が侵食されて形成された規則的な配列を示す「流痕」が、後から堆積してきた砂礫層にパックされ残されていた。河道はその後も増水することがあったものと思われ、調査区南端に中州（砂礫層2）を形成している。この砂礫層2は砂礫層1をカットして下流へ運ばれている。西壁の土層堆積図（第55図）でみると、砂礫層1は間に泥層を数枚挟んでおり、砂礫層が徐々に下流側へと押し出されていき、砂礫層2を形成したことがわかる。このことから、砂礫層1・2は同一の環境条件のもとに大きな時期差もなく堆積したものと思われる。砂礫層2は厚さ30~40cmほど堆積しており、1に較べると薄く、遺物も多くない。

河道の時期を示す遺物には第103図の平安時代後半の土器群がある。これらは、10を除き砂礫層2及びその間に挟まれた泥層から出土している。10は河道内堆積の泥層から出土している。また、泥層中より、人為的に廃棄されたシジミ化石がまとまって出土しており、この河道の時期には、この一帯は陸地化していたことがわかる。河道の時期は大まかに平安時代後半としておく。

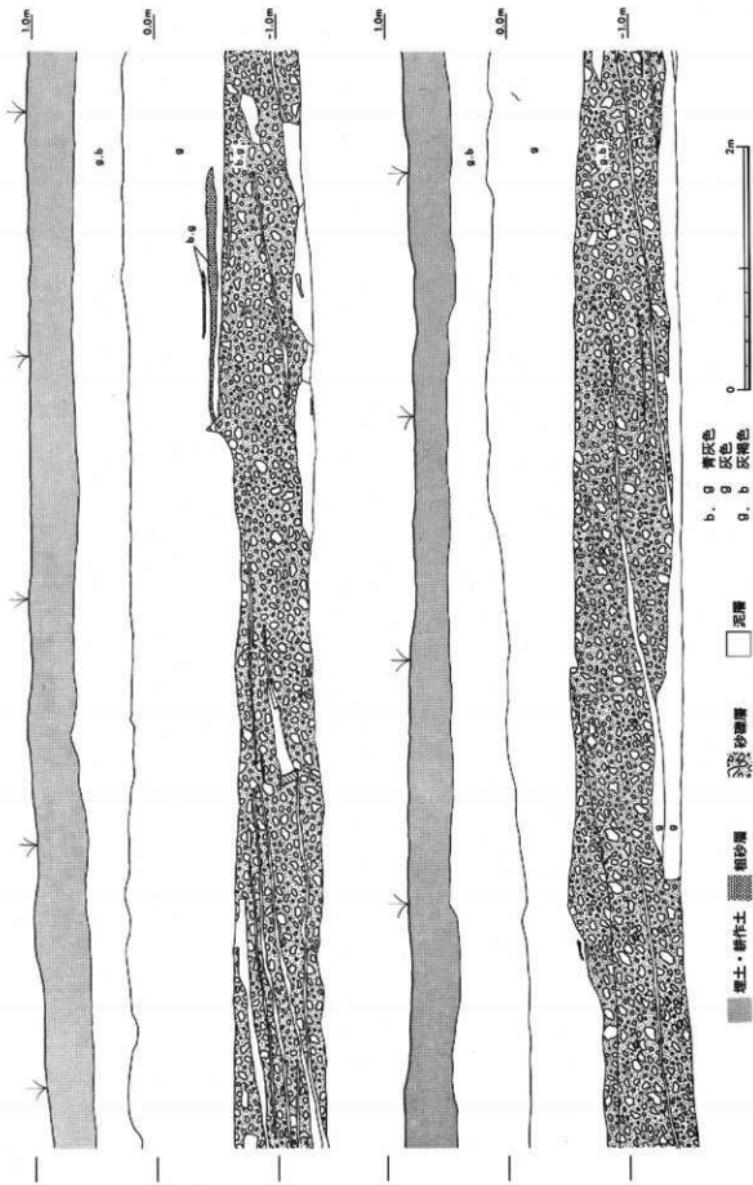
また、調査区の東側では砂礫層2の上層で粗砂層を検出した。この層からは漆器碗1点のみしか出土していない。約80cm近く堆積しているにもかかわらず、土器を含めていない。粗砂層以外の砂礫層を構成する砂礫は安山岩を主体に流紋岩、泥岩、玄武岩であるのに対し、この層は玄武岩が大部分である。このことから、人為的な何らかの開発に伴う堆積と考えられる。調査区内では、その後の河道は検出していない。しかし、旧朝駅川の護岸杭列もこの粗砂層に打ち込まれることなどから、近世以降に新田開発と朝駅川の舟運のために埋立てられ、流れを固定された後に堆積した地層と思われる。



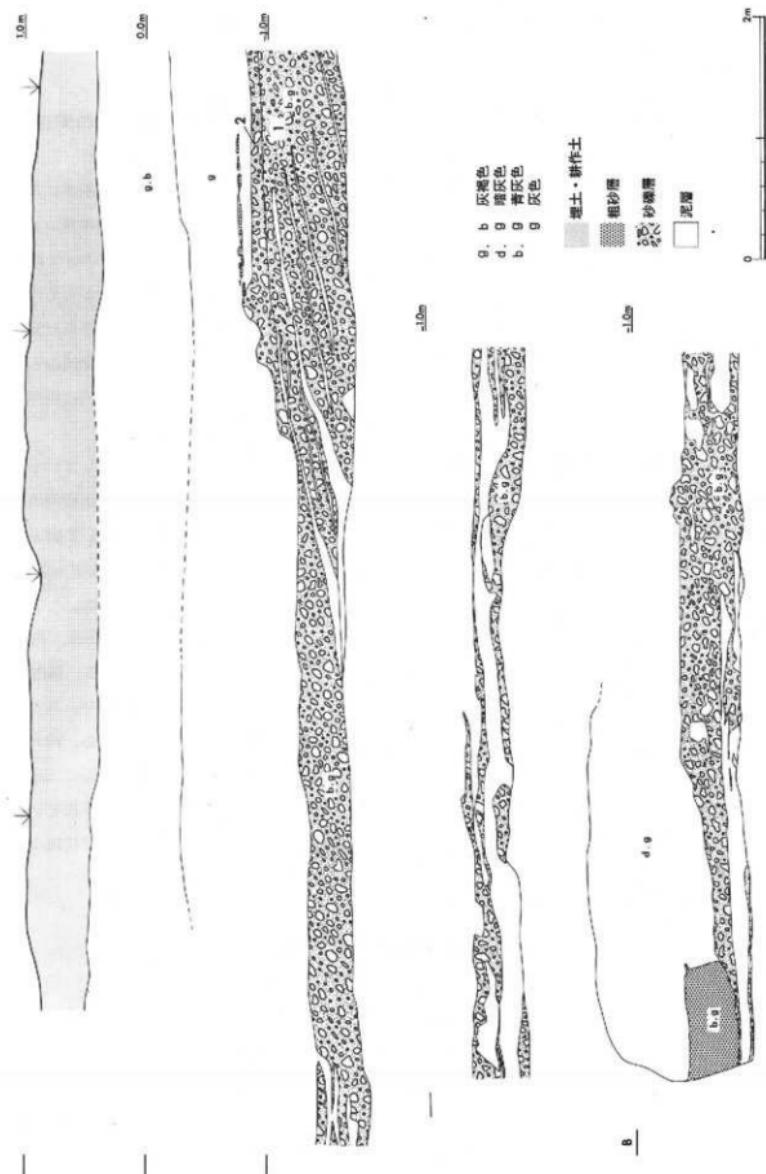
第52図 II-A区北壁土層堆積図 A-A' ライン (1:40)



第53図 II-A区西壁土層堆積図 B-B' ライン① (1:40)

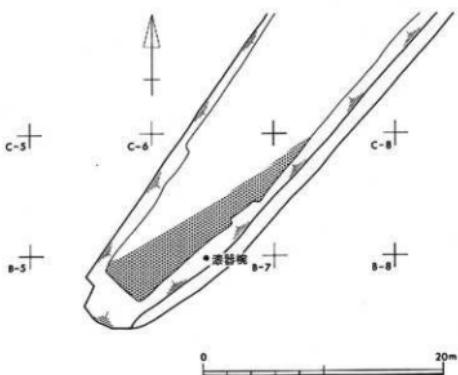


第54図 II-A区西壁土層堆積図 B-B' ライン② (1:40)



第55図 II-A区西壁土層堆積図 B-B' ライン③ (1 : 40)

この一帯がいつから水田として耕作されたかは出土遺物が少なくはっきりしない。しかし、II-B区で埋設柱直下から17世紀前半の唐津系陶器が出土しており、同時期の唐津系陶器がI区からも出土していることから、およそこの時期に開発されたものと考えられる。



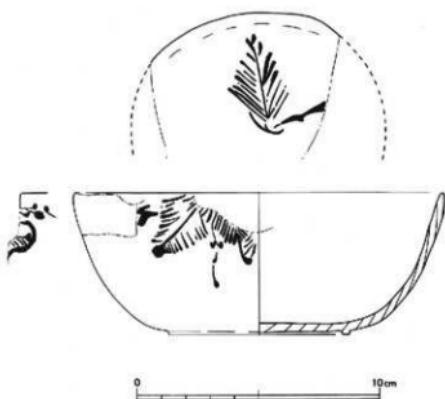
第56図 粗砂層堆積範囲 (1 : 400)

b. 粗砂層～江戸時代の河道～

調査区の南端で北東から南西に向て堆積していた。これは砂礫層の上に泥層を挟んで標高-1.8~1.0mで堆積していた。層中には人頭大からそれ以上の大きさの立方体に加工された玄武岩が含まれていた。これは上流から流れられたものではなく、人為的に廃棄されたものと思われる。

遺物は漆器椀1点が出土しているのみである。漆器椀は調査区東壁中の標高-1.06mで、底部を上にして出土している。取上げ時に壊れてしまったが、ほぼ完形に近いものであった。

椀は口径15.2cm、器高5.8cm、高台の高さ0.2cm、径5.7cmを測る。体部・底部とも非常に薄手な造りで、高台も低く、ほぼ垂直に立ち上がる。内・外表面とも黒色漆で、体部の外面には赤色漆で松が、内面には松が描かれているが、外面は剥離しているので模様の全体は判らない。

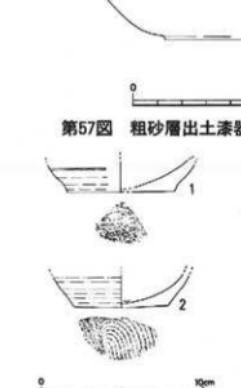


第57図 粗砂層出土漆器碗実測図 (1 : 2)

c. 泥層～平安時代の河道～

泥層の上位より土師器皿2点が出土している。いずれも高台をもたない小型の皿である。58-1は底径6.6cm、残存高は2.1cmで、口縁部を欠く。色調は淡茶色、焼成は不良で、体部は回転ナデ、底部外面は回転糸切り。58-2は、受部が内湾気味に立ち上り、底径5.8cm、残存高 2.1cmを測る。色調は茶色、焼成は不良、体部は回転ナデ、底部外面は回転糸切りが残る。時期は平安時代か。

泥層からは多くの木製品・自然流木が出土している。これらの出

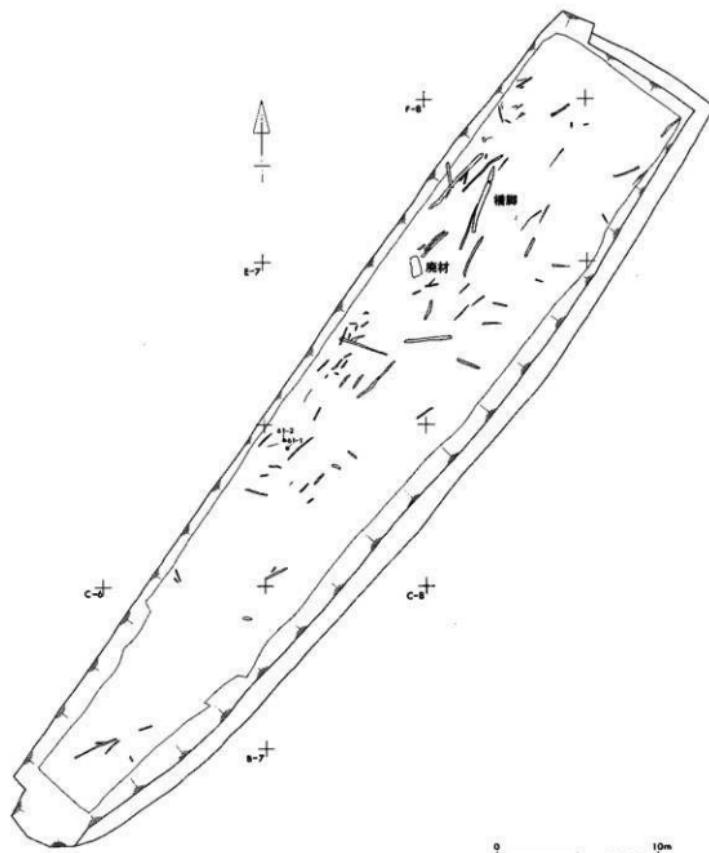


第58図 II-A区泥層出土土師器皿実測図 (1 : 3)

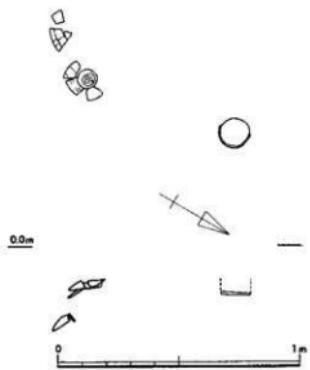
土位置を示したのが第59図である。これらは、総てが同時期というわけではなく、山上位置及び伸長方向を見るために一括して載せている。

これを見ると木製品・自然流木の多くが北東から南西に向いて出土しており、調査区南端で出土している自然流木のみほぼ東北東から西南西方向に向いている。これら自然流木・木製品の向きはその当時の河道の流向を反映しているといわれている。このことからこの泥層が堆積した時期には、河道は北東から南西方向に流れていたものと考えられ、調査区南端の自然流木群は河道の異なる時期、すなわち河道の流れが変わった段階のものと考えたい。

泥層から出土した土器は僅かで須恵器と土師器のみである。このうち上師器と曲物の出土状況について見てみる。土師器(61-1)は高台を有する壺で、底部を上にして出土しており、受部は上位から押しつぶされたような状態で、やや北東に傾いた状態で出土している。曲物は側板を失っており、



第59図 II-A区自然流木・木製品出土状況実測図 (1 : 300)

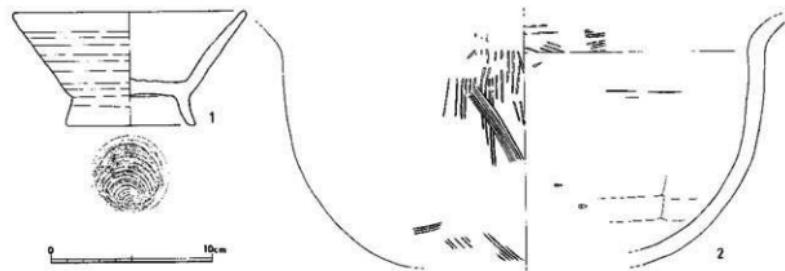


第60図 泥層遺物出土状況実測図 (1 : 20)

底板のみ残存していた。このほか土師器の土鍋 (61-2) も内50cmのところで出土しているが、上から押しつぶされたような状態で出土している。

61-1は土師器の高台付きの壺。口径は14.4cm、器高は7.0cm。高台は回転糸切り後、貼り付けており、高さ1.9cm、径8.0cm。体部は逆「ハ」字に外方に立ち上がり、高台は「ハ」字に外反する。高台は高さ1.9cm。

61-2は口縁部が短く「く」の字に屈曲し、体部は円みをもち、外面と内面下間に煤が付着しており、土鍋と思われる。口径は32.8cm、残存高は15.2cm。色調は濃い茶褐色、胎上は1~2mm大の砂粒を含み、焼成は普通である。胴部外面には綫・斜め方向のハケ調整、内面は頸部は横ハケ、胴部は横ナデ。



第61図 II-A区泥層出土土器実測図 (1 : 3)

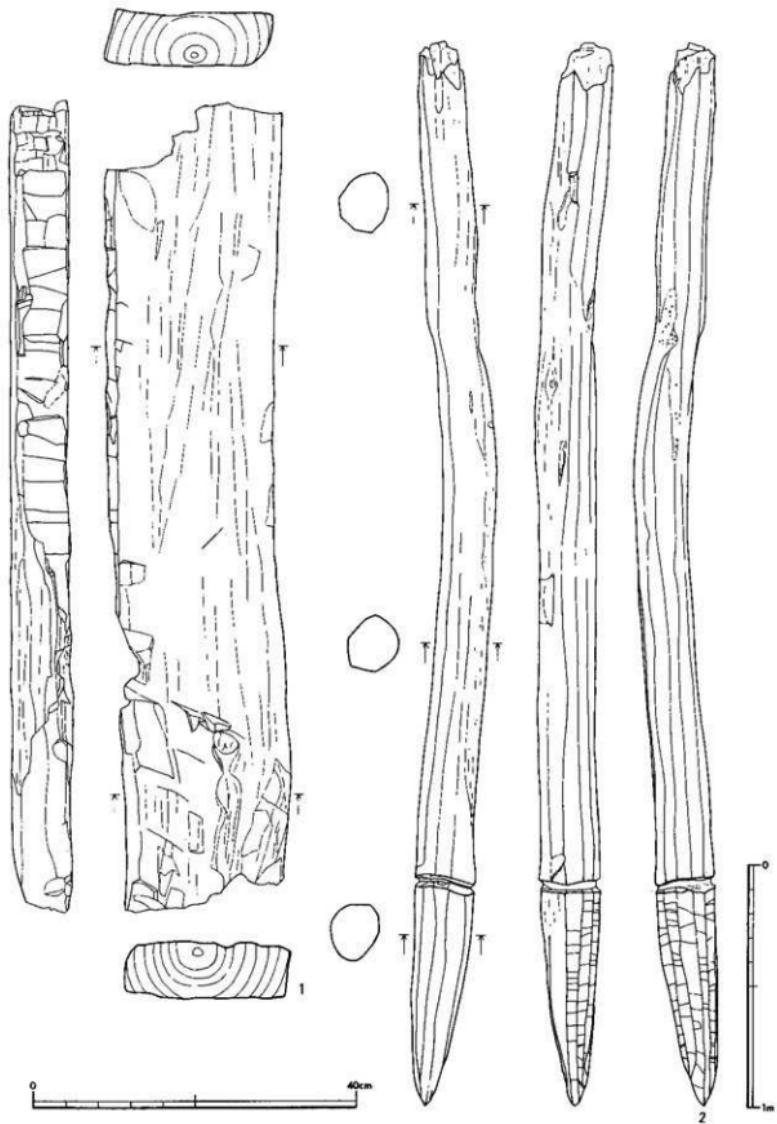
また、砂礫層直上の泥層からは人形の木製品や自然流木が出土している。

橋脚は調査区の北東側F-8区で砂礫層直上の泥層から検出した。周辺には大形の自然流木も出土しており、増水期の強い流れにより現位置に運ばれたものと考えられる。大形の流木の多くが砂礫層上面に定着する形で出土するのに対し、橋脚は泥層に挟まれ砂層も伴わないことから、漂着後あるいは二次的に移動したとも考えられる。この橋脚の流された時期だが、第61図の土器群と出土位置も近く、標高も近いことから平安時代後半ごろと考えられる。

橋脚は先端を尖らせた「打ち込み式」のタイプである。長さは4m38cm、太さは22.5~24.5cm、ケヤキの芯持ち材である。先端は丁寧に削取りされており、幅5cmの加工痕が認められる。また、先端から87.5cmのところに幅5cm、深さ2cmの輪状の抉りがある。橋脚の表面を観察すると、先端から1.8mのあたりまでは、良好な保存状態であるのに対して、それより上位の部分の半面のみの表面が荒れている。これは流水の影響と思われ、打ち込まれていたのが先端から1.8mまでであり、それより上位の表面が荒れている面が上流側に相当するものと考えられる。1は、この橋脚と同時期に流されたと思われる板材である。両小口とも欠けており、本来の長さは不明であるが、現状で長さ99.5cm、幅20.5cm、厚さ6.5~7.0cmを測る。芯持ち材であり、直径22cm程度の屈曲した材を用い、部分的に側面を加工して板材に整形している。両側面および表面には幅5.5cmの加工痕が認められる。同様な形



第62図 橋脚出土状況実測図 (1 : 30)



第63図 橋脚・加工材実測図 (1 : 6, 1 : 20)

態の板材がほかにも2点出土している。

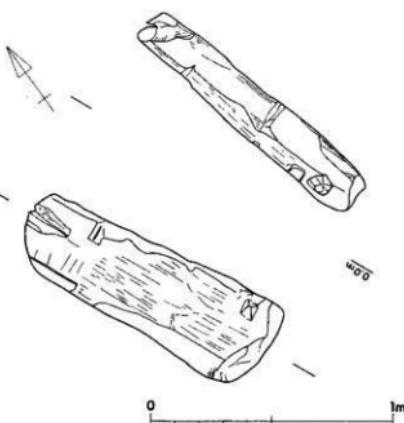
橋脚と同時期に流された木製品としては加工材がある(第65図)。小口の一端を切り落としていること、裏面に加工の痕跡がないことから、余材、廃材の可能性も考えられる。

長さは114.0cm、幅32~40cm、厚さ16.4~20.0cm、樹種はシノキである⁽⁴³⁾。

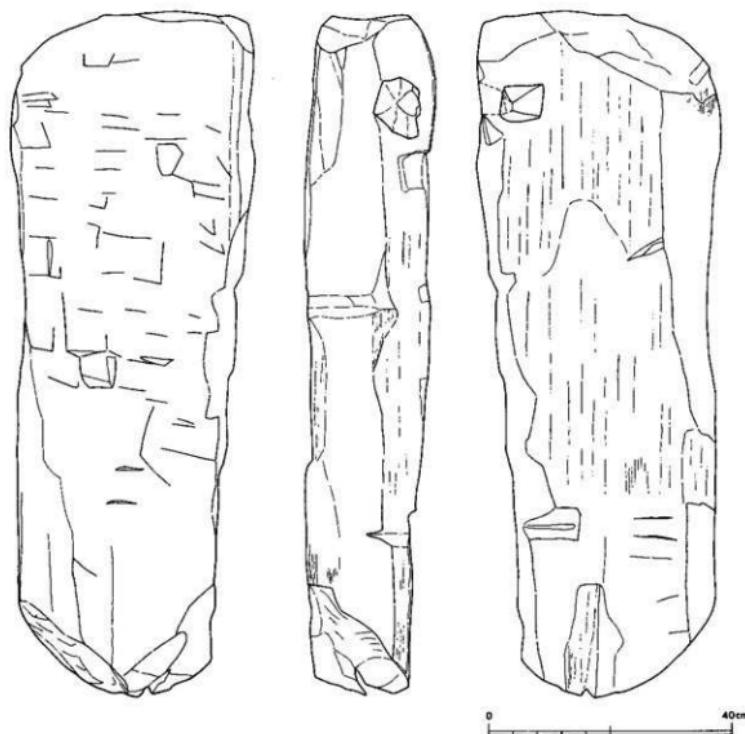
上面は幅2.5cm前後の加工痕が残っており、平滑に整形されているが、下面は加工がなされておらず表面も荒れている。下面から側面に向けて5.8×7.0cmのえずり孔が穿たれてい

る。

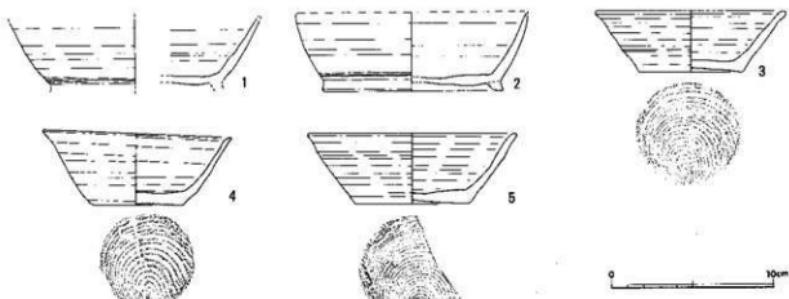
この廃材も橋脚と同時期の平安時代後半に流されてきたと考えられる。



第64図 廃材出土状況実測図 (1 : 20)



第65図 廃材実測図 (1 : 8)



第66図 II-A区泥層出土平安時代土師器・須恵器実測図 (1 : 3)

表1 泥層出土平安時代土師器・須恵器観察表

調査番号	器種	層位	法儀 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
66-1	土師器 環 (高台付き)	泥層		体部は外傾する。 底部外縁に高台がつく。	外側: 体部回転ナデ。底 部外縁: 高台回転ナデ。底 部: 高台回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰褐色	表面黒色
-2	环 (高台付)	泥層	口径 器高 底径	14.3 1.8 10.2	体部はやや外反する。 底部外縁に低い高台がつ く。	外側: 体部回転ナデ。底 部外縁: 高台回転ナデ。底 部: 高台回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 外面黑色。内面銀 化
-3	坏	泥層	口径 器高 底径	11.8 3.8 6.4	体形は大きく外傾する。 底部はやや上げ底。	外側: 体部回転ナデ。底 部外縁: 高台回転ナデ。底 部: 高台回転ナデ	胎土: 1~2mmの砂粒 焼成: 良好 色調: 黑褐色
-4	坏	泥層	口径 器高 底径	11.7 4.7 5.9	体部は大きく外傾する。	外側: 体部回転ナデ。底 部外縁: 高台回転ナデ。底 部: 高台回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 茶褐色
-5	須恵器 环	泥層	口径 器高 底径	12.9 4.4 6.9	体部は大きく外傾する。 底部はやや上げ底。	外側: 体部回転ナデ。底 部外縁: 高台回転ナデ。底 部: 高台回転ナデ後ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰褐色

この他、泥層からは須恵器・平安時代の土師器が出土している。次の平安時代後半の河道のところで一括すべきかもしれないが、明らかに河道に伴うものと区別しておく意味から、ここで触れておくこととする。

第66図1~4は、土師器の壺。1、2の体部は外開き気味で、糸切り底をもち、低い高台がつく。表面は黒色、灰褐色。時期は平安時代前半か。3、4の体部は外開き気味で、糸切り底をもつ。時期は平安時代前半。5は須恵器の壺。前述の3・4と同じ形態であり、時期も同じと思われる。

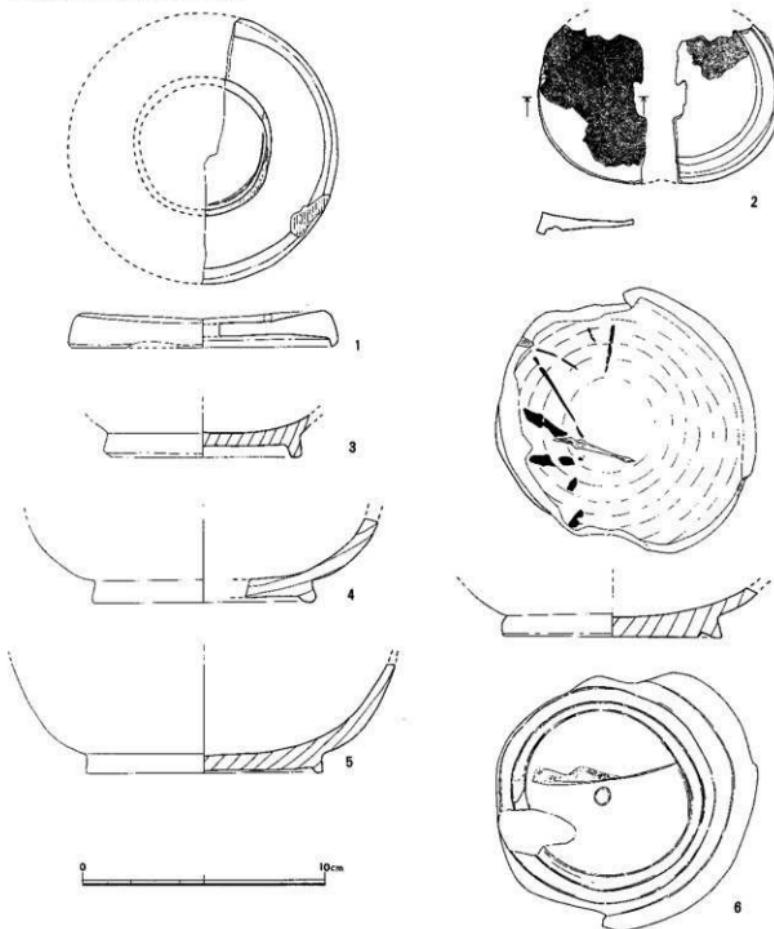
泥層出土木製品 (注4)

泥層からは多数の木製品が出土しているが、山物・漆器などの日常容器が多い。

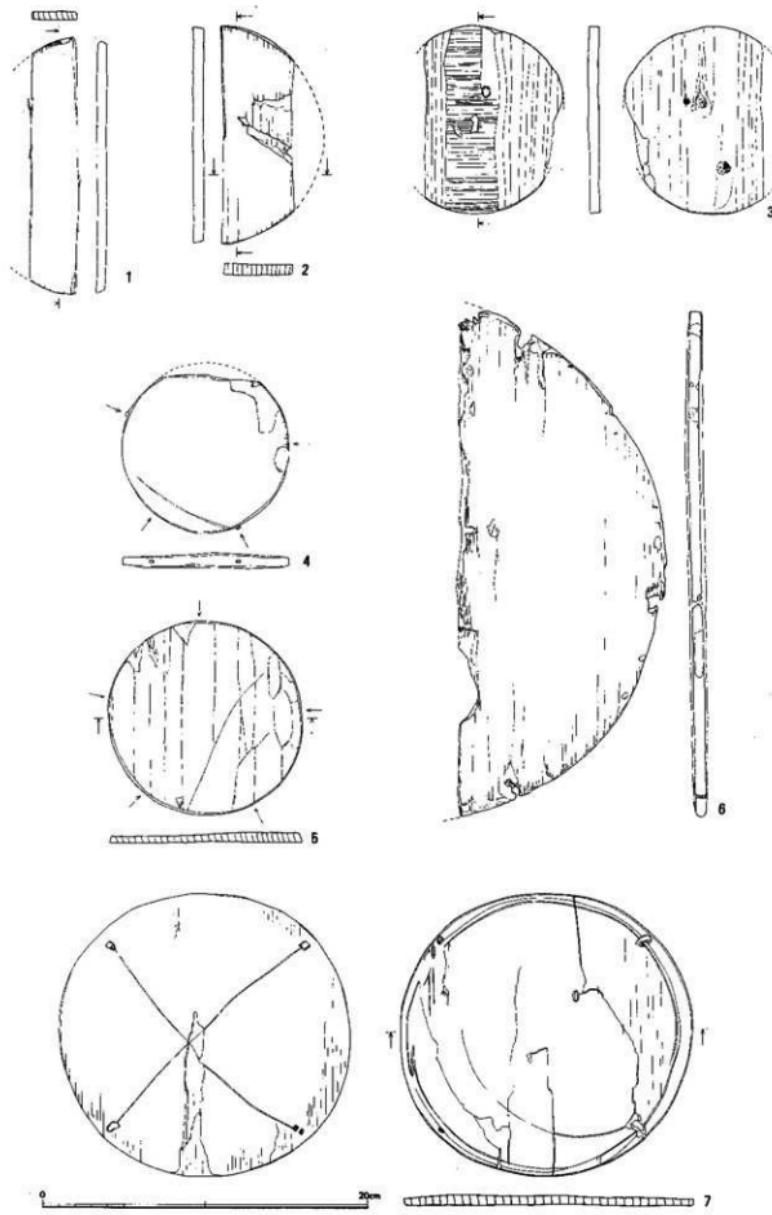
第67図は漆器である。1は輪状のつまみを有する蓋である。口径11.1cm、器高は1.5cm、トチノキが用いられている。外面のみ漆が塗布されているものと思われ、黒色化している。2は漆を入れていた容器の高台部と思われる、外面に漆のちぢみが認められる。3~6はいずれも高台付きの椀である。高台はいずれも内側を溝状に凹めて作りだしており、高さはない。断面は外側に踏ん張る形態のものである。いずれも内面には黒色漆が認められるが、外面は全体に黒色漆が塗布されているもの(3・5)と、底部裏面には塗らない(4・6)ものがある。また、6のみ内面に赤色漆による模様が描かれている。3は高台径は8.1cm、4は径9.2cm、5は出土例中最も大形で、径9.8cm、6は径7.1cmを測

る。6は内面に赤色漆で、模様が描かれている。剥離が著しく図柄の全体は判らないが、枝状の細い4本の線と葉かと思われる4本の太い線が認められる。外面底部は粗い加工痕があり、ろくろのへそも残されている。

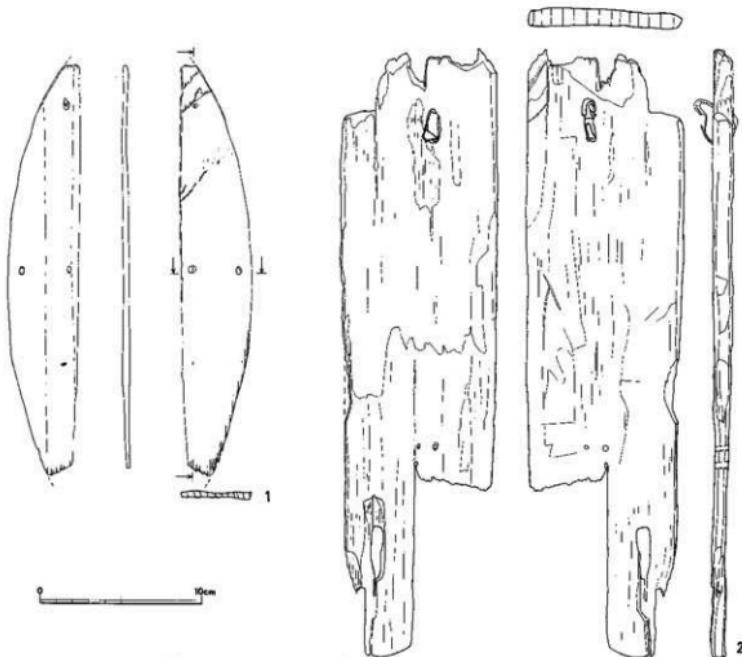
曲物（第68図）は円形曲物の底板のみが7点出土している。このうち、木釘（図面の矢印）を用いて側板を接合するもの（4・5）、桜皮を用いたもの（6・7）、はめ殺しの技法を用いたと思われるもの（1・2・3）が見られる。1は復原径16cm、厚さ0.5cm、2は径13.4cm、3は11.5cmである。1・2ともスギの板目取りである。3は外面上に木理に直交してノコギリによる跡が細かく残っている。1・2は一部しか残っていないためはっきりしないが、3は木釘の痕跡がないことから、はめ殺しの方法が使用されたものと思われる。



第67図 II-A区泥層出土木製品実測図 (1) (1 : 2)



第68図 II-A区泥層出土木製品実測図(2) (1 : 3)



第69図 II-A区泥層出土木製品実測図(3)(1:3)

4は木釘を4か所に打ち込んでいるが、間隔からもう1か所あったと思われる。周縁は僅かに傾きをもって裁断されている。5は径11.8~12.0cm、厚さ0.4~0.6cmで周縁は斜めに裁断されている。内面には黒色漆が塗布されている。木釘が5か所打ち込まれている。

6は片上例中最も大形のものである。径32.2cm、厚さは0.6cmを測る。スギが用いられている。周縁には桜皮で固定するため穿孔が3か所で認められる。7は4か所に桜皮が残っており、側板の圧痕も明瞭に残っている。径は17.3~17.7cmで、厚さは0.6cm。外面には桜皮をはめ込む4か所の孔を対角線状に結ぶ×の線が書かれていた。おそらく穿孔前に場所を記しておいたものと思われる。

第69図1は曲物かとも思われるが、それに対応する位置に穿孔されており、うち1か所には桜皮が残っている。現状で長さ56cm、厚さ0.4cmを測る。樹種はスギである。2は長さ37.6cm、幅9.7cm、厚さ1.1cmを測る。1か所に桜皮を留めていることから楕円形曲物の底板の一部かとも思われるが、3か所にみられる0.2cm前後の貫通孔と、 $5 \times 1.2\text{cm}$ の長方形の孔が見られることから用途不明とした。表面は剥離が著しい。

刀子(第70図)は横断面は楕円形を呈し、柄元木口から茎挿入孔を空けている。一方を中央から柄頭にかけて凹め、もう一方を僅かに「く」字に曲げている。柄頭は柄元より細く円みを帯びている。全長14.1cm、幅2.0cm、太さは柄元で1.0cm、柄頭で0.8cm、茎孔の深さは7.9cmを測る。

横槌(第71図)は、芯持ち材を用いており、全長33.8cm、敲打部の長さは20.8cm、柄の長さは13cm。太さは敲打部で7.6cm、柄で3.6cmを測る。敲打部と柄の境界は斜めに傾斜しているが明瞭ではない。

祭祀関係木製品は人形代、板塔婆、舟形木製品が出土している。(第72図)

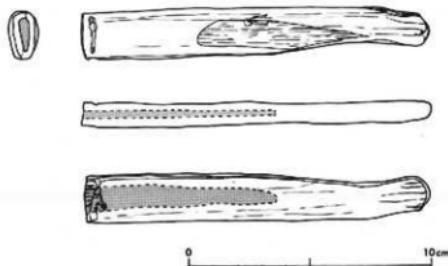
人形代は足を途中から欠いているが、現状で94.5cmという大形のもので、正面全身を表現したものである。各部は幅9.0cmの板材の側縁にV字形の切欠きを入れて頭部・肩部・腰部を、下端木口からコ字形の深い切欠きを入れて足を表現している。頭部は鳥帽子を表現しており、幅9.0cm、長さ6.4cm。顔は椭円形で面長、墨書による表現はない。肩部はややなで肩。胴部は長さ22.2cmで手は表現されていない。足の幅は1.8cmを測る。また、腰部のあたりには径2.0cmの孔が穿たれている。

板塔婆は空風輪と下方を欠いている。長さは11.5cm、幅は2.5cm、厚さは0.5~0.6cmの小形品である。各部は、板材の両側縁に浅いV字状の刻みを入れて表現している。火輪は三角形をなし、水輪はそろばん玉に近い形状を呈している。針葉樹が用いられている。

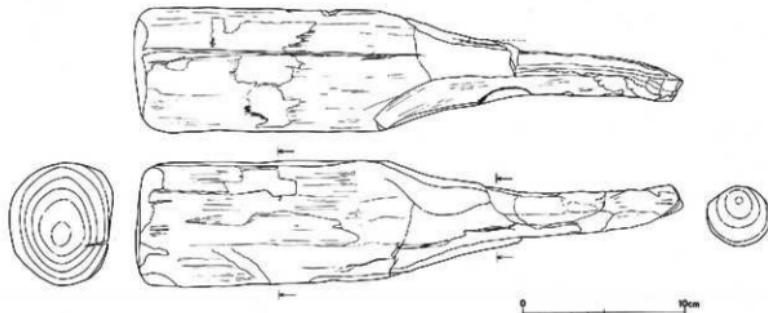
舟形木製品としたものは、長さ22.2cm、幅4.2cm、厚さは0.5cmと非常に薄手である。先端は底面から上面に向けて削り尖らせて船首を表現している。上面は幅2.9cm、長さ9.5cmにわたってはつり船檣としている。また、下端から1.9cmのところではノコギリの痕が認められる。あるいは、未成品かもしれない。

第73~76図は、いずれも用途を明確にしえない加工材である。

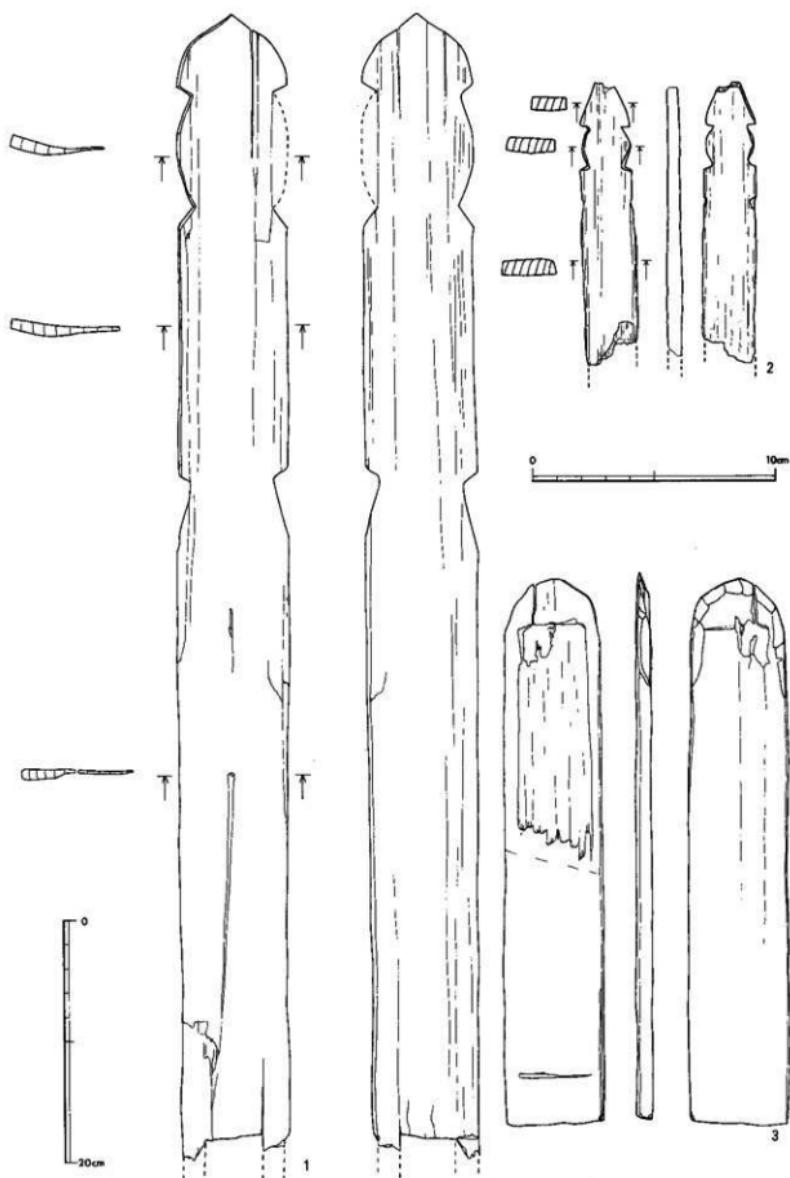
73-1は先端を方形に加工した16.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmの木口の上端は方形に削りだし、下端は山形に切り落している。73-2も芯持ち材の先端を方形に削っている棒状の木製品で、樹皮を留め



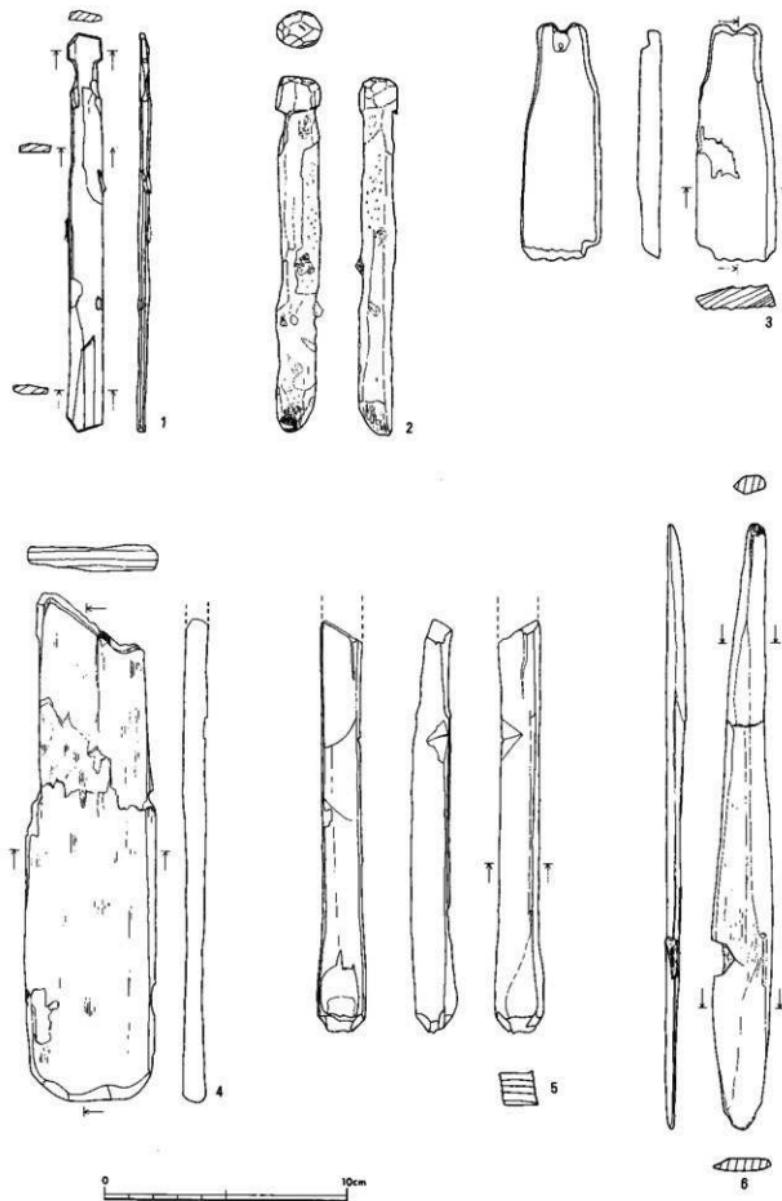
第70図 II-A区泥層出土木製品実測図(4)(1:2)



第71図 II-A区泥層出土木製品実測図(5)(1:3)



第72図 II-A区泥層出土木製品実測図(6) (1:2, 1は1:4)



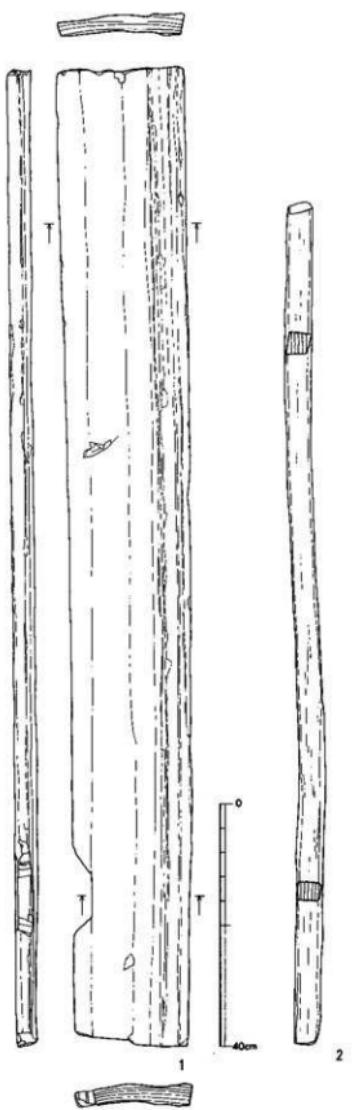
第73図 II-A区泥層出土木製品実測図 (7) (1 : 2)



第74図 II-A区泥層出土木製品実測図(8)(1:2)



第75図 II-A区泥層出土木製品実測図(9)(1:3)



第76図 II-A区泥層出土木製品実測図 (10)
(1 : 4, 1 : 8)

ている。下端は摩耗しており本来の長さは不明だが、現状で長さ14.6cm、頭部で幅1.8cm、1.6cm。先端は丁寧に加工されている。73-3は長さ9.7cm、幅3.7cm、厚さ0.9cmを測る。上端はやや細くなり、わずかに凹んでいる。下端は斜めに傾きをもって切り落している。73-4はスギ材を用いており、長さ20.8cm、幅5.4cm、厚さは1cm前後。先端は隅が円みをもつように削っている。

73-5は先端を匙状に曲げてある。長さ16.8cm、2.0cm、1.4cmを測る。柾目取り。73-6はヘラ状の木製品で、長さ24.9cm、幅は2.5cm、厚さは0.5~0.8cmを測る。74-1・2はいずれも扁平な板材を加工した長方形の札状をなすものである。1は長さ13.8cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmで2に較べて細長い。2は長さ9.7cm、幅5.9cm、厚さ0.6cmを測る。3は両端を左右非対称の山形に切り落した用途不明の板材である。長さ12.2cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm、柾目取り。4は7.4cm×4.6cm、厚さ3.9cmの板材の側面を一方は垂直に落し、もう一方は斜めに切り落している。第75図は、長さ37.5cm、幅2.9cm、厚さ2.7cmの棒の両端に楔を打ち込んでいるものである。楔は一つが長さ3.5cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm、もう一つは長さ4.7cm、幅2.5cm、厚さ0.7cmでいずれも先端は尖らせている。図面左の楔は深く入り込んでいる。二つの楔は木理に直交して打ち込まれており、「部材を固定するための楔」とと思われる。

第76図は、長さ1m60cmを測る大形の板材である。両小口は鋸で切断されており、側面に「コ」字形のくり込みが認められる。幅は上端で18cm、下端で20.7cmとほぼ均一である。断面20cmを見ると僅かに反りをもつが、これは木取りの関係と思われる。また、長辺側の側面はいずれも逆「ハ」字形に切り落されている。くり込みは長辺15.5cm、短辺6.5cm、深さ3.0cmで、ノミ状の工具による加工痕が明瞭に残る。

杭は樹種鑑定をおこなったもののみ図化した。1は長さ15.5cm、太さ1.7~2.1cmのナラ類の芯持ち材の先端のみを尖らせており樹皮を残している。2は上方を欠いており、尖らせた先端部分のみ残っている。現状で長さは11.2cm、太さ2.0~2.6cm。樹種はカシ類である。以上が泥層出土の木製品である。これらの時期だが、泥層からは平安時代後半の土器が出土しており、木製品もこの時期のものと考えられる。

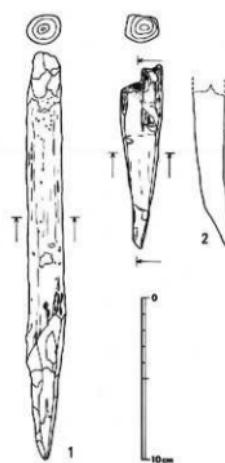
d. 砂礫層～奈良・平安時代の河道～

河道によって押し流された砂礫層1は調査区の北東から南西に向けて堆積している。河道の向きは現朝鈴川と平行でなく、北東から南西方向であることがわかる。これは、泥層出土の自然流木・木製品の伸長方向からわかる河道の流向と一致している。

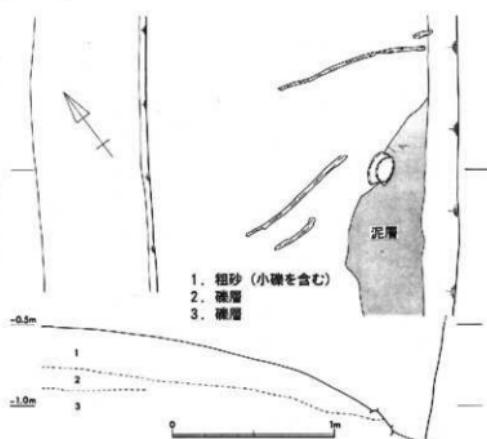
砂礫層は調査区北西隅が最も高く、標高-0.4mで、南東に向けて傾いて堆積している。砂礫層は厚いところで40cmにも及ぶ。また、砂礫層は間に泥層を挟みつつ下流側へ堆積しており、増水・減水を繰り返したことを示している。砂礫層は「a. 層序」でも述べたように、一時期に堆積したものではなく、奈良時代の河道が徐々に流れを東に移動しながら砂礫を下流へ押し流し、中州を形成したものと思われる。この奈良時代の河道はII区では検出できなかったが、I区の調査で、河道の肩口が検出されており、現在の朝鈴川の部分（暫定掘削部）を流れていたものと思われる。

河道はこの砂礫層1を削り込んで移動している。この削り込んだ際には砂礫層1に混じっていた遺物をさらに下流へ押し流したものと思われる。

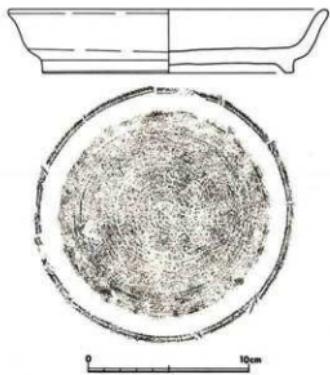
削り込んだ時期の遺物としては、須恵器の盤がある（第78図）。須恵器の盤は砂礫層1が北東側に傾いていくその端に辛うじて傾いた状態のまま残されていた。これより北東側では砂礫層はレンズ状～ブロック状に僅かにみられるのみとなる。須恵器の盤（第79図）は口径19.7cm、器高は4.1cmの大形品。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。体部は短く、やや外反する。底部外面は糸切りで、端部に低い高台が付く。胎土中には1mm以下の砂粒を含んでいる。焼成は良く、色調は灰色。時期は奈良時



第77図 II-A区泥層出土木製品実測図 (1 : 3)



第78図 砂礫層1須恵器出土状況実測図 (1 : 30)



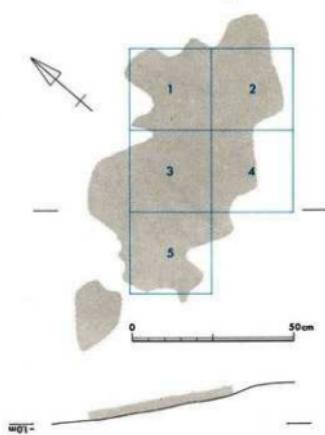
第79図 砂礫層1出土須恵器実測図（1：3）

この河道の底からは、廃棄されたシジミ化石⁽¹⁸⁾が1×0.6mほどの限られた範囲でまとまって出土した（第80図）。化石は、貝殻の石灰質が溶けて失われており、貝殻表面の膜と印象のみが残されている。産状は合弁で地層に直立する形で産出するものは認められず、大部分は片弁で、殻を伏せた形である。このことから、生息状態ではなく、死後に堆積したとみられる。出土した化石から無作為に104個を選び、殻長を計測した（第1表）。平均殻長は24.3mmで、90%以上が20～30mmである。ある程度の大きさのものに分布が偏り、小さなものは少ないとみられる。人間が採取して、その殻を捨てたものが堆積したと考えられる。このことから、平安時代後半にはこの付近は陸地化していたことがわかる。

代末かと思われる。

この河道が増水した際に供給され堆積した砂礫層（砂礫層2）は調査区南端で中州状に堆積していた。しかし、砂礫層の厚さも1に較べて薄く、混ざっている遺物も少ない。砂礫層の上層には薄い細砂層を挟みつつ泥層が堆積している。砂礫層および河道内から出土した土器から、この河道の時期は平安時代後半と考えられる。

このことから、橋脚や廃材・自然流木を含む泥層とはほぼ同じ時期と考えられる。河底の最深部は標高-1.8m。水流によって侵食されて形成された溝状の「流痕」が、北東から南西方向に規則的に残されている。流痕に溜った砂礫層にも遺物が含まれていた。



第80図 シジミ化石出土範囲（1：15）

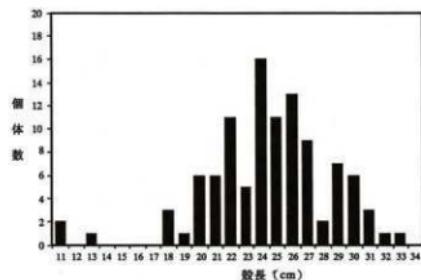
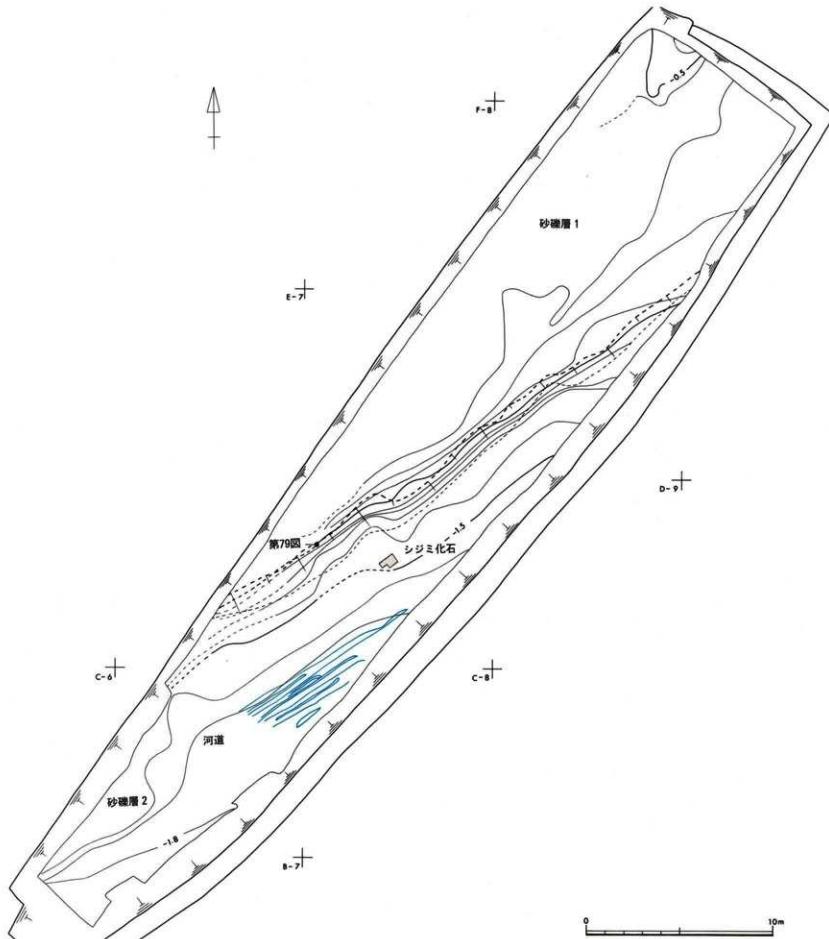


表1 シジミ化石殻長分布図

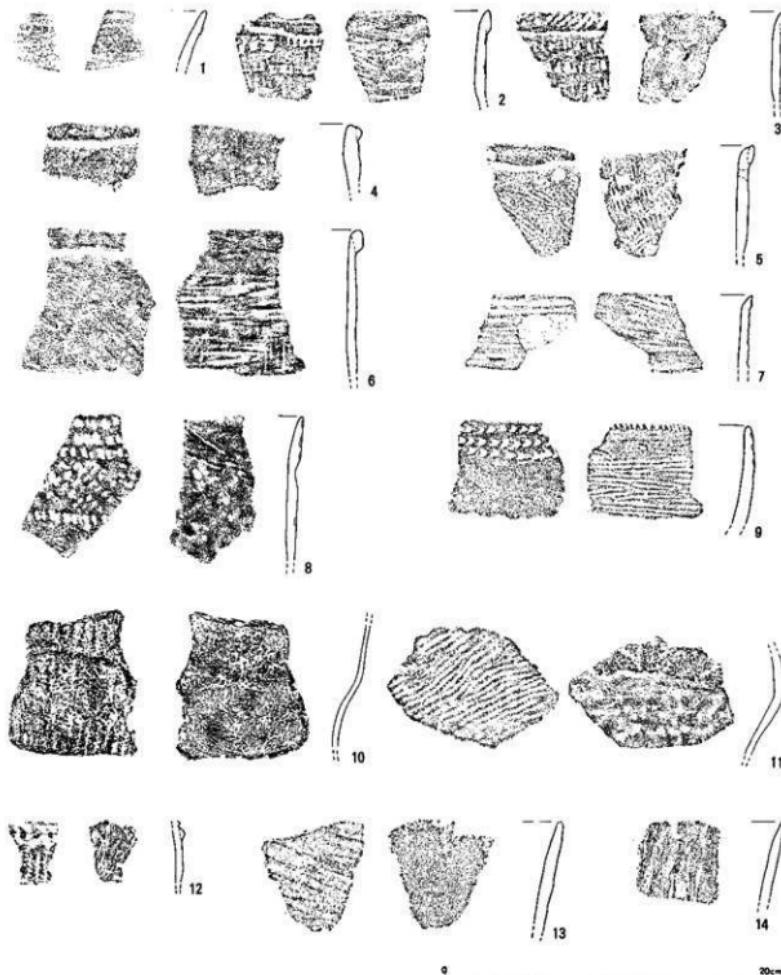


第81図 奈良～平安時代の河道測量図 (1 : 200, 10cmセンター)

II - A区砂礫層出土遺物

縄文土器

縄文時代前期から晩期の土器片が少量出土している。小片で、多くは磨滅している。第82図1～9は前期に属する。口縁部外側に肥厚帯をもつもの（2～6）ともたないものがある。文様としては刺突文、隆帯文がある。刺突文は押し引き状のもの（3・4）とD字形のもの（8・9）があり、工具としては貝（3）や棒状のものが使用されている。隆帯文は幅が狭い（1・7）。10～12は中期の土器。10、11はキャリバー状の口縁部をもち、器肉は薄い。文様としては、縄文地に隆帯文（10・12）



第82図 II - A区砂礫層出土縄文土器実測図 (1) (1 : 3)

表2 II-A区砂礫層出土縄文土器(1)観察表

調査番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
82-1	縄文十唇深鉢	砂礫層		口縁部や外周辺。外面に隆起。	外面: 条痕 内面: ナデ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	外面スス付着
-2	深鉢	砂礫層		口縁部外面に肥厚帯。肥厚帯上と側部に刺突文を施す。	外面: ナデ 内面: 条痕	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	外面スス付着
-3	深鉢	砂礫層		口縁部外面に肥厚帯。肥厚帯上と側部に刺突文を施す。	外面: ナデ 内面: ナデ	胎土: 2~3mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
4	深鉢	砂礫層		口縁部外面に肥厚帯。	外面: ナデ 内面: ナデ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
-5	深鉢	砂礫層		口縁部外面に肥厚帯。	外面: 条痕 内面: 条痕	胎土: 1~2mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	外面スス付着 口縁部直下に孔があく。
-6	深鉢	砂礫層		口縁部外面に肥厚帯。	外面: 条痕 内面: 条痕	胎土: 1~2mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
7	深鉢	砂礫層		口縁部外面に隆起。	外面: 条痕 内面: 条痕	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
-8	深鉢	砂礫層		外面に押引状のD字爪形文を施す。	外面: ナデか 内面: 条痕	胎土: 2mmの砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
-9	深鉢	砂礫層2 (川道)		口縁部の外面に二段、内面に一段、D字爪形文を施す。	外面: ナデ 内面: 条痕	胎土: 1~2mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	表面にスス付着
10	深鉢	砂礫層		キャリバー状を呈する。 口縁部外面に刺突をもつた種の種。	外面: 縄文か 内面: ナデ	胎土: 1~2mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	表面にスス付着
-11	深鉢	砂礫層		隆起上に刺突文を施す。 外面に糊文を施す。	外面: 縄文地 内面: ナデ	胎土: 1~2mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	内部下方にスス付着
-12	深鉢	砂礫層		隆起上に刺突文を施す。 外面に糊文を施す。	外面: 縄文地 内面: ナデ	胎土: 1mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	
-13	深鉢	砂礫層		口縁部は直立する。	外面: 条痕 内面: ナデ	胎土: 1mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	外面スス付着 14と同一個体か。
-14	深鉢	砂礫層		口縁部は直立する。	外面: 条痕 内面: ナデ	胎土: 1mm人の砂粒を含む。 焼成: 白灰 色調: 純白色	外面スス付着

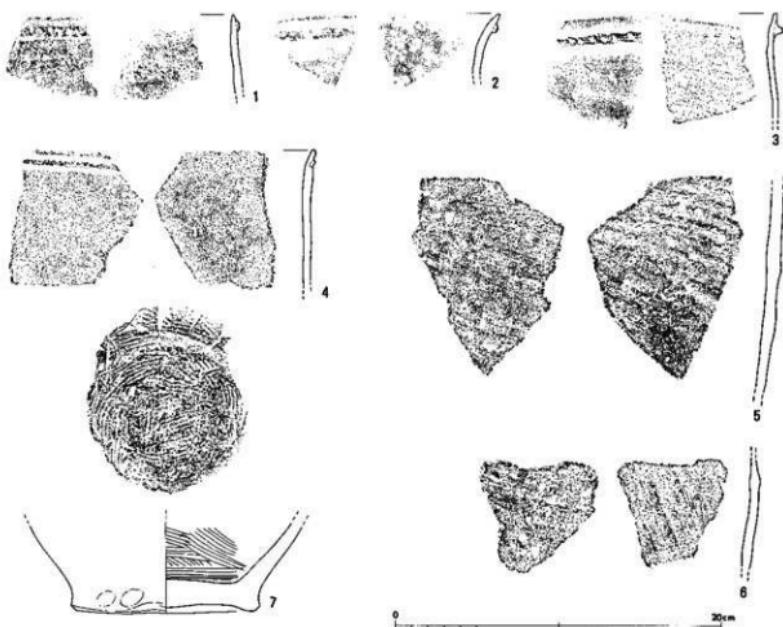
や刻印文(10)がある。13, 14は条痕文をもつもので、口縁部は直立する。時期は不明。

第83図1~4は晩期の穴帶文土器である。口縁部の直下に一条の穴帶が貼付され、4以外はその上に刻印を施す。調整は、3の内面が条痕文である他は、ナデで仕上げる。7は鉢の底部。器壁は厚く、やや上げ底気味で、内面に条痕文をもつ。

赤生土器

第84図は弥生時代前期の壺、甕、蓋である。1~4は壺で、口縁部と頸部との境に段をもつ。2は段の上にヘラで一条の沈線を施す。調整は内外面ともヘラミガキ。5~19は甕。口縁部は短く、大きく外反する。口縁部と体部の境に段をもつもの(11)と、ヘラで一条の沈線(10・11)、二条の沈線(7・8・19)、一条の沈線(15, 18)、四条の沈線(9, 16)、八条の沈線を施すもの(14), および段も沈線も施さないもの(6, 8, 10)もある。調整は外面ハケ日、内面ナデで仕上げている。蓋は原の前遺跡では、これ一点のみが出土している。体部から頸部にかけては大きく「ハ」字状に広がる。

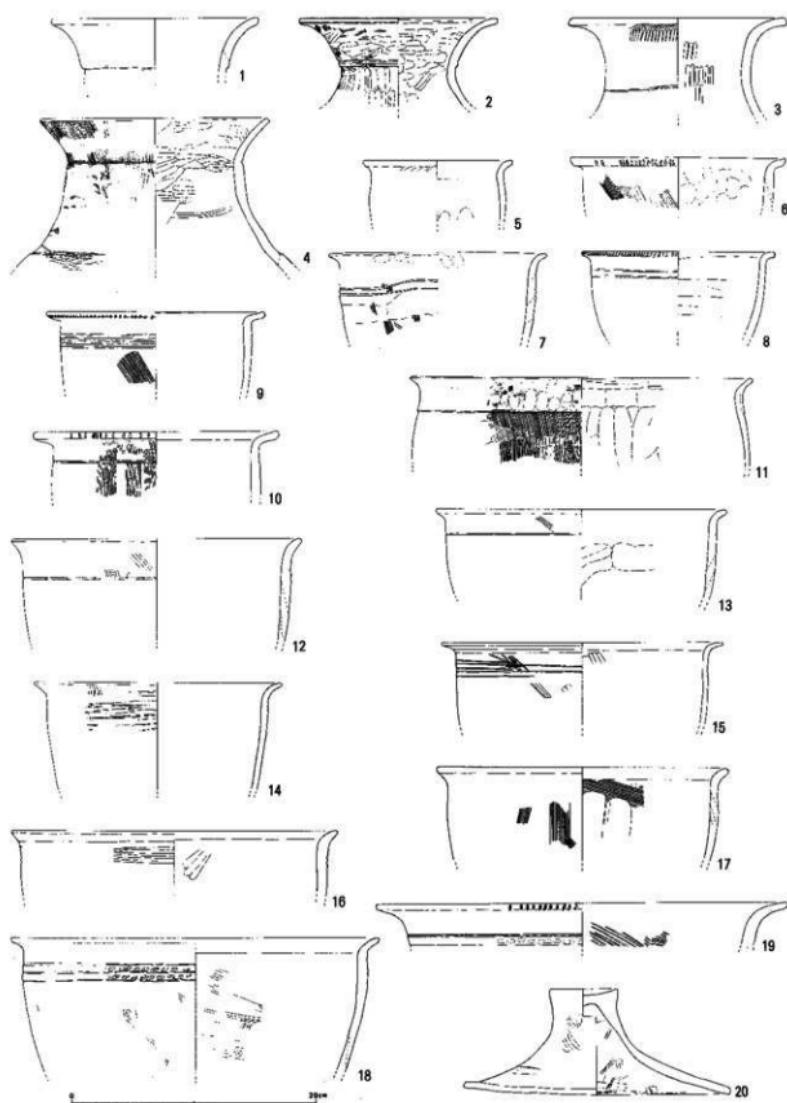
第85図は大形の上器を集めている。1~4は壺、2~3は甕である。1は口径39.0cmで、口縁部と



第83図 II-A区砂礫層出土縄文土器実測図(2) (1:3)

表3 II-A区砂礫層出土縄文土器(2)観察表

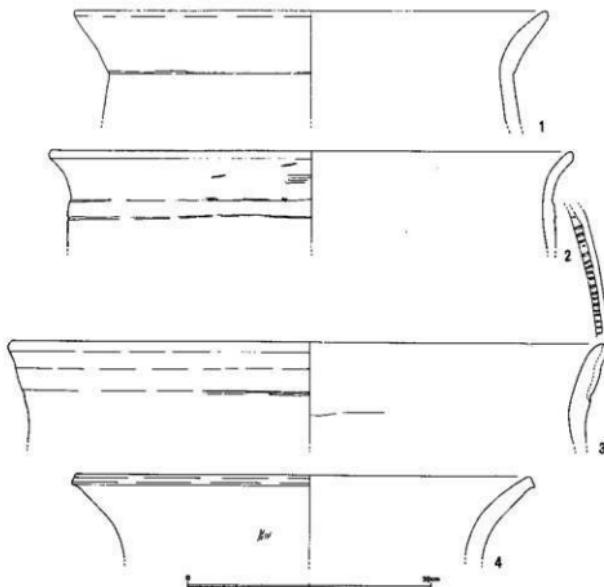
発掘番号	器種	底位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
83-1	縄文上器 浅鉢	砂礫層		高さの低い刻目突起文がつく。	外面: ナデ 内面: ナデ	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	
-2	深鉢	砂礫層		口縁部は少し外反する。 刻目突起文がつく。	外面: ナデ 内面: ナデ	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	
-3	深鉢	砂礫層		口縁部はやや外反する。 刻目突起文がつく。	外面: ナデ 内面: 条痕	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	
-4	深鉢	砂礫層2 (所産)		口縁部に低い突起文がついてある。 口縁部は短く、少し外反する。	外面: 丁寧なナデ 内面: 丁寧なナデ	胎土: 1~2mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	外面にスッキリした 突起文がある。 焼成性土器の可能性もある。
-5	深鉢	砂礫層			外面: ナデか 内面: ナデ	胎土: 1~2mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	
-6	深鉢	砂礫層			外面: ナデ 内面: ハク状のナデか	胎土: 1~2mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	
-7	深鉢 (底部)	砂礫層	底径 11.6	厚い底部。やや上部底となる。	外面: ナデ 内面: 条痕	胎土: 2mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶褐色	内面に黒斑



第84図 II-A区砂礫出土弥生土器実測図(1) (1:4)

表4 II-A区砂砾層出土赤生土器(1)観察表

件名番号	器種	部位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
84-1	赤生土器 盆	砂礫層	口径 17.0	口縁部と頸部の境に段をもつ。	外面：口縁部へラミガキ 内面：風化のため不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-2	壺	砂礫層	口径 16.3	口縁部と頸部の境に段をもつ。 腹の「口」にへらによる沈窓一蓋を施す。	外面：ハケ目の後へラミガキ 内面：へラミガキ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-3	壺	砂礫層	口径 18.0	口縁部と頸部の境に段をもつ。	外面：へラミガキ 内面：へラミガキ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-4	壺	砂礫層	口径 19.0	口縁部と頸部および制部の境に段をもつ。	外面：ハケ目の後へラミガキ 内面：へラミガキ	胎土：2mmの砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-5	壺	砂礫層	口径 12.4	口縁部は短く、外反する。文様なし。	外面：不明 内面：不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-6	壺	砂礫層	口径 17.8	口縁部は短く、外反する。 砂礫層部に刻目が付く。	外面：口縁部ヨコナデ、内面：口縁部ヨコナデ、 外側：へラミ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-7	甕	砂礫層	口径 18.0	口縁部は短く、外反する。 口縁部の外縁に横筋が現れる。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部：へラ目 内面：不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
8	甕	砂礫層	口径 16.0	口縁部は短く、外反する。 口縁部の外縁に横筋が現れる。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：へラ目 内面：不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-9	甕	砂礫層	口径 18.0	口縁部は短く、外反する。 口縁部に刻目が付く。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：へラ目 内面：ヨコナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	外面ス付着
-10	甕	砂礫層	口径 20.2	口縁部は短く、大きく外反する。 口縁部に刻目が付く。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：体部ハケ目 内面：不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
-11	甕	砂礫層	口径 28.2	口縁部は短く、大きく外反する。 口縁部に刻目が付く。 内外面に指印と土痕が残る。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部：へラ目 内面：ヨコナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
12	甕	砂礫層	口径 24.0	口縁部は短く、外反する。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部：へラ目 内面：ナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
-13	甕	砂礫層	口径 24.0	口縁部は短く外反する。 一条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：不明 内面：ナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
-14	甕	砂礫層	口径 20.5	口縁部は短く、外反する。 八条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：不明 内面：不明	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
15	甕	砂礫層	口径 23.2	口縁部は短く、外反する。 二条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：体部ハケ目 内面：不明	胎土：1~3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	外面ス付着
-16	甕	砂礫層	口径 26.8	口縁部は短く、外反する。 四条の「へら」書き直線文をもつ。	外面：不明 内面：ナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
17	甕	砂礫層	口径 24.0	口縁部は短く、外反する。 文様はない。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：ヨコナデ 外側：へラ目後ナデ	胎土：1~3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
-18	甕	砂礫層(河岸)	口径 30.1	口縁部は短く、外反する。 腹部の外縁に横筋が現れる。 一条の「へら」書き直線文の間に斜実文が施されている。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 外側：へラ目 内側：ヨコナデ	胎土：1~3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	
-19	甕	砂礫層	口径 34.0	口縁部は大きく外反する。 口縁の「へら」書き直線文の間に斜実文が施されている。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 外側：へラ目 内側：ヨコナデ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	表面ス付着
-20	蓋	天井僅 砂礫層 器高	5.6 22.1 8.5	口縁部は「へ」の字状に広がる。 口縁は「へ」の字状に広がる。 人井上面は少し変む。	外面：へラミガキ 内面：ヨコナデ、他 外面：へラミガキ	胎土：3mm大の砂粒を含む。 焃成：白灰 色調：黄褐色	脚端に黒斑



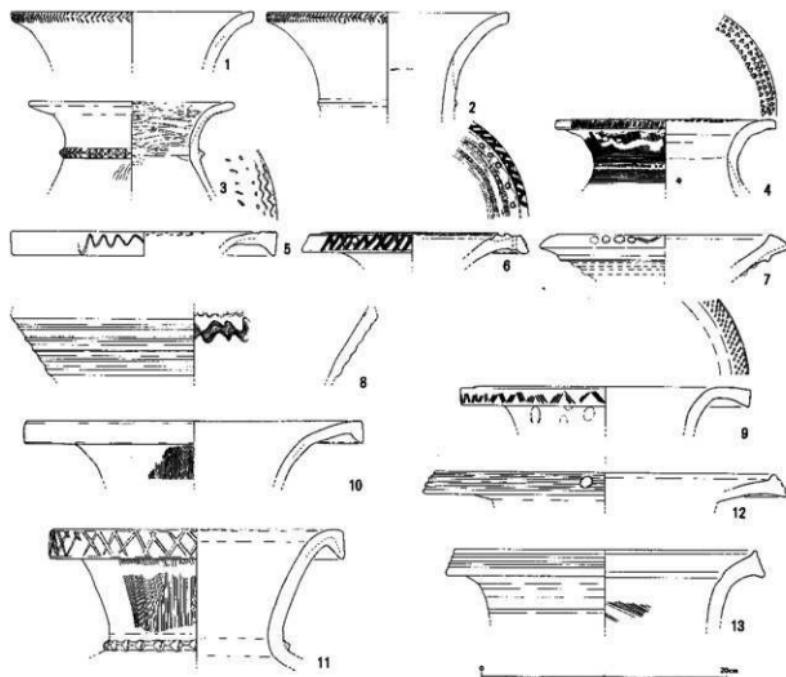
第85図 II-A区砂砾層出土弥生土器実測図(2)(1:4)

表5 II-A区砂砾層出土弥生土器(2)観察表

標団番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
85-1	弥生上器 壺	砂砾層	39.0	口縁部と頸部の境に段をもつ。	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 3 mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	大形品
-2	壺	砂砾層	43.0	口縁部はやや外反する。ハケ目状体により上下に割り出す。下方には、条のへらによる化粧を以る。	外面: ハケ目後ヘラミガ 内面: ナデか	胎土: 3 mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	大形品
-3	壺	砂砾層2 (河原)	49.0	口縁部やや外反する。ハケ目状工具による段をもつ。	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 1~2 mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	大形品
-4	壺	砂砾層2 (河原)	36.4	口縁部は大きく外反する。端部には面をもち、凹線状に窪む。	外面: 口縁部ヨコナデか 内面: ハケ目	胎土: 3 mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	大形品

頸部の境に段をもつ。2は口径43.0cmで、段とヘラによる沈線がある。3は口径49.0cmで、段をもつ。4は口径36.4cm、口縁端部は凹線状に窪む。

第86図は弥生時代前期・中期の壺。1~3は前期後半の壺で、口縁部は大きく外反する。1, 2の端部には羽状文を描く。2, 3の頸部には突帯をもつ。4~13は中期の壺。4は口縁部が大きく外反し、内面に山形文、外面にクシによる沈線文、波状文、刺突文、刻目文等をもち、文様を多く用いている。7, 8の口縁部は直線的に外傾し、頸部に突帯をもつ。7の端部は平坦面をなし、クシによる鋸歯文と円形浮文がつく。9~11の口縁部の外面にはクシによる斜格子文、頸部には突帯をもつ。12, 13は口縁部は大きく外反し、端部は上下に拡張する。拡張面に三条の凹線を施す。

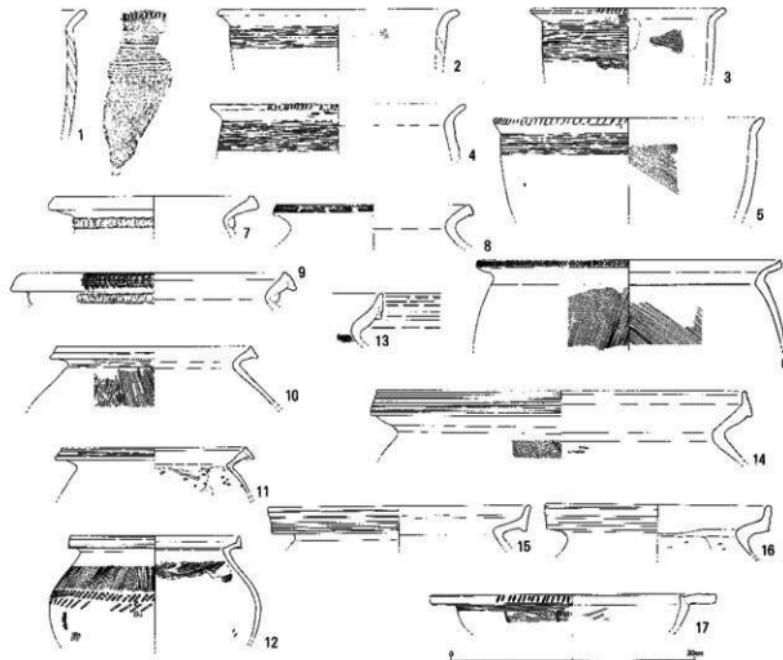


第86図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(3)(1:4)

表6 II-A区砂礫層出土弥生土器(3)観察表

発掘番号	器種	裏位	法縦(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
86-1	弥生上器 壺	砂礫層	口径 20.0	口縁部は大きく外反する。 口縁部に羽状の刻目を施す。	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	粘土：1~3mmの大砂粒 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-2	壺	砂礫層	口径 20.0	口縁部は大きく外反する。 口縁部に羽状の刻目と 粗縞を施す。 粗縞を一条もつ。	外面：ヘラミガキか 内面：不明	粘土：2mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-3	壺	砂礫層	口径 17.0	口縁部は大きく外反する。 粗縞を二条もつ。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粘土：1~2mmの大砂粒 焼成：白灰 色調：黄褐色	表面スス付着
-4	壺	砂礫層	口径 18.2	口縁部は下方に外反し、 内面に山字文。腹部には 粗縞と斜交文と呼ばれる 横引き状の斜交文を施す。	外面：ハケ目 内面：ナデか	粘土：1mmの大砂粒を含 む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-5	壺	砂礫層	口径 22.0	口縁部は下方に外反し。 粗縞を二条もつ。 内面には波状文と斜交文二条を 施す。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：ハケ目 内面：ナデ	粘土：1~2mmの大砂粒 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-6	壺	砂礫層	口径 17.4	「縫合部は下方に外張し、ク レシによる網状子目」と記載。 内面には波状文と斜交文 の二条が施されている。	外面：ナデ 内面：ヨコナデか	粘土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-7	壺	砂礫層か	口径 17.4	腹縫合部は直角。 縫合部に外張りがある。内面には 波状文と斜交文が二条あるよ うである。一部は中空である。	外面：不明 内面：不明	粘土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	口縫部に黒斑
-8	壺	砂礫層		「縫合部直角。 外縫に直角。正方形欠損が二箇つよ うある。内面には波状文と斜交文によ る波状文と斜交文がある。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粘土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：黄褐色	
-9	壺	砂礫層	口径 23.8	口縁部は大きく外反する。 口縁部外面にはクレシによる 内面には斜交文を施す。	外面：指印压痕が残る 内面：不明	粘土：1~2mmの大砂粒 焼成：白灰 色調：黄褐色	

-10	米	砂砾層	口徑	27.6	口縁部は大きく外反し、端部は下方へ弧度する。文様はない。	外面：口縁部ヨコナデ、頭部ハケ日 内面：ナガナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：茶褐色	口縫形に黒斑
-11	米	砂砾層	口徑	23.7	口縫部は浅く、半円に開き、端部は下方へ弧度する。文様はない。	外面：口縫部ヨコナデ、頭部ハケ日 内面：不明	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：茶褐色	口縫部内面にスヌ付着
-12	麦	砂砾層	口徑	28.0	口縁部は人字く開き、端部は下方へ弧度する。文様はない。	外面：不明 内面：不明	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：茶褐色	
-13	麦	砂砾層	口徑	24.8	口縫部は大きく外反し、端部は上下に弧度し、三葉の環状文様が付いている。	外面：不明 内面：口縫部ナデか 頭部ハケの後ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：灰褐色	

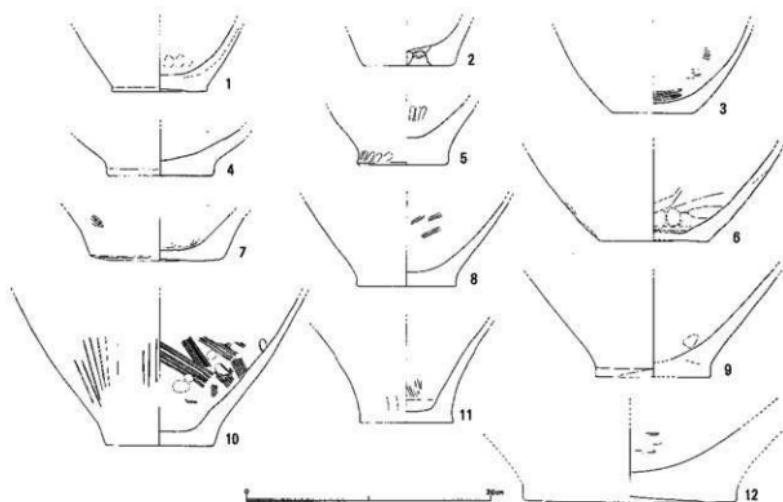


第87図 II-A区砂砾層出土弥生土器実測図(4)(1:4)

表7 II-A区砂砾層出土弥生土器(4)観察表

標印番号	器種	層位	法吊(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
87-1	弥生土器	麥 砂砾層		口縫部は深く、外反する。 口縫部外側に二つに分れる横文と、内面にクサビによる八条の波線文と三角形の網状文を施す。	外面：ナゲ 内面：ナゲ	胎土：3mm以上の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：茶褐色	
-2	麦	砂砾層	口徑 20.0	口縫部は深く、外反する。 クサビによる八条の波線文を施す。	外面：不明 内面：ナゲ	胎土：1~3mmの砂粒を含む。 焼成：普通 色調：茶褐色	
-3	麦	砂砾層	口徑 16.0	口縫部は深く、外反する。 口縫部外側に二つに分れる横文と、内面にクサビによる八条の波線文と三角形の網状文を施す。	外面：ハケ日 内面：不明	胎土：3mm以上の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：茶褐色	
-4	麦	砂砾層	口徑 21.0	口縫部は深く、外反する。 口縫部外側に二つに分れる横文と、内面にクサビによる八条の波線文と三角形の網状文を施す。	外面：口縫部ヨコナデ 内面：ナゲ	胎土：3mm以上の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：茶褐色	
-5	麦	砂砾層	口徑 22.2	口縫部は深く、外反する。 口縫部外側に二つに分れる横文と、内面に七条の波線文を施す。	外面：ナゲ 内面：ハケ日	胎土：3mm以上の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：茶褐色	

- 6	要	粘土層	口径	24.8	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には削り目を施す。	外面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ後ナデ	粘土：赤 焼成：良好 色調：黄褐色	口縁部に黒斑あり。
- 7	要	砂礫層	口径	16.0	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には指彫痕文様をもつ。	外面：不明 内面：不明	粘土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：灰褐色	
- 8	要	砂礫層	口径	16.0	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には五条の凹線を施す。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粘土：1 mmの大砂粒を含む。 焼成：普通 色調：黄褐色	
- 9	要	砂礫層	口径	21.6	「縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には三條の凹線と目立つ凹線外側に指彫痕文様をもつ。」	外面：小明 内面：不明	粘土：1 ~ 3 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 10	要	砂礫層2 (河道)	口径	16.0	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部は拡張する。	外面：口縁部ヨコナデ。 端部は拡張する 内面：不明	粘土：1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 11	要	砂礫層	口径	16.0	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には三條の凹線を施す。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ	粘土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 12	要	砂礫層か	口径	14.0	口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には三條の凹線を施す。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ	粘土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	表面スス付着
- 13	要	砂礫層			口縁部は「く」の字状に屈曲する。 端部には三條の凹線を施す。 口縁部に数條の旋轉を施す。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ	粘土：1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 14	要	砂礫層	口径	30.3	口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部には三條の凹線を施す。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ	粘土：1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 15	要	砂礫層	口径	21.5	複合口縁部は短く、直立する。 外面上に擬凹線を三条入れる。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。 体部へケタ	粘土：1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 16	要	砂礫層	口径	18.4	複合口縁部は短く、直立する。 外面上に擬凹線を三条入れる。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 体部へケタ	粘土：1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
- 17	高环	砂礫層	口径	23.6	口縁部の上面が大半が弧曲し、平指跡をもくる。 端部には刻目を施す。 内面には突起をもつ。	外面：ヨコナデ 内面：不明	粘土：1 mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	



第88図 II-A区砂礫層出土弥生土器実測図(5)(1:4)

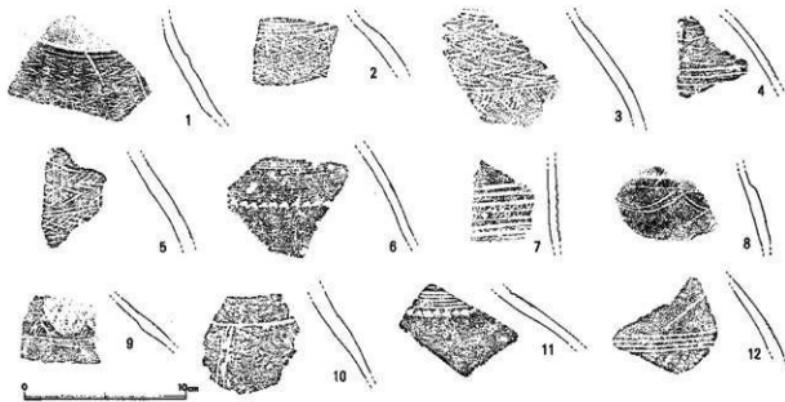
表8 II-A区砂礫層出土弥生土器(5)観察表

辨認番号	面種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
88-1	弥生土器 底部	粘土層	底径 7.8	厚手の平底	外面: ハラミガキか 内面: ナデ	胎土: 3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-2	底部	砂礫層	底径 7.6	厚手の平底	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 1~3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	焼成後、底部を穿孔する。
-3	底部	粘土層	底径 7.2	薄手の平底。体部内青気味	外面: 不明 内面: ハラミガキ	胎土: 1~3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	内部に黒斑
-4	底部	砂礫層	底径 9.2	厚手の平底で、円板状を呈す。	外面: ハラミガキか 内面: ナデ	胎土: 3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-5	底部	砂礫層2 (河底)	底径 7.6	厚手の平底	外面: ナデか 内面: ナデ	胎土: 1~3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	外面に黒斑
-6	底部	砂礫層	底径 8.5	薄手の平底	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 1~3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-7	底部	砂礫層	底径 10.6	厚手の平底	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 1~3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	体部外面上に黒斑
-8	底部	砂礫層	底径 8.2	厚手の平底	外面: 不明 内面: ハラミガキ	胎土: 3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-9	底部	砂礫層	底径 9.4	薄手の平底	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 2mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	
-10	底部	砂礫層	底径 9.4	厚手の平底	外面: ハラミガキか 内面: 体部ハケ目、底部 端に指頭圧痕がある。	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	内面上に黒斑
-11	底部	砂礫層	底径 7.6	薄手の平底。体部外反気味に立ち上る。	外面: 不明 内面: ハケ目後ナデ	胎土: 3mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	外部底に黒斑
-12	底部	砂礫層	底径 17.6	厚手の平底	外面: 不明 内面: ハケ目	胎土: 3mm大の砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 黄褐色	大型品

第87図は弥生時代の壺。1~5は中期前半の壺で、口縁部は短く、外反する。口縁端部に刻目、口縁直下にクシによる平行沈線をもち、1には沈線文の下に三角形の刺突文がある。6~11は中期後半の壺。6の口縁部は水平に近いほど崩曲する。端部は僅かに肥厚し、外面上に刻み目がつく。7~11は口縁部が「く」字に屈曲し、端部は拡張する。その端部は凹線(8~11)や刻目(9)を入れ、さらに屈曲部外面に指頭圧痕文帯をもつもの(7・9)もある。調整では口縁部はヨコナデ、体部外ハケ、内面ナデかハケで仕上げるが、11の体部内面はヘラケズリである。12~16の口縁部は複合口縁となり、外面に数条の凹線をもつ。時期は後期に属する。12は肩部に二段のクシによる刺突文が施されている。調整では体部外表面はハケ、内面はヘラケズリである。17は中期の高壺。壺部の破片で、口縁部の上面が水平となり、端部に刻目をもつ。

第88図は弥生土器の底部。2の底には焼成後に開けられた孔がある。

第89図は弥生土器壺の頸部から胴部の文様拓影である。1~10は前期。ヘラ、貝殻腹縁による平行線文、直線X彫文を引き、その内側に羽状文や鋸歯文を施す。また、ヘラによる重弧文(8)もある。11、12は中期。クシによる平行沈線文と刺突文をもつ。



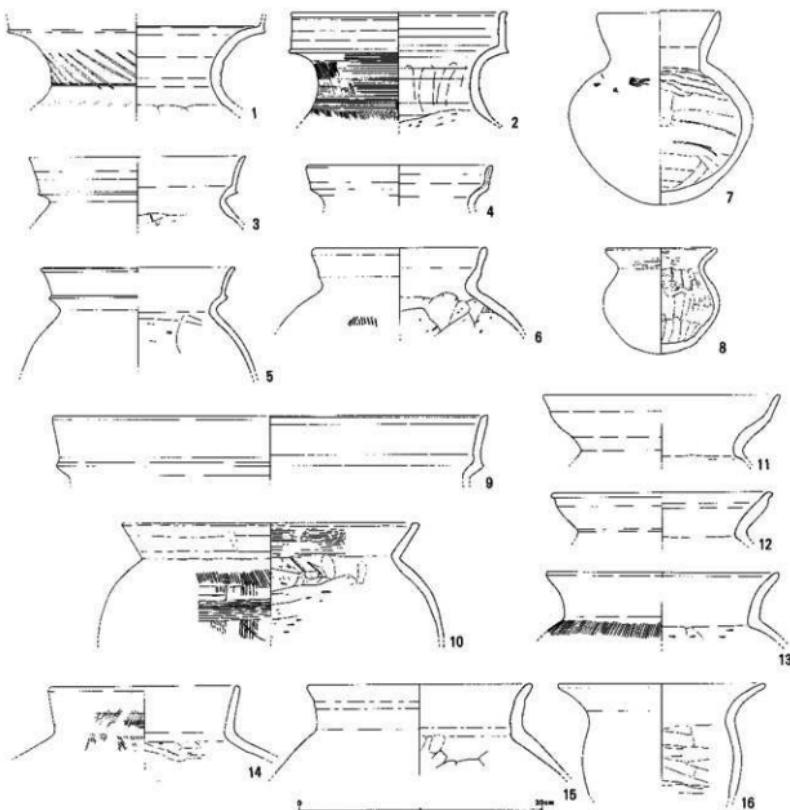
第89図 II-A区砂礫層出土弥生土器(6)拓影(1:3)

表9 II-A区砂礫層出土弥生土器(6)観察表

標本番号	岩種	層位	法尺(m)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎上・焼成・色調	備考
89-1	浮石+黒 金			貝殻模様による二条の平行弦文と平行区画文と羽状文を施す。	外面: 不明 内面: 指痕压痕残る。	胎土: 1~2mm大の砂粒 を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
-2	圭	砂礫層		ヘラによる四条の平行弦文と貝殻模様による二条の平行区画文および羽状文を施す。	外面: 不明 内面: ハラミガキか。	胎土: 1~2mm大の砂粒 を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
-3	圭	砂礫層		貝殻模様による二条の平行弦文と羽状文および縦条文を施す。	外面: ナデか。 内面: ナデ	胎土: 3mm大の砂粒を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
4	圭	砂礫層		貝殻模様による四条の平行弦文と羽状文を施す。	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 1~3mm大の砂粒 を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
-5	圭	砂礫層		ヘラによる二条の貝殻模様と二条の平行弦文および貝殻模様による羽状文を施す。	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 1~2mm大の砂粒 を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
-6	圭	砂礫層		貝殻模様による二条の平行弦文と貝殻模様による羽状文を施す。	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 3mm大の砂粒を含む 焼成: 不白 色調: 黑褐色	表面に黒斑
-7	圭	砂礫層		ヘラによる四条の平行弦文と二条の貝殻模様による二条の平行弦文および貝殻模様による平行弦文および片腹擦痕による別式文を施す。	外面: 不明 内面: ナデ	胎土: 2mm大の砂粒を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
8	圭	砂礫層		ヘラによる平行弦文と貝殻模様による重複文を施す。	外面: ナデか。 内面: ナデ	胎土: 1~2mm大の砂粒 を含む 焼成: 褐調 色調: 金褐色	
-9	圭	砂礫層		ヘラによる二条の平行弦文とその間に斜側文を施す。	外面: ナデ 内面: 不明	胎土: 2~3mm大の砂粒 を含む 焼成: 普通 色調: 金褐色	
-10	圭	砂礫層2 (河底)		ヘラによる二条の平行弦文と貝殻模様による二条の貝殻模様区画文を施す。	外面: ハラミガキか。 内面: ナデ	胎土: 1~3mm大の砂粒 を含む 焼成: 褐調 色調: 金褐色	
-11	圭			クシによる平行弦文(六条以上)と一角形の刻文を一条施す。	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 2mm大の砂粒を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	
-12	圭	砂礫層		クシによる四条の平行弦文と刻文を施す。	外面: 不明 内面: 不明	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 白好 色調: 金褐色	

土師器

第90図は古墳時代の土師器である。1、2は複合口縁をもつ前期の壺。口縁部は直立し、1の頸部にはヘラによる綾杉文がある。2は口縁部は直立し、端部は僅かに平坦面をなす。内面頸部に指圧痕跡を残す。稜は明瞭。3、5、9は複合口縁をもつ前期の壺。稜は鋭い。4、6は中期の壺。4は複合口縁であるが、稜は丸くなる。6は複合口縁が退化し、稜は鈍い。7は丸底壺。口縁部は長く、やや外開きとなる。完形品であり、川に投棄されたものであろう。8は小形の広口壺。口縁部は短く、大きく開く。時期は不明。10は口唇部が内側に肥厚する。畿内の布留式の影響を受けたものか。11は口縁部がやや内湾し、中程にかすかに稜をもつ。中期にみられる形態である。12は口縁部が「く」の字を開き、口唇部は外に摘み上げられている。13～16は後期に属する。13、16は口縁部が「く」の字状に外反し、14、15は直立気味に立ち上がり、肩部が張る。調整は体部外面は綫方向のハケ、内面はヘラケズリとなる。



第90図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(1)(1:4)

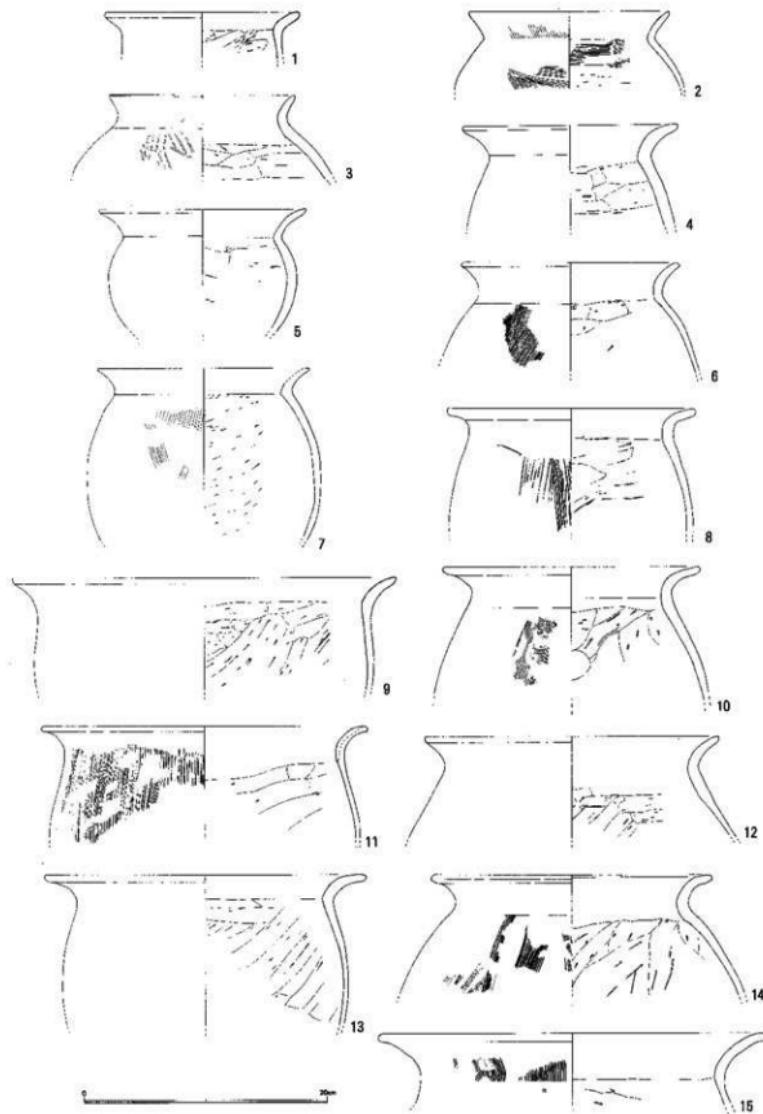
表10 II-A区砂礫層出土土器(1)観察表

井田番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
90-1	土師器壺	砂礫層		複合口縁。腹部外面に被杉文を施す。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：目打 色調：黄褐色	
-2	壺	砂礫層	口径 17.8	複合口縁	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	
-3	壺	砂礫層か	口径 17.9	複合口縁	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデか、腹部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	
-4	壺	(河底)	口径 15.4	複合口縁。口縁部は短く、突き出部は無い。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	胎土：1mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	
-5	壺	砂礫層	口径 16.0	複合口縁	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-6	壺	砂礫層	口径 14.6	複合口縁は退化し、縫は無い。	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-7	壺	砂礫層 器高	口径 9.8 器高 15.9	口縁部はやや開き気味に立ち上がる。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部球形で丸底。	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	完形品
-8	壺	砂礫層 器高	口径 9.2 器高 8.8	口縁部はやや外開きとなる。 体部は球形で丸底。	外面：口縁部ヨコナデ、体部不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1~2mm大の砂粒を含む。 焼成：不良 色調：黄褐色	
-9	壺	砂礫層	口径 36.0	複合口縁	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：不白 色調：黄褐色	
-10	壺	砂礫層	口径 24.4	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は内側に少しあく張り、段をする。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ日付 内面：口縁部ハケ日付後、体部ヘラケズリ、腹部には指印模様もある。	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：目打 色調：黄褐色	
11	壺	砂礫層2 (河底)	口径 19.4	口縁部はやや内張し、頭部との境に鈍い溝をもつ。	外面：不明 内面：口縁部、頭部不明 体部：ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-12	壺	砂礫層	口径 18.3	口縁部は「く」の字に外開きし、口唇部はつまみ上げられ、縮くなる。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-13	壺	砂礫層	口径 19.2	口縁部は「く」の字に外傾する。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-14	壺	砂礫層	口径 15.8	口縁部はやや外開き。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：1mm前後ヨコナデ、体部ヘラケズリ、腹部には指印模様。	胎土：1mm大の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-15	壺	粘土層	口径 18.5	口縁部はやや外張りとなる。 中ほどに大きなねじり有り外張る。 頭部内面がわざかに窪む。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色	
-16	壺	砂礫層2 (河底)	口径 17.2	口縁部は大きく外反する。 体部球形	外面：ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	胎土：重 焼成：良好 色調：暗褐色	

第91図は古墳時代後期から奈良時代にかけての上師器の壺である。口縁部は単純で、多くは「く」字に外反し、胴部は少し張る。調査では、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ハケ日、内面ヘラケズリ。1は口径15.8cmの小形品。口縁部は大きく外開きとなり、体部は垂直気味に下垂する。2は、口縁部が「く」字状に屈曲する。3は、口縁部が短く、やや外開きとなる。4~7は「く」の字状に大きく外反する。5は小形品で、体部は球形となる。8、10は口縁部が大きく屈曲し、水平となる。9は口縁部は「く」字状に外反する。11~15は人形品で、口縁部は大きく外反する。胴部はやや張る。

第92図は口径24~25cmの大形の壺。第91図と同様に古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器。口縁部は単純で、「く」の字に外反する。1、2の胴部は少し張り、3は球形となる。調査では、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ハケ日、内面ヘラケズリ。

第93図は古墳時代の土師器である。1、2は鼓形器台で、1は上台、2は下台の破片。2は稜が鋭く、稜と縫の間は狭く、「ハ」の字と逆「ハ」の字に開く。前期後半か。3~15は高壺。3、4は前



第91図 II-A区砂礫層出土土師器実測図(2)(1:4)

表11 II-A区砂礫層出土土器類(2)観察表

井筒番号	器種	構位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
91-1	土師器裏	砂礫層	口径	15.8	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-2	甕	砂礫層② (周縁)	口径	16.5	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面：ヨコナデ、体部へラケズリ 内面：口縁部へ口張ヨコナデ、内面へハケ目	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-3	甕	砂礫層	口径	15.3	口縁部は短く、「く」の字状に組曲する。	外面：ヨコナデ、体部へ内曲 内面：ヨコナデ、体部へ内曲	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-4	甕	砂礫層	口径	17.6	口縁部は「く」の字に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1~2mm人の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-5	甕	砂礫層	口径	17.0	口縁部は「く」の字状にやや外反する。 体部は球形。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目 体部：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-6	甕	砂礫層	口径	18.0	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、体部へ内曲	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-7	甕	砂礫層	口径	17.4	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目 体部：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-8	甕	砂礫層	口径	20.3	口縁部は大きく外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm人の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-9	甕	砂礫層	口径	31.7	口縁部は「く」の字に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目 体部：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-10	甕	泥層	口径	21.2	口縁部は「く」の字に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目 体部：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1~2mm人の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
11	甕	砂礫層	口径	26.9	口縁部は大きく外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ハケ目 体部：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-12	甕	砂礫層	口径	24.2	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1~2mm人の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-13	甕	砂礫層	口径	26.4	口縁部は大きく外反する。	外面：不明 内面：口縁部不明、体部へラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-14	甕	砂礫層	口径	23.2	口縁部は大きく外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色
-15	甕	砂礫層	口径	32.0	口縁部は大きく外反する。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、体部へラケズリ	胎土：1mm大的砂粒を含む。 焼成：白好 色調：黄褐色

期に属し、3は大きく開く壊部の破片で、脚との接合部は円盤充填となる。4は脚の破片で、円筒状を呈し、内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキ。5~15は中期以降のもの。5は外面に稜をもつ。6は脚部で、円筒状の筒部に大きく開く裾部がつく。円形透かしが3個ある。5、6は他の高壊より古いタイプ。7は楕形の壊で、内面にヘラミガキが認められる。8は円筒形の筒部に、「ハ」字状に開く裾部がつく。7、8は新しいタイプで、古式の須恵器と共存する。5~8は中期に属する。9は壊部と脚部の境の破片。脚部の筒部に方形の透かしをもつ。10~14は壊部の破片。15は裾部が大きく開く脚部。16は低壊の脚部。17は土製支脚。底部はえぐられ、上げ底状となる。18~20は甕。18は底部で、筒状になる。底付近に径6mmの小さな孔をもつ。後期によくあるタイプ。19も底部であるが、体部より一段小さくなり、すぼまる。大形品で、古式土器類に伴うもの。20は牛角状の把手。18と同一個体か。

第94図は上師器蓋。口縁部は口径25.5cmの大形品で、口縁部は大きく外反する。下縁は擬口縁状を呈し、接合面となる。調整は内外面ともヨコナデ。器肉は厚い。胎土中には1mm人の砂粒を含み、焼成は良く、黄褐色を呈す。時期不明。

須恵器

第95図は古墳時代から奈良時代の須恵器の蓋（1～16）、坏（17～26）である。1～5は口縁部が直立し、天井部との境に鋭い稜がつき、口唇内面に面をもつ。I期かII期で、中期末から後期の初め。6は口縁部と天井部に稜がつき、口唇内面に沈線を巡らす。後期前半。7は口縁部は鴻曲し、天井部との境に沈線が入る。焼け歪みが著しく、かつ、壺の破片がつく。III期で、後期の後半。8、9は口径10.4、11.4cmの小形品。口縁部から天井部にかけては丸くなる。天井部はナデ。IV期で後期の後半。

11は乳頭状のつまみをもつ蓋で、かえりをもつ小形品。後期末。12は蓋の破片と壺片とが溶着している。窯で廃棄され、灰原に堆積していたものが、何らかの事情で持ち込まれるものと思われる。13～15は宝珠状つまみをもつ。14はかえりをもつ。15は平たい天井部につまみがつき、口縁部は緩やかに傾斜し、端部は僅かに肩曲する。14は後期末、15は奈良時代に属する。16は輪状つまみをもち、肩部がやや張る。回転糸切り。奈良時代か。

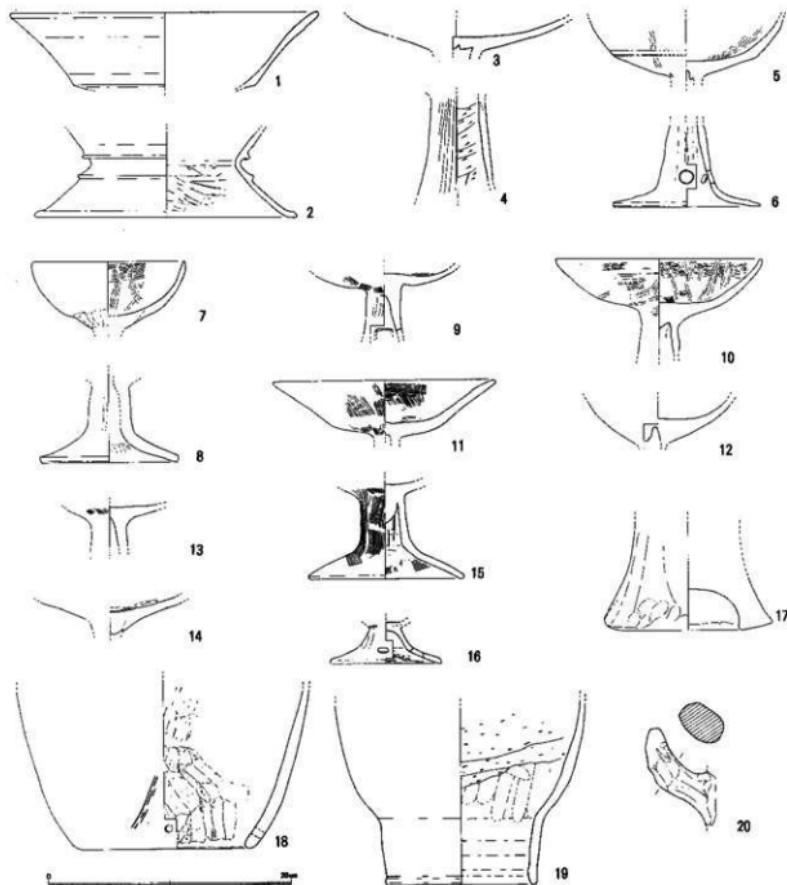
17～26は蓋坏の坏。17は高い立ち上がりをもち、口唇部内側に段がつく。III期で、後期の初め。18～21は比較的高い立ち上がりをもつ。20、21は天井部は回転ヘラケズリを施し、丸みを帯びる。後期の前半。22～24は立ち上がりが内傾し、口縁部は回転ナデ、他はナデ。後期後葉。25、26は小形品。26は立ち上がりが短く、かつ、水平に内傾する。時期は後期末。

第96図は奈良時代の坏である。高台はなく、底部は回転糸切り。口径10.6～15.0cm、器高3.4～4.3cm

第92図 II-A区砂礫層出土土師器
実測図(3)(1:4)

表12 II-A区砂礫層出土土師器(3)観察表

部品番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
92-1	土師蓋 壺	砂礫層	口径 24.4	口縁部は大きく外反する。	外面：口縁部ヨコナデ、 体部ハケヅリ後ナデ 内面：口縁部ナデ、 体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：赤褐色 色調：灰褐色	表面に黒斑
-2	壺	砂礫層	口径 25.6	口縁部は「く」の字状に凹曲。	外面：口縁部ナデ、 内面：口縁部ヨコナデ、 体部ヘラケズリ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：灰褐色	
-3	壺	砂礫層か		口縁部は「く」の字状に凹曲。 体部は球形。	外面：口縁部ヨコナデ、 内面：口縁部ハケヅリ後ナデ、 体部ヘラケズリ	胎土：3mm以下の砂粒を含む。 焼成：白灰 色調：米褐色	表面に黒斑 外側にスス付着

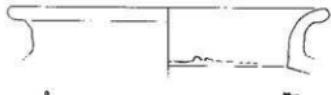


第93図 II-A区砂礫層出土土器実測図(4)(1:4)

表13 II-A区砂礫層出土土器(4)観察表

辨認番号	器種	場所	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
93-1	土器 波形器台	砂礫層	口径 25.4	逆への字状に聞く上台部。	外面:不明 内面:不明	胎土:1mm以下の砂粒を含む。 焼成:白灰 色調:黄褐色	
2	波形器台砂礫層か 脚残		21.5	ハの字状に聞く下台部。 脚部は短い。	外面:ココナデ 内面:脚部ココナデ、体部ヘラケズリ	胎土:1mm以下の砂粒を含む。 焼成:白灰 色調:黄褐色	
-3	高杯 (环部)	砂礫層2 (河底)		脚部内面に深さ3.5mm の刺突痕。	外面:小明 内面:カキカ	胎土:1~2mmの大砂粒を含む。 焼成:良好 色調:黄褐色	
-4	高杯 (脚部)	泥質		長い円筒状の脚筒部。	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	胎土:1mm以下の砂粒を含む。 焼成:良好 色調:黄褐色	
-5	高杯 (环部)	砂礫層2 (河底)		环底部は丸底状を呈し、 外周に段をもつ。	外面:不明 内面:ヘラミガキ	胎土:1mm以下の砂粒を含む。 焼成:良好 色調:黄褐色	

- 6	高环 (脚部)	砂砾层	脚径	12.2	脚部部から内曲して大きな開き円形の透かしを三つもつ。	外側：筒部へラミガキ 内面：筒部へラケズリ	地土：1mm人の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：茶褐色
- 7	高环 (环部)	砂砾层	口径	14.4	椭形の环部	外側：不明 内面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラミガキ	地土：1~3mm大の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：茶褐色
- 8	高环 (脚部)	砂砾层	脚径	11.0	円筒形の脚部部から大きく開く。	外側：不明 内面：筒部へラミガキ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：茶褐色
- 9	高环	砂砾层 2 (河岸)			やや丸味をもつ环底、脚部部は円筒状、方形の透かしをもつ。	外側：本環部ハケ目、脚部 ヘラミガキ 内面：筒部へラミガキ、 筒部へラケズリ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：灰褐色
- 10	高环	砂砾层	口径	17.0	ゆるやかに内湾する环部、筒部に脚が付く。	外側：口縁部ヨコナデ、脚部 ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、口縁部へラミガキ	地土：1~2mm大の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：茶褐色
- 11	高环 (环部)	砂砾层	口径	18.4	体部は大きく外傾する。环底部はやや丸味をもつ。脚部部に凹面に刺突感あり。	外側：ハケ目 内面：口縁部ハケ目、底 部へラミガキ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：普通 色調：灰褐色
12	高环 (脚部)	砂砾层			椭形の环部、脚部部内面に刺突感あり。	外側：不明 内面：不明	地土：1~3mm大の砂粒を含む。 砂粒：普通 色调：茶褐色
- 13	高环	砂砾层			脚部部は円筒状、脚部部内面に刺突感あり。	外側：筒部部へラミガキ 内面：筒部へラミガキ、 筒部へラケズリ	地土：密 砂粒：普通 色调：茶褐色
- 14	高环 (脚部)	砂砾层			环底部はやや丸味をもつ。	外側：不明 内面：へラミガキか	地土：密 砂粒：普通 色调：灰褐色
- 15	高环 (脚部)	砂砾层	底径	12.8	円筒形の脚部部から大きな開き、内側に环部から伸びる大きな突起がある。	外側：ハケ目 内面：筒部へラケズリ、 筒部部へハケ目	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：良好 色调：茶褐色
- 16	低脚环 (脚部)	砂砾层	底径	9.2	「ハ」の字状に開く。円形透かしを一方にもつ。	外側：筒部へラミガキ、横 部はヨコナデ、筒部部はヘラミガキ、 筒部部はヘラケズリ、 筒部部はハケ目ヨコナデ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：良好 色调：茶褐色
- 17	上脚支撑	砂砾层 2 (河岸)	底径	13.5	円柱形を呈す脚部。底部は高さ3.3cm程えぐられage底となる。	外側：縱方向の荒いケズりにより面取りができている 内面：筒部部ヨコナデ、他はヘラケズリ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：白好 色调：灰褐色
- 18	瓶	砂砾层	底径	13.8	体部はやや外傾する。器に径0.6cmの孔をもつ。	外側：ハケ目 内面：筒部部ヨコナデ、他はヘラケズリ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：良好 色调：灰褐色
- 19	瓶	砂砾层	底径	12.4	体部はやや外傾し、瓶部はすぼまる。筒状となる。	外側：不明 内面：体部へラケズリ、筒部部ヨコナデ 体部と瓶部の接には無縫合が残る。	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：良好 色调：灰褐色
- 20	瓶 (把手部)	砂砾层	断面最大幅	4.0	牛角狀の把手	表面：荒いナテ	地土：1mm以下の砂粒を含む。 砂粒：良好 色调：茶褐色

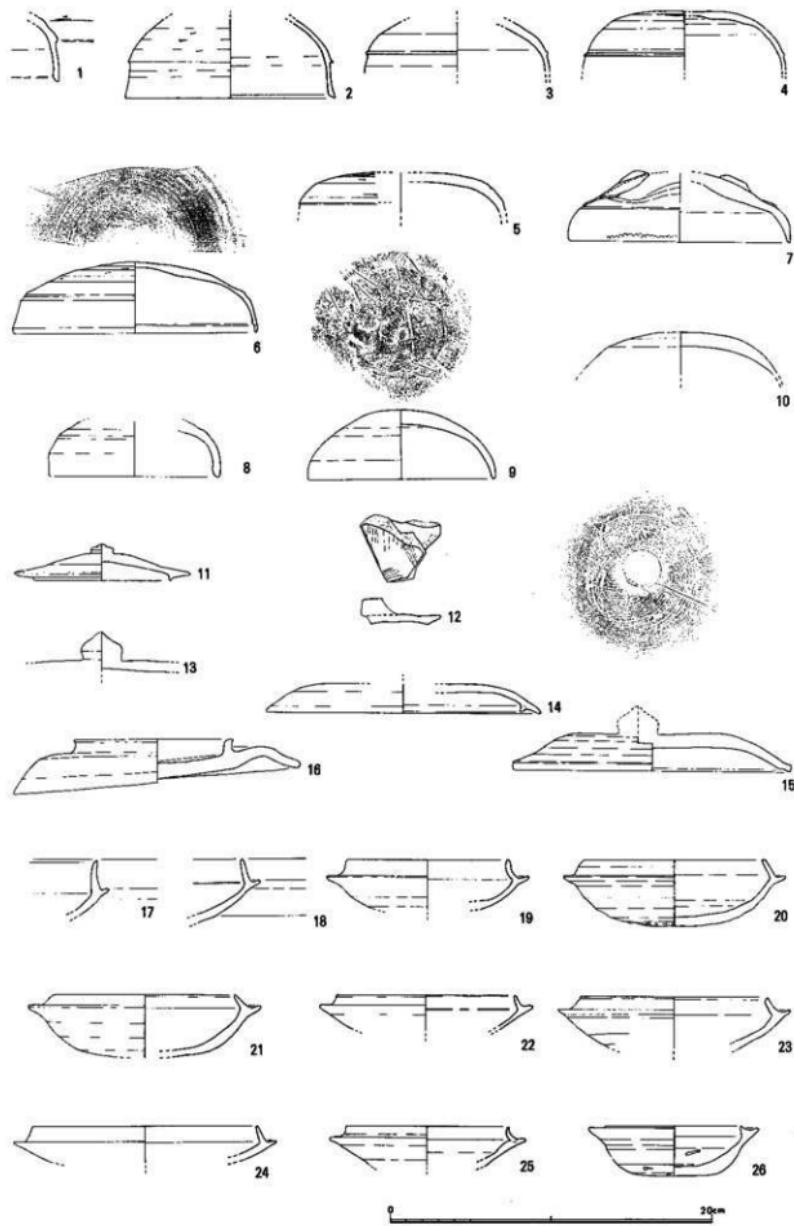


大で、3, 4, 7, 8, 11は完形品。1は体部が外傾し、口縁部は直立する。2~9の体部は内湾し、口縁部はくびれをもつ。10~12は体部が湾曲し、口縁部はやや内傾する。

第97図は奈良時代から平安時代前半の环である。高台はなく、底部は回転糸切り。口径11.7~14.3cm、器高3.5~4.5cm大で、2は完形品。1, 2の体部はやや内湾、3は直立気味に立ち上がる。5, 6の体部は外開きで、5は長く直線的に立ち上がる。

第98図は奈良時代の大形の环である。口径16.1~17.6cm、器高5.7~6.4cm。高台はなく、底部は回転糸切り。1の体部は外開き、2~3は少し内側に湾曲する。1, 2の口縁部外側には一条の沈線に入る。4の外側底部にヘラによる回転を利用した連続する圧痕が残る。

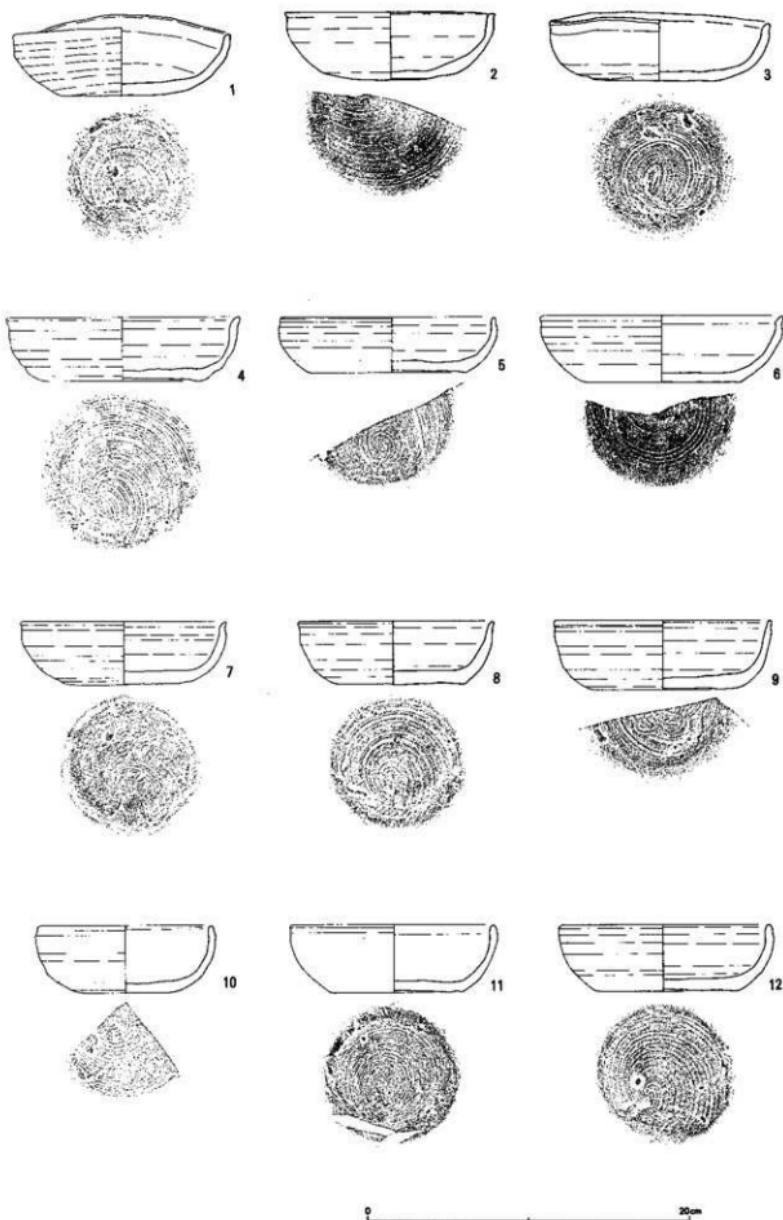
第99図は奈良時代~平安時代前半の环である。1~9は低い高台をもつ。1, 8, 9は回転糸切り、3, 4, 7は静止糸切り。2, 3, 4の器高は4.3~4.6cmと低く、体部はやや内湾する。7, 8は口径17.5cm、高さ9.0cmの大形品で、体部は内湾する。9は、体部がやや外開き状で、直線的に立ち上がり、低い高台が底部の端につく。10は長い体部が外開きとなり、直線的に立ち上がる。10は奈良時代末から平安時代前半で、須恵器生産が衰退する時期に当たる。



第95図 II - A区沙疊層出土須恵器実測図(1) (1 : 3)

表14 II-A区砂礫層出土須恵器(1)観察表

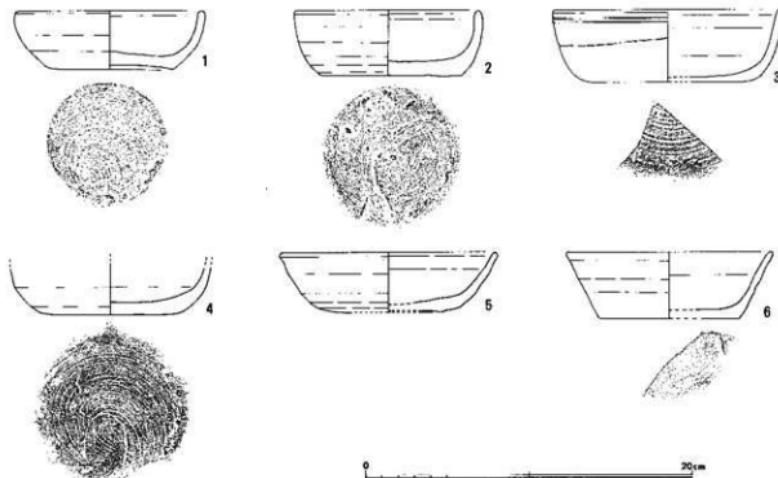
発見番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
95-1	須恵器 环壺	砂礫層2 (河原)		天井部と直立する口縁部 との境に鋸い棱をもつ。 口縁部内面に段。	外面：回転ナデ。天井部 へラケズリ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色		
-2	环壺	砂礫層	口径 13.0	蓋形态は丸く、天井部はやよい 立すをもつ。口縁部内面に 段。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色		
-3	环壺			天井部と口縁部の境に鋸 い棱をもつ。	外面：天井部へラケズリ。 他のは回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色		
-4	环壺	砂礫層		天井部は丸く、口縁部と の境に棱をもつ。	外面：天井部へラケズリ。 他のは回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色		
-5	环壺	砂礫層2 (河原)		天井部は丸く、口縁部の 境に棱をもつ。	外面：天井部へラケズリ。 体凹凸ナデ 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色		
-6	环壺	砂礫層	口径 15.0	天井部は丸くなり、口縁部 との境に棱をもつ。 口縁部内面に沈線。	外面：天井部へラケズリ。 他のは回転ナデ 内面：体凹凸回転ナデ。天 井ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色		
-7	环壺	砂礫層	口径 13.6	天井部は丸くなる。 体凹凸と口縁部の境に沈 線がある。	外面：天井部へラケズリ。 他のは回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	焼けひずみらしい。 の跡がある。 (外面)	
-8	环壺	砂礫層	口径 10.4	天井部は丸く、口縁部は 直角気味。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	内面にスヌ付着。	
-9	环壺	口径 器高	11.4 4.3	天井部から口縁部にかけ て丸くなる。	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：1cm以上の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗青色	外面天井部に/ の窓印あり。	
-10	环壺	砂礫層		天井部は丸くなる。	外面：天井部へラケズリ 内面：天井部ナデ。他の は回転ナデ	胎土：密 焼成：不良 色調：黄褐色		
11	壺	砂礫層	口径 器高	10.9 2.3	低い宝珠つまみとかえり をもつ。	外面：天井部へラケズリ。 他のは回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：1cm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗青色	
-12	壺	砂礫層		かえりをもつ。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	壺片と溶結する。	
-13	壺	砂礫層	つまみ高 つまみ径	1.7 2.6	宝珠状のつまみをもつ。	外面：回転系切りか 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色	
-14	壺	砂礫層2 (河原)	口径	17.0	かえりをもつ。	外面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	
-15	壺	砂礫層2 (河原)	口径 つまみ高 つまみ径	17.1 2.5	口縁部はわずかに開削す る。	外面：1mm級回転ナデ。天 井部開削系切り 内面：口縁部回転ナデ。天 井ナデ	胎土：1cm以上の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗褐色	完形品 (宝珠のみ欠く)
-16	壺	砂礫層	口径 器高 底径	18.0 3.6 9.7	部はやや外反し、底部 内側に低い台面をもつ。	外面：1mm級回転ナデ。底 部へラケズリ 内面：口縁部回転ナデ。底 部ナデ	胎土：1cm以上の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗褐色	完形品 焼けひずみ著 しい。
-17	壺	砂礫層		たちあがりは高く、内傾 後曲。	外面：回転ナデ。底部へ ラケズリ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色		
-18	壺	砂礫層		たちあがりは高く、垂直 に近い。	外面：口縁部回転ナ デ。底部へラケズリ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色		
-19	盖 环身	砂礫層2 (河原)	口径	10.0	たちあがりは高く、内傾 後曲ある。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗褐色	外表面緑褐色の 自然釉かかる。
-20	盖环身	砂礫層	口径 器高	11.2 4.1	たちあがりは高く、やや 内傾する。	外面：口縁部回転ナデ。底 部へラケズリ 内面：回転回転ナデ。底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗褐色	
-21	蓋环身	砂礫層	口径 器高	11.2 4.0	たちあがりは短く、内傾 する。	外面：1mm級回転ナデ。底 部へラケズリ 内面：口縁部回転ナデ。底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	
-22	蓋环身	砂礫層	口径	11.0	たちあがりは短く、内傾 する。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	
-23	蓋环身	砂礫層2 (河原)	口径	11.6	たちあがりは短く、内傾 する。	外面：口縁部ヨコナデ。底 部ナデ 内面：口縁部回転ナデ。底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗褐色	
-24	蓋环身	砂礫層	口径	13.8	たちあがりは短く、内傾 する。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	
-25	蓋环身	砂礫層	口径	10.0	たちあがりは短く、内傾 後曲。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗褐色	
-26	蓋环身	砂礫層	口径 器高	10.5 3.1	たちあがりは短く、大き く内傾する。 部から底部は丸くなる。	外面：1mm級回転ナデ。底 部へラケズリ 内面：口縁部回転ナデ。底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗褐色	完形品



第96図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(2)(1:3)

表15 II-A区砂礫層出土須恵器(2)観察表

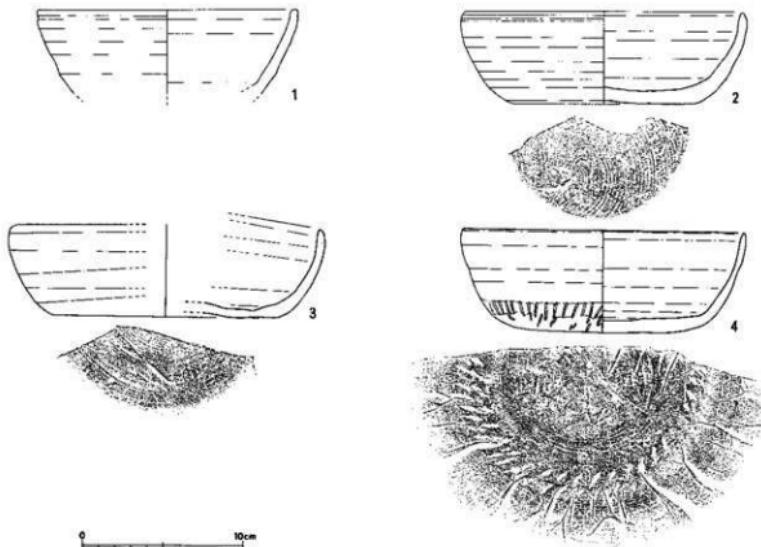
調査番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
96-1	須恵器 环	砂礫層	口径 器高 3.8	13.4 体部はやや内湾気味にた ちあがる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：泥 焼成：良好 色調：暗青色	焼けひずみ
-2	环	砂礫層	口径 器高 4.2	15.0 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれさせる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む 焼成：良好 色調：灰褐色	
-3	环	砂礫層	口径 器高 4.2	13.6 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれをもつ。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm大の砂粒を含 む 焼成：良好 色調：暗青色	完成品
-4	环	砂礫層	口径 器高 3.9	14.1 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：泥 焼成：良好 色調：茶褐色	ほぼ完形
5	环	砂礫層	口径 器高 3.4	13.3 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれる。底面 をやや上げ底。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、ガキ 底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	
-6	环	砂礫層	口径 器高 4.1	15.0 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む 焼成：良好 色調：灰褐色	
-7	环	砂礫層	口径 器高 3.9	12.8 体部はやや内湾し、口縁 部外面をくびれる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm大の砂粒を含 む 焼成：良好 色調：暗青色	完成品
-8	环	砂礫層	口径 器高 3.9	11.8 体部はやや内湾し、口縁 部外面は僅かにくびれる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含 む 焼成：良好 色調：暗青色	光形品 ひずみ著しい。
-9	环	砂礫層	口径 器高 4.3	13.4 体部はすこし外反する 口縁部外面に一筋の印加 入る。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：泥 焼成：良好 色調：青褐色	
-10	环	砂礫層	口径 器高 4.2	10.6 体部はやや内湾し、口縁 部外面は僅かにくびれる。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：泥 焼成：良好 色調：暗青色	
-11	环	砂礫層	口径 器高 4.2	12.9 体部はやや内湾し、口縁 部外面は僅かにくびれる。 底面上げ底。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：茶褐色	完成品
-12	环	砂礫層	口径 器高 4.1	15.0 体部は僅かに内湾する。	外面：体部回転ナデ、底 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：泥 焼成：良好 色調：灰褐色	



第97図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(3)

表16 II-A区砂礫層出土須恵器(3)観察表

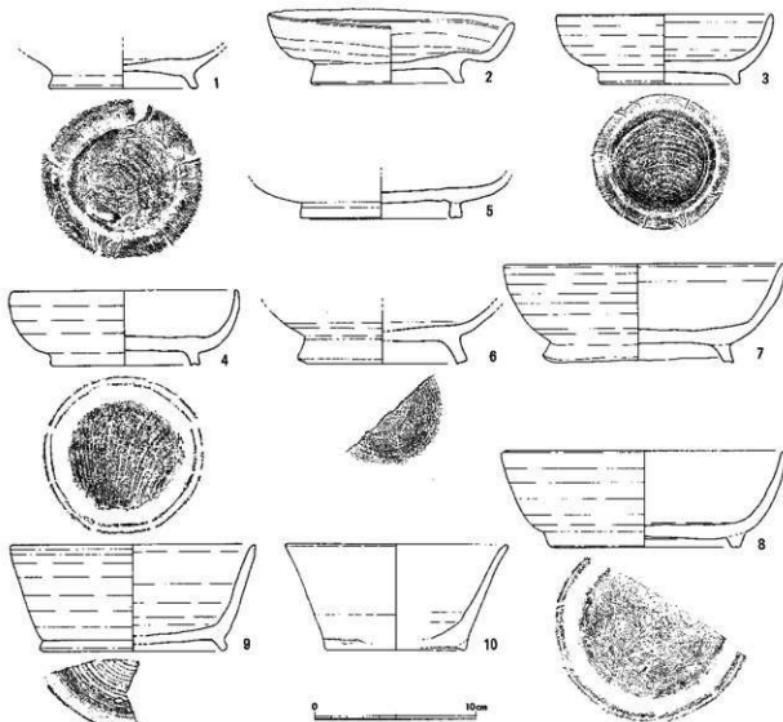
標識番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
97-1	須恵器 坏	砂礫層	口径 11.8	体部はやや内湾気味に立ち上る。底部は上げ底となる。	外面：体部回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰青色	
-2	坏	砂礫層	口径 11.7	体部はやや内湾気味に立ち上り、口縁部は直立する。	外面：体部回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色	完形品
-3	坏	砂礫層	口径 14.3	体部はやや外反する。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色	
-4	坏	砂礫層		体部はやや内湾する。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-5	坏	砂礫層2 (河道)	口径 13.4 器高 3.7	体部は外傾する。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色	
-6	坏		口径 12.8	体部は直線的に外傾する。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色	



第98図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(4)(1:3)

表17 II-A区砂礫層出土須恵器(4)観察表

標識番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
98-1	須恵器 坏	砂礫層	口径 16.1	体部はやや外開きにたちあがる。 口縁部外縁に一条の沈線	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	
-2	坏	砂礫層	口径 17.2 器高 5.7	体部はやや内湾し、口縁部外縁に一条の沈線入る。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	大型品
-3	坏	砂礫層	口径 17.4 器高 5.7	体部はやや内湾し、底部はやや上げ底。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ、底部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：灰褐色	抜けひずみあり。 大型品
-4	坏	砂礫層	口径 17.6 器高 6.4	体部はわずかに外傾する。 体部と底部の境に、へらによる飛躍状の圧痕が残る。	外面：全体回転ナデ、底部回転ナデ 内面：全体回転ナデ	胎土：1~2mmの砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	大型品

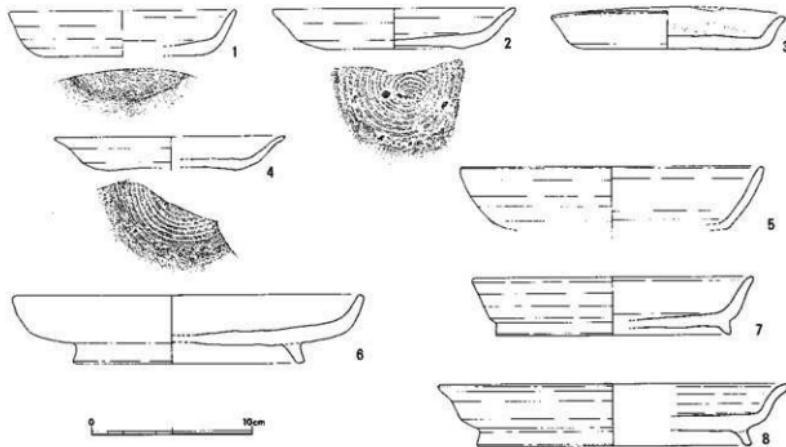


第99図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(5)(1:3)

表18 II-A区砂礫層出土須恵器(5)観察表

発見番号	器種	断面	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
99-1	須恵器 环(高台付き)	砂礫層	底深 9.2	底部に低い高台をもつ。	外面：回転ナデ 内面：ナデ	胎土：陶 焼成：良好 色調：灰褐色	
-2	环 (高台付き)	砂礫層	口径 15.4 器高 4.6 底径 9.5	やや外反する口縁部をもち、底部外縁よりかなり内側に高台が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部ナデ 内面：底部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：灰褐色	焼成時のひずみ あり。 完形品。
-3	环 (高台付き)	砂礫層	口径 12.8 器高 4.3 底径 8.2	やや外反する口縁部をもち、底部外縁に低い高台が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部ナデ 内面：底部回転ナデ、ナ デ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	ほぼ完形
-4	环 (高台付き)	砂礫層	口径 14.1 器高 4.6 底径 9.0	やや内溝する口縁部をもち、底部外縁にしつかりした高台が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部ナデ 内面：底部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：出灰 色調：暗青色を呈す。	
-5	环 (高台付き)	砂礫層	底深 9.8	底部外縁よりかなり内側 にもつぶ、しっかりした 高台が付く。	外面：回転糸切り後ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：暗青色	
-6	环 (高台付き)	砂礫層	底深 10.4	底部外縁に外開きの高台 が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部カキ目状回転ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：暗青色	
-7	环 (高台付き)	砂礫層	口径 17.6 器高 9.8 底径 11.8	やや内溝する口縁部をもち、底部外縁にしつかりした 高台が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部糸切り後ナデ、底 部ナデ 内面：底部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1mm以上の砂粒を 含む。 焼成：白灰 色調：暗青色	
-8	环 (高台付き)	砂礫層	口径 17.6 器高 9.0 底径 11.8	やや内溝する口縁部をもち、底部外縁にしつかりした 高台が付く。	外面：底部回転ナデ、底 部糸切り後ナデ、底 部ナデ 内面：底部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：白灰 色調：(外) 暗青色 (内) 茶褐色	

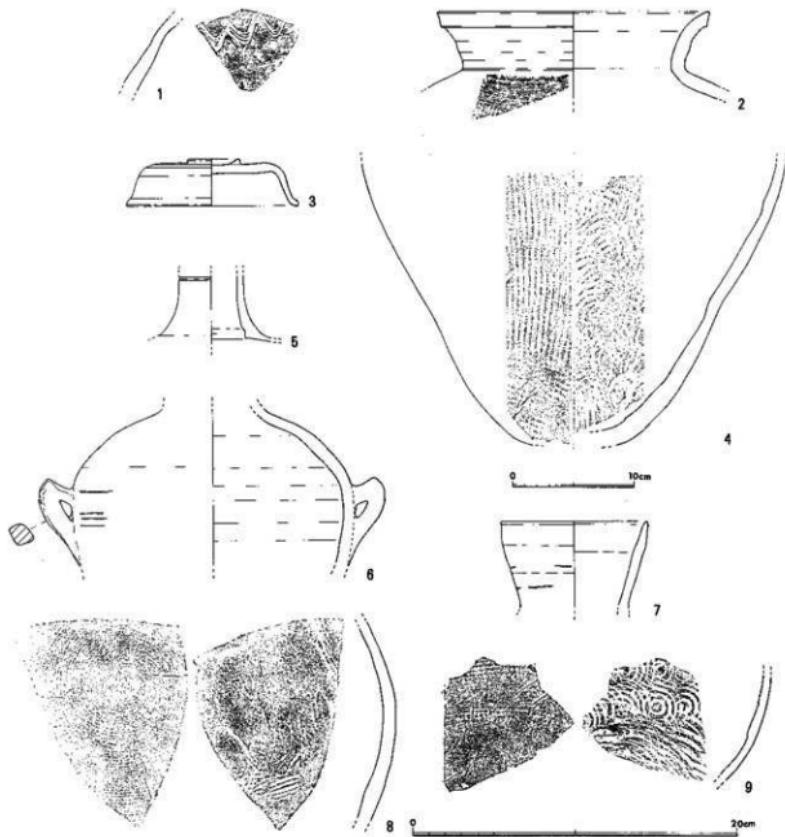
-9	环 高台付き	砂礫層	口径 器高 底径	15.1 6.6 11.6	体部はやや外開き、底部 外縁に低い高台が付く。	外面：体部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：普通 色調：灰褐色
-10	环 高台付き (内縁)	砂礫層 2	口径 器高 底径	13.8 6.6 8.8	長く、やや外反する体部 外縁に低い高台が底部外縁に 付く。	外面：不明 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：不良 色調：灰褐色



第100図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図 (6) (1 : 3)

表19 II-A区砂礫層出土須恵器 (6) 観察表

探査番号	器種	部位	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
100-1	須恵器 皿	砂礫層 器高	口径 14.0 器高 2.8	口縁部は短くやや外反する。	外面：口縁部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	
-2	皿	砂礫層 2 (内縁)	口径 15.0 器高 2.5	口縁部は短く外反する。 上げ底。	外面：口縁部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1 mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：暗灰色	
-3	皿	砂礫層 2 (内縁)	口径 14.5 器高 2.6	口縁部は短く外反する。	外面：口縁部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1 mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：暗青色	実物品 内面と外面口縁 の一部にスヌ付 着。
-4	皿	砂礫層 2 (内縁)	口径 14.2 器高 2.1	口縁部は短く外反する。 底部上げ底。	外面：口縁部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1 mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：暗青色	
-5	环	砂礫層	口径 18.7	体部は外傾する。	外面：体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青色	高台を有す。
-6	盤	砂礫層	口径 22.7 器高 4.2 底径 12.3	体部はやや滴垂する。底 部外縁よりかなり内側に 低い高台がつく。	外面：体部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：1 mm以下の砂粒を 含む。 焼成：良好 色調：暗い乳色	底部外縁付近と 底部内面にミガ キ痕あり。
-7	盤	砂礫層	口径 17.7 脚径 14.3 器高 2.6	体部は短くやや外傾する。 口縁部内面にかすかな模 型を有す。底部外縁に低い高 台を有す。	外面：体部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-8	盤	砂礫層	口径 21.6 脚径 17.0 器高 3.8	体部は外反する。 底部外縁に低い高台を有 す。	外面：体部回転ナデ、底 部内縁部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	



第101図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(7)(1:3, 4は1:4)

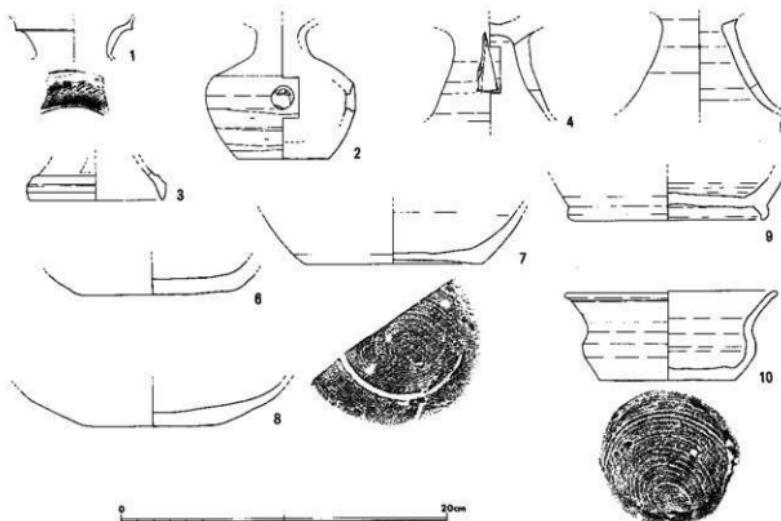
第100図は奈良時代末から平安時代初めの皿(1~4)と盤(6~8)である。底部は全て回転糸切り。皿は口径14.0~15.0cmで、器高2.1~2.8cmを測り、体部は短く、外に開く。3は内外面にスヌが付着しており、灯明皿に使用されたと推定される。盤は口径17.7~22.7cm、器高2.6~4.2cmを測る。6は体部は短く、外開きとなり、底部の内側に高台がつく。7は体部が外開きで、底部の外縁に高台がつく。8は体部が短く、外反する体部は短く、外反する。

第101図は甕(1, 2, 4)と壺の蓋(3)および壺(5~9)である。1は大きく外反する甕の頸部で、外面にクシによる細かな線による波状文がつく。2も甕の口縁部。短く、外反する。3は小壺の蓋。輪状の低いつまみがつく。肩部外面にミガキが認められる。5は長頸壺の頸部。奈良時代か。6は双耳壺。胴部に三角形の穴が開く耳がつく。これより蓋を有す壺と推定される。奈良時代から平安時代にかけてのものか。7は平瓶の口縁部。8, 9は提瓶の胴部。古墳時代後期のもの。

第102図は甕(1, 2)と高杯(3~5)および壺(6~10)である。1は甕の頸部。口縁部と頸部の境にある稜は鋭く、頸部にはクシによる細かな線による波状文がつく。時期は古墳時代中期末から

表20 II-A区砂礫層出土須恵器(7)観察表

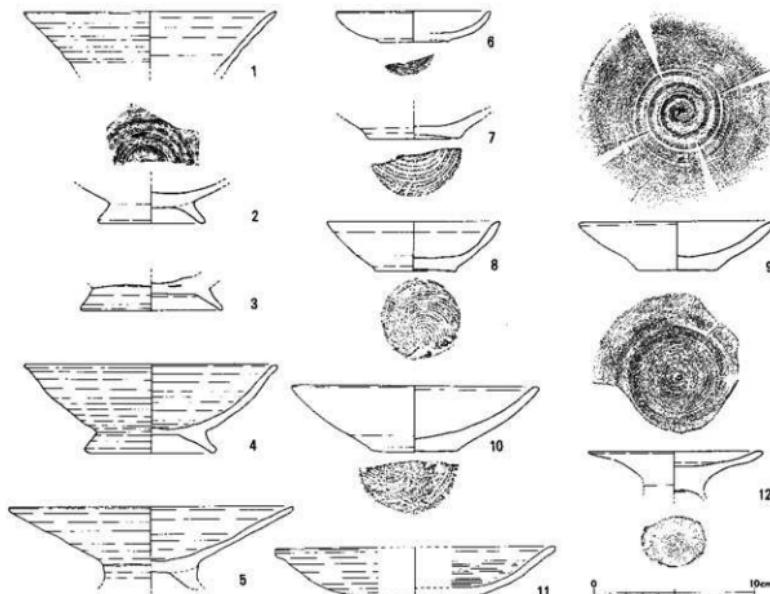
標題番号	器種	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
101-1	須恵器 甕	甕上中		口縁部やや外傾する。 外面に四条のタキによる 波状文を施す。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-2	甕	砂礫層	口径 16.8	口縁部は外反する。	口縁部回転ナデ、肩部平 行タキ 内面：口縁部回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色	
-3	甕	砂礫層	口径 10.6 器高 3.9 つまみ径 3.2	輪状の小さなつまみをも つ 肩部は折り、口縁端部は 外へ屈曲する。	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底 部ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色	完形品 外面底部にミガ ナ
-4	甕	砂礫層 2 (河邊)		底部はとがり気味	外面：平行タキ 内面：同心円状タキ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。白糸 色調：青灰色	底部は焼成前に 穿孔する。
-5	長颈甕	砂礫層		筒状の頸部。中央に沈線 一条を施す。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-6	双耳甕	砂礫層		肩部に耳を付す。	外面：肩部回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-7	甕	砂礫層	口径 9.0	口縁部は直行する。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	
-8	提瓶	砂礫層 2 (河邊)		胴部の破片	外面：カキ目 内面：ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を 含む。白糸 色調：灰褐色	
-9	提瓶	砂礫層 2 (河邊)		胴部の破片	外面：平行タキ後細か なカキ目 内面：同心円状タキ	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色	



第102図 II-A区砂礫層出土須恵器実測図(8)(1:3)

表21 II-A区砂礫層出土須恵器(8)観察表

標印番号	器種	層位	法盤(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
102-1	須恵器 瓶	高土中		瓶底から口縁部にかけての小破片。 ランによる波状文	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	胎土: 所 焼成: 良好 色調: 灰褐色	内面に自然釉
-2	盤	砂礫層	底径 5.6	半底 肩部は張り、やや球形。	外面: 陶器から回転動輪 底底同軸切られ後ナデ 内面: 回転ナデ	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
-3	高杯 (脚部)	砂礫層2 (河道)	脚径 9.3	脚端部は肥厚し、腹かに内側する。 透しをもつ。	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
-4	高杯 (脚部)	砂礫層		二角形の透しを二側もつ。	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	胎土: 1mm大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
5	高杯 (脚部)	砂礫層		二方に透しをもつ。	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
-6	盃	砂礫層	底径 9.5	半底	外面: 回転余切り後ナデ 内面: ナデ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
-7	盃	砂礫層	底径 10.8	上げ底	外面: 回転余切り 内面: ナデ	胎土: 所 焼成: 普通 色調: 淡灰色	
-8	盃	砂礫層2 (河道)		平底気味	外面: 体部ハラケズリ、 底部ナデ 内面: ナデ	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰褐色	底部内面にスス付着
-9	盃	砂礫層	底径 11.6	平底の外縁に低い凸台が付く。	外面: 体部回転ナデ。底 部ナデ 内面: ナデ	胎土: 1~2mm大の砂粒 を含む 焼成: 良好 色調: 灰褐色	
-10	広口盃	砂礫層	口径 高さ 底径 5.6 8.4	外上方に大きく立ちあがる る口縁部をもつ。 底盤平底	外面: 体部回転ナデ。底 部余切り 内面: 回転ナデ	胎土: 所 焼成: 良好 色調: 黄褐色	完形品



第103図 II-A区出土平安時代土師器実測図 (1:3)

後期初め。2も腹で、口縁部を欠く。底部は回転糸切りで、平底。奈良時代。3は高环の脚部。端部は肥厚し、僅かに内湾する。4、5は高环の脚部。「ハ」字状に広がる筒部で、上方に透かしをもつ。IV期で、古墳時代後期後半。

6～8は壺の底部。9は底部の端に低い高台をもつ。6、7は回転糸切り。10は広口壺で、完形品。口縁部は「く」字状に開き、胴部は低い。底部は糸切りで、平底。

平安時代以降の土師器（第103図）

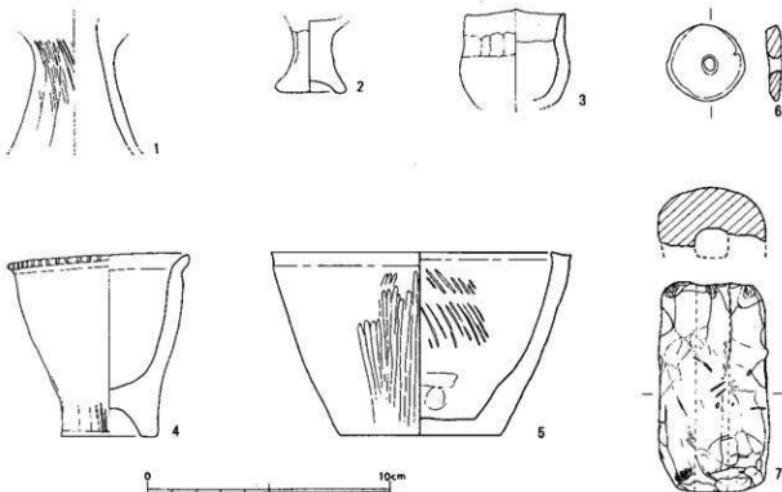
第103図は平安時代を中心とする土師器である。これらは、いずれも平安時代後半の河道に伴う土器である。1は口径15.6cmの大形品。口縁部は直線状で、大きく外に開く。2～5は「ハ」字状に開く高台をもつ。4は口径15.5cmの碗。体部はやや丸みをもち、口縁部外面はやや外反し、口縁部外面は玉縁状に肥厚する。5は壺で、口径15.5cmの人形品。体部はやや内湾する。8～10は外に傾く。11は体部がやや外反気味に大きく開く。12の体部は水平に近く広がる。高台を欠く。

ミニチュア土器・土製品（第104図）

第104図-1は外面に赤色顔料の塗布された土師器高台。古墳時代後期。2、3は手捏土器。2は高环、3は壺。時期は古墳時代。4、5はミニチュア土器。4は甕で、口縁部は僅かに外反し、刻目をもつ。弥生時代前期。6は紡錘車。弥生土器の再利用。径3.1cm、厚さ0.5cm。孔の大きさは0.8cm。7は土鍤。人形で管状を呈す。手捏で、表面に指頭圧痕が残る。

表22 II-A区出土平安時代土師器観察表

発掘場所	器種	肩位	法身(m)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
103-1	土師器 壺	口縁	15.6	体部は開き気味に立ちあがる。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：不良 色調：黄褐色	
-2	环 (高台付) 記載(河道)	底盤	6.5	高さ1cmのハの字に開く高台をもつ。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：紫白色	
-3	环 (高台付) 砂礫層	底盤	8.8	高さ1cmのハの字に開く高台をもつ。	外面：不明 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：黄褐色	
-4	碗	記載(河道)	15.5	高さ1.5cmのハの字に開く高台をもつ。 内部は外に大きく開く。 器底は石子で覆われて底盤となる。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡灰色	
-5	壺 (高台付)	砂礫層2 (河道)	17.3	体部は外に大きく開く。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：1～3mm大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：灰褐色	
-6	壺	砂礫層2 (河道)	9.6	体部はやや内湾気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡灰色	
-7	壺	記載(河道)	4.2	体部は外に大きく開く。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：淡褐色	
-8	壺 (河道)	口縁 器高 底盤	10.7 3.1 5.0	体部は石子で内湾気味に立ち上る。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	胎土：1mm以下の砂粒を含む 焼成：良好 色調：紫褐色	
-9	壺	砂礫層 (河道)	12.2 3.1 4.9	体部は外に大きく開く。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡褐色	完形品
10	壺 (河道)	口縁 器高 底盤	19.3 4.1 6.2	体部は外に大きく開く。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色	
-11	壺	砂礫層 記載	17.4 3.2 6.8	体部はやや内湾気味に大きく開く。	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：黄褐色	外外面に一部崩壊あり。
-12	壺 (高台付) (河道)	口縁	11.0	体部は水平に近い粗厚。	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好 色調：淡黄色	完形品



第104図 II-A区砂礫層出土ミニチュア土器・土製品実測図 (1 : 2)

表23 II-A区砂礫層出土ミニチュア土器・土製品観察表

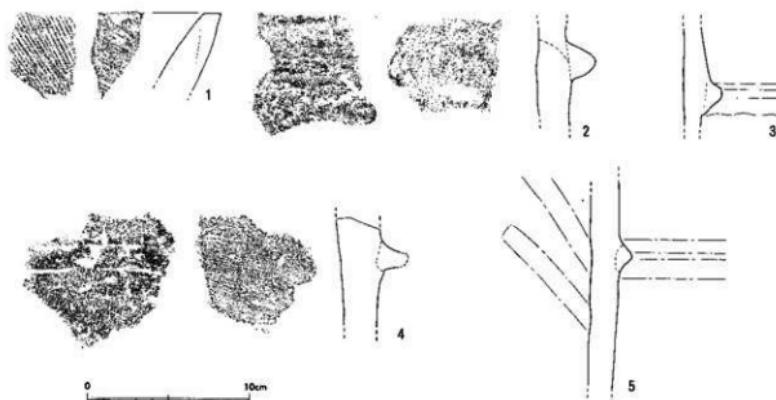
調査番号	器種	層位	法尾 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴：胎土・焼成・色調	備考
104-1	土器器 高环	砂礫層 2 (河底)		筒状の脚部	胎土：密 焼成：普通 色調：肌色 外側に赤色顔料 塗布	
- 2	高环	砂礫層	底径 3.0	脚部から胴部へゆるやかに広がる。	胎土：ナデ 内面：ナデか	手捏土器 手捏土器
- 3	盞	砂礫層	口径 4.0	口縁部は直立し、胴部は球形となる。	胎土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色 外側に赤色顔料 塗布	手捏土器
- 4	甕上器 蓋	砂礫層	口径 7.5 高さ 4.0	口縁部は厚く、「く」の字に凹曲する。 底部は平らで、1 cm程上り直となれる。口縁部に刻目をもつ。	胎土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：黄褐色 外側に赤色顔料 塗布	ミニチュア土器
- 5	鉢	砂礫層	口径 12.3 高さ 6.6 底径 6.6	体部は直線状に外傾する。 平底	胎土：1 mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：黄褐色 外側に赤色顔料 塗布	ミニチュア土器
- 7	土盤	砂礫層	長さ 8.5 厚さ 4.4 径 1.4	管状の大形品	胎土：密 焼成：良好 色調：黄褐色 表面に黒斑	

円筒埴輪 (第105図)

円筒埴輪は5点を図化した。1は口縁部の破片。調整は外面はナデ、内面ハケ。2～4はタガ部分の破片。調整は内外面ともハケ。焼成は良く、赤褐色を呈す。

石器 (第106図)

第106図は黒曜石製石鏃である。長さ3.1cm、幅2.0cm、重さ 2.94 g。四基式石鏃。



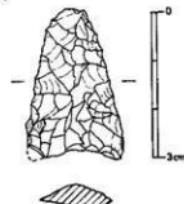
第105図 II-A区砂礫層出土円筒埴輪実測図（1：3）

金属製品（第107図）

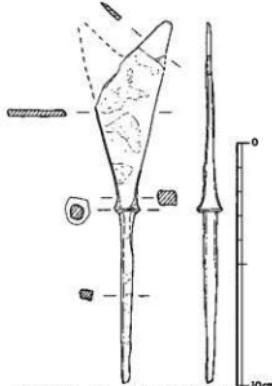
第107図は雁股式鉄鎌で、砂礫層2から出土している。全長は14.8cm。刃部は片方を欠き、もう一方もわずかに先端を欠く。長さは7.7cm、推定復原幅は3.9cm、厚さは0.2cmである。茎部も先端を僅かに欠く。長さ7.1cmで断面は方形で0.4cm角である。

木製品（第108図）

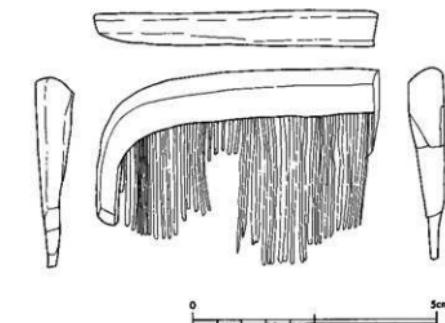
砂礫層中からは、この横櫛1点しか出土していない。平面は半円形を呈し、肩部に凹みをもつ。切り通し線は背の上縁に平行して曲線を描く。現存する幅は5.9cm、高さ4.1cm、棟の厚さは0.8cmである。歯は43本残っているが、3cmあたりでは26枚と、やや疎い。



第106図 II-A区砂礫層出土石鎌実測図（1：1）



第107図 II-A区砂礫層出土
鐵鎌実測図
(1:2)



第108図 II-A区砂礫層出土横櫛実測図（1：1）

(6) II-B区の旧河道の遷り変わり

a. 層序

II-A区と同様に、埋上（暫定掘削時のもの）・耕作土の下からは、河川改修前の水田に伴う遺構を検出している。南壁には埋設桶2の掘り形が、東壁には埋設桶と思われる掘り形がある。これより下層は河川堆積による泥層・砂泥互層・砂礫層よりなる。

南壁の土層を見ると、古い時期の河道の堆積物を削り込んで新しい河道の堆積物が堆積していることから、河道は大きく二つの時期に分けられる。そして、河道は徐々に東に移動していることがわかる。最も古い河道は古墳時代後期の河道である。この河道の堆積作用に伴うのが砂礫層1である。砂礫層1は、調査区の北東から南西に向けて堆積し、やや東に傾いている。砂礫層には縄文土器から須恵器までが混ざっているが、遺物の量は比較的少ない。

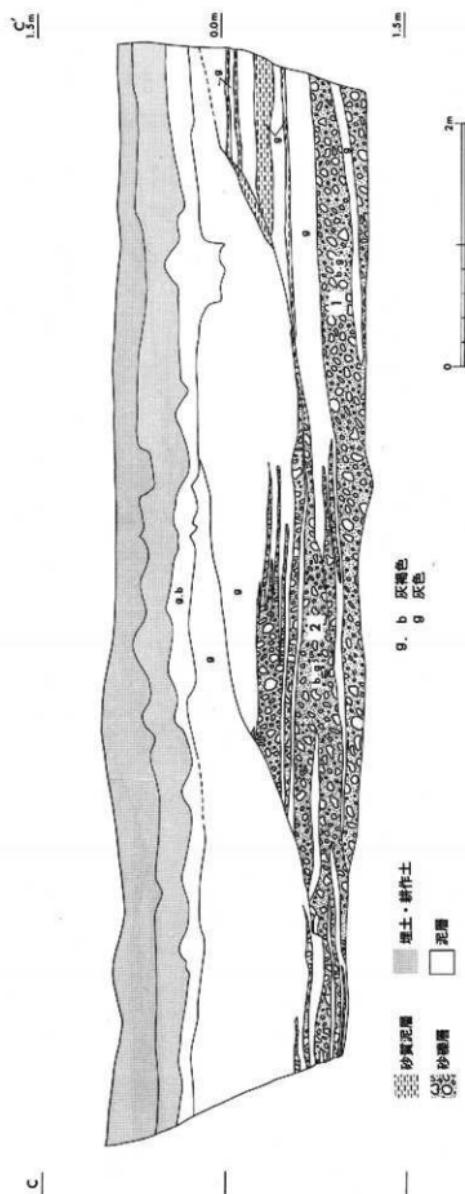
この砂礫層1の直上からは橋脚一点が出土している。また、橋脚の北30cmには大形の自然流木が流れ着いており、流れの速さが強かったことが推定される。この砂礫層の上層には砂泥互層が堆積している。この層には、自然流木や木製品が多く含まれており、土器はわずかに土師器碗1点（第113図）が出土している。この土師器は標高-0.3mの砂質泥層中より出土している。

この砂泥互層は、河道の移動に伴い新しい時期の河川堆積物により大きく削り込まれている。この新しい段階の河道内には砂礫層2が泥層を挟んで堆積している。砂礫層2には奈良時代の須恵器が混じっている。砂礫層は、更に調査区の東で削り込まれておらず、河道が移動したことがよくわかる。この河道に伴う削り込みは東壁でも確認することができ（第111図）、河道が調査区の東端をかすめて、北東から南西に向けて流れているものと思われる。河道内の砂礫層には、ほとんど遺物は混じていなかったが、平安時代の須恵器の高台付きの壺が東壁中より出土した（第111図）。

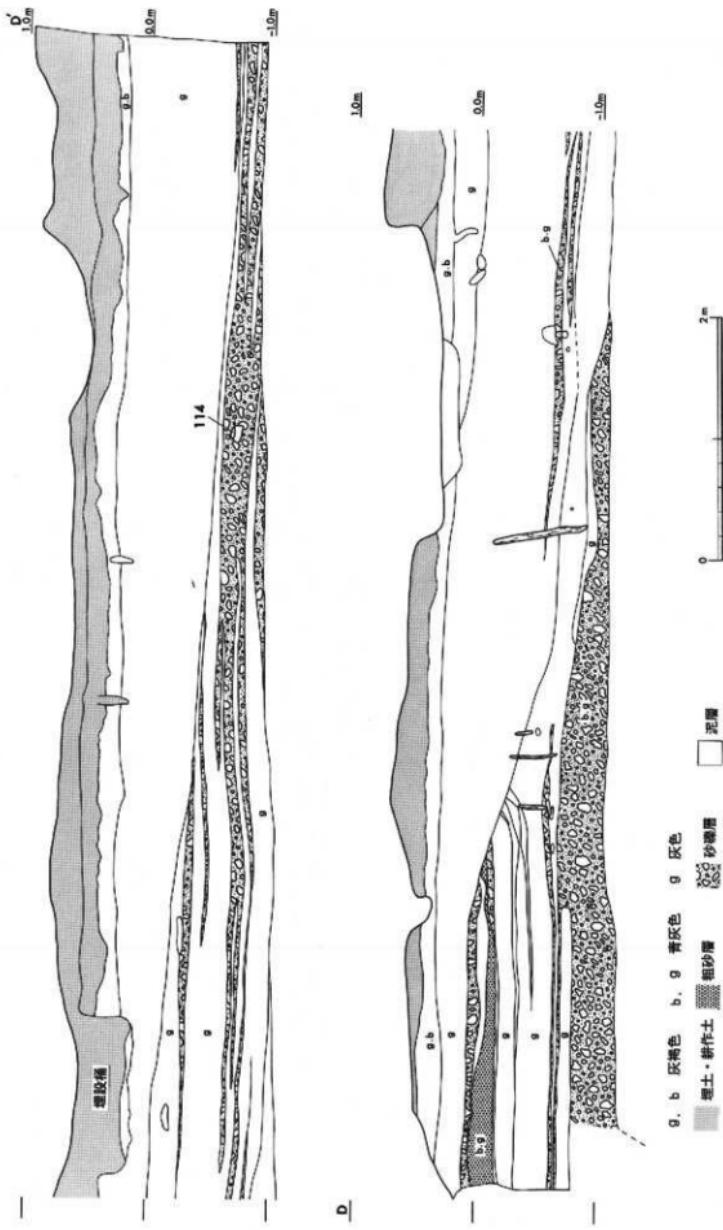
砂泥互層からは自然流木が多く出土している（図版41-1）。これらの出土状況を示したのが第112図である。ただし、これら自然流木総てが同時期に流されたというわけではなく、自然流木の伸長方向から河道の方向をみるとこれを目的として図化している。これを見ると、大まかに河道の流れが北東から南西方向であったことがわかる。このなかで橋脚の周囲には木製品が密に出土している。橋脚とそれと同じ時期に流されてきたと思われる大形の自然流木が約30cm北の砂礫層中より出土している。このことは、河道の流れの激しい増水時であったことを物語っている。また、この2点が漂着したことにより、流れが堰き止められ、濁みが生じたのであろうか。橋脚の西側に泥炭層が堆積していた。

木製品の多くは砂礫層1から出土しており、II-A区の木製品が泥層から出土しているのとは異なる。砂質泥層からは一点、土師器碗が出土している。これはほぼ完形品で出土しており、意図的に河道に流された可能性が考えられる。

以上のことから、II-B区では古墳時代後期から平安時代にかけて河道が徐々に東に移動していくことがわかった。



第109図 II-B区南壁土層堆積図 C-C' ライン (1:40)



第110図 II-B区東壁土層堆積図D-D' ライン (1:40)